
プリキュアオールスターズUniverse&Wing ~ 新たなる戦士の伝説 ~

ファウストK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズUniverse&Wing
〈新たなる戦士の伝説〉

【Nコード】

N7703T

【作者名】

ファウストK

【あらすじ】

世界の支配者コンカロードとの戦いから1ヶ月が経過し、平和な日常が戻ったかに見えた。しかしその平和も束の間、人類の滅亡を企むルーイン帝国がプリキュア達の前に姿を現したことで新たな戦いが始まるのであった。そしてそんな中現れたのは、彼女達も知らない2人のプリキュアだった。

オリキャラの設定(前書き)

どうも！ファウストKです！

遂に続編開始、また応援よろしく願います！

オリキャラの設定

（主人公Side）

・皇リイナ

本作の主人公。15歳。

冷静沈着でおしとやかな性格。銀髪のロングヘアと銀色の瞳がトレードマーク。

2年前にギンと出会い、その際彼から渡された銀の指輪シルバリングを使い、キュアユニバースに変身する。

ギンと出会って以来、プリキュアとして世界を守る為にルーイン帝国と戦い続けるが、徐々にその力に対して疑問を持つようになる。

本家メンバーとは、同年代であるなぎさやほのか、かれんと仲がよい。

イメージCV：新名彩乃

・神村七佳

本作のもう一人の主人公。18歳。

3年前にルーイン帝国によって家族と恋人の命を奪われたのをきっかけに翔太と共にキュアウイングを開発し、装着者となる。

しかし、戦っていく中で次第に真のプリキュアの力を求めるようになってしまう。

基本的に優しい性格だが、その分感情的になることが多く、悪を憎むあまり仲間の命よりも敵の撃破を優先してしまうこともある。

本家メンバーとは、基本的に誰とでも仲良くしており、特にのぞみと響とはよく話が合うらしい。

イメージCV：沢城みゆき

・天宮唯

世界的企業天宮グループの令嬢で、男勝りな性格。

キュアセラフに変身する能力を持っている。

常にリイナと七佳を見守っており、ルーイン帝国を倒す為に彼女達を成長させ、共に帝国に立ち向かう。

少々金銭感覚にズレがある。

イメージCV：かかずゆみ

・ギン

鷹の様な外見をしたキュアユニバースのパートナー。

リイナの中に眠るプリキュアの力を感じ取ったことで彼女にキュアユニバースの力を与え、以来彼女と行動を共にするようになる。

ルーイン帝国についてはかなりの情報を持っているが実は・・・

イメージCV：藤原啓治

・相崎翔太

20歳。七佳の従兄弟。

コンピューターに関する高い知識と技術を持つ。

ルーイン帝国に妹を奪われた過去を持ち、この世界を悪の手から守る為にキュアウイングを開発する。

常に七佳のことを心配しており、戦いでも自ら武器を持って戦ったりと何かと七佳をサポートし続ける。

イメージCV：浪川大輔

〈敵Side〉

・ルーイン帝国

宇宙の果てに存在と言われる、通称「破滅帝国」。

全宇宙の支配と人類の滅亡を企む。

かねてより、人類を滅ぼす為に尖兵を送っては地球を攻撃し続けたがその度にキュアムーンライトに阻止され、前皇帝が倒されたことで一時活動を停止する。

しかし、コンカロードがプリキュアに倒されたのをきっかけに再び

活動を再開。

前皇帝直属の部下4人を中心に破壊軍団を結成し、皇帝復活の為に必要とある魔石を奪おうとプリキュア達に襲い掛かる。

・ダイラ星人シヨウキ

破壊軍団幹部にして、4人のリーダー格。

巨大な体格と怪力の持ち主で、体のほぼ半分に鎧を身に纏っている。前皇帝を慕っており、彼を倒したキュアムーンライトを強く憎んでいる。

意外と冷静に物事を考える。

巨大な槍で相手を攻撃する戦い方を得意とする。

イメージCV：高橋広樹

・ヨーク星人グレム

破壊軍団幹部。

軍団唯一の女性幹部で、右腕と左足、及び顔の一部が怪物の半人半獣の姿をしている。

性格は残忍で、卑劣な戦い方を好んで使う。

更に、魔獣を何匹もペットとして飼っており、自らの手下としている。

イメージCV：長沢美樹

・ガイ星人ピユアード

破壊軍団幹部。

黒い長髪が特徴的な男性。

常に群れることを嫌い、感情を表に出すことは滅多にない。

しかしながらその実力は凄まじく、剣の腕に関しては前皇帝にも注目された程。

主に誰かに命令されることなく、自ら行動を起こすことが多い。

イメージCV：子安武人

・ノオデイー星人ザンゴ
破壊軍団幹部。

見た目は、白いスーツを着た美少年の姿をしている。
しかし行動を起こしたことが少ない為、その実力は未だ謎の部分が多く、シヨウキは彼をあまり信用していない。

彼曰く、魔石はプリキュア達が持っているらしいが・・・
イメージCV：小野大輔

・アビューズ星人イワオ
帝国の武器や兵器の開発を担当する幹部。

見た目は地球人にそっくりな中年男性の姿をしている。
前皇帝の死をきっかけにプリキュアの力について異常に興味を持つようになり、ある野望を達成する為にザンゴと手を組む。
イメージCV：飛田展夫

↳その他オリジナル設定

・プリキュア・ブラックキック
キュアブラックが当小説でのみ使用する必殺技。

仮面ライダージョーカーの「ライダーキック」を元に生み出された技で、その名の通り相手に強力なキックを放つ。

前作及び「プリキュアオールスターズAnother Story」でも使用。
「キュアブラック、光の使者の新たな戦い」でも使用。

・プリキュア・ブラックパンチ

こちらにもブラック・キックと同様に当小説でのみブラックが使用する必殺技。

仮面ライダージョーカーの「ライダーパンチ」を元に生み出された。前作及び「プリキュアオールスターズAnother Story」でも使用。
「キュアブラック、光の使者の新たな戦い」でも使用。

・キュアフルーレ、五刀流
プリキュア5が持つ5本のキュアフルーレを同時に扱うという、キュアアクア専用の戦闘スタイル。
前作で使用して以来、アクアが度々使用するようになる。
必殺技は5本のフルーレで相手を同時に切り裂く「キュアフルーレ・ファイブアタック」
キュアノア氏や桔梗氏の作品でも使用されており、敵を撃破した実績を持つ。
ファウストK自身の作品でも、第10話でようやくとどめとして使われた。
モデルは勿論ゴーカイブル。
また、最近シド先輩のあの技も使えるようになった。

オリキャラの設定（後書き）

次回のプロローグの後に本編開始です。

プロローグ「破滅帝国」

地球を離れること何万光年先だろうか。

遙か宇宙の果てに、その帝国は存在した。

「破滅帝国」と恐れられるルーイン帝国が・

帝国のちょうど中心に位置する巨大な城、そこで4人の男女が話していた。

「???」「ねえ知ってる?あのコンカラードがプリキュアに倒されたんですって。」

長い髪を束ねた、半人半獣の姿をした女が尋ねた。

「???」「ああ、もちろんだ。」

体のほぼ半分が鎧で覆われた、体格の大きい男が答える。

女「あの人、世界の支配者とかほざいてた割には全然大したことなかったわねえ。」

男「まあ、奴がどれだけあがいたところで、俺達ルーイン帝国にしてみれば雑魚に過ぎんがな。」

女「ふふ、それもそうね。」

男「ピュアード、貴様はどう思う。」

「???」「・・・」

ピュアードと呼ばれた長身で腰まで届く程のロングヘアーの男は、黙ったまま答えない。

「???」「まあまあ、彼に聞くのはよしてあげましょうよ。」

そこへ、白いスーツで正装をした高校生くらいの顔つきのいい青年がやって来る。

青年「彼はああ見えて、人との交流は苦手な方です。ここは1人にさせてあげましょう。」

女「ザンゴは本当に優しいわねえ。惚れ惚れしちゃうわ。」

男「俺は苦手だな。」

ザンゴ「いえ、お二人にはかないませんよ。それよりシヨウキさん、これからどうなさるんですか？」

ザンゴと呼ばれた青年は男に尋ねた。

シヨウキ「ん？決まってるだろ。邪魔者が死んだ今こそ、俺達ルーン帝国が再始動する時なんだよ！なあ、グレム？」

シヨウキは女にそう言った。

グレム「ええ。そして目指すは、人類の滅亡と全宇宙の支配よ！」

ザンゴ「それにはまず、あの魔石を一刻も早く見つけなくてはいいけませんね。」

シヨウキ「ああ、見ている・・・人間よ、そしてプリキュア共・・・」

グレム「あんた達の苦しむ姿、楽しみだわ・・・」

ザンゴ「ふふ・・・」

ピュアード「・・・」

そして、4人の男女は地球を見つめながら不気味に笑った。

しかし彼等は知らなかった。

地球には今、新たな戦士がいるということ・・・

プロローグ「破滅帝国」(後書き)

次回はまず本家メンバーの登場になります。

ちなみに今回はゲスト参戦は出来れば控えていただけると幸いです。

第1話「戦いは終わらない」(前書き)

遅くなりましたが、第1話です。
今回は本家の話となります。

第1話「戦いは終わらない」

ルーン帝国から地球に向けて、邪悪な黒い光が放たれた。しかし、人々はまだ誰もそのことを知らない……

一方地球では、コンカロードがプリキュアオールスターズに倒されてから1ヶ月もの月日が経とうとしていた。

ラブ「つぼみー！こっちこっち！」

つぼみ「は、はい！」

のぞみ、ラブ、つぼみの3人も仲良く平和な日常を過ごしていた。

つぼみ「すみません、遅くなってしまつて……」

のぞみ「大丈夫。私達も今来たところだから。」

つぼみ「そうですか……？」

のぞみ「うん。ところで、今日はどうするの？」

ラブ「商店街に新しいお店がオープンしたから、みんなで行ってみようと思うの。」

つぼみ「そうなんですか。」

のぞみ「じゃあ、3人で行くよ！」

のぞみ、ラブ、つぼみ「……けつてーい！」「」「」

街では、人々がいつもと変わらぬ日常を過ごしていた。

コンカロードに襲われた際の記憶も全て消え、全てが元に戻ったのだ。

しかし、そんな彼等を1人の男が見下ろしていた。シヨウキだった。シヨウキ「人類共め……そうしてられるのも今のうちだ……」

そう言うとシヨウキは、鎧武者の姿をした人影を3体召喚した。

ルーン帝国の一般兵、ゾーンである。

シヨウキ「いけ。」

ゾーン「はっ！」

ゾーン達はシヨウキの命令で街へと向かった。

シプレ「！邪悪な気配を感じます！」

のぞみ達が買い物を楽しんでいると、突然シプレが叫んだ。

つぼみ「本当ですか！？」

シプレ「はいです！」

ラブ「でも、一体誰が！？」

シプレ「そこまではわからないです・・・」

のぞみ「とにかく行ってみよう！」

3人は店を飛び出すと、気配のする方へ急いだ。

そして3人は、ゾーン達に遭遇した。

ラブ「あれは！？」

つぼみ「まさか、新しい敵！？」

ゾーン達は人々に襲い掛かろうとしていた。

ラブ「このままじゃみんなが！」

のぞみ「あんた達、待ちなさい！」

ゾーン「ん？」

ゾーン達は3人の方を向いた。

ゾーン「人間の子供が何の用だ？歯向かうというのなら、貴様らから殺してやるぞ？」

のぞみ「2人共、いくよ！」

ラブ「うん！」

つぼみ「はい！」

のぞみ「プリキュア！メタモルフオーゼ！」

ラブ「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！」

つぼみ「プリキュア！オープンマイハート！」

のぞみ、ラブ、つぼみはプリキュアへと変身した。

ドリーム「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

ピーチ「もぎたてフレッシュ！キュアピーチ！」

ブロッサム「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

するとその瞬間、ゾーン達は驚きの声を出した。

ゾーンA「プリキュア・・・」

ゾーンB「プリキュアだ・・・」

ピーチ「・・・？どうしたのかしら？」

シヨウキ「プリキュアだと!？」

ピーチ達が戸惑っているとそこへ、突然シヨウキが現れた。

シヨウキ「驚いたな。まさかこんなにも早くプリキュアに会えるとは・・・」

ドリーム「まさかあれが新しい敵!？」

シヨウキ「・・・ん？」

ブロッサム「貴方は誰なんですか!？」

シヨウキ「じゃあ自己紹介だけでもしておくか。俺は、遙か宇宙の果てにある破滅帝国、ルーイン帝国の幹部シヨウキ様だ!」ドリーム「・・・!？」

ピーチ「破滅帝国・・・」

ブロッサム「ルーイン帝国・・・」

シヨウキ「自己紹介は以上だ。さて、魔石を渡してもらおうか、プリキュアよ」

ピーチ「魔石・・・？」

シヨウキ「そうだ。貴様らが持っているのはわかっている。」

ドリーム「一体何のこと？」

ピーチ「私達、魔石なんて知らないわよ!」

シヨウキ「・・・何だと?とぼけているのか？」

ブロッサム「とぼけてなんかいません!私達、本当に知らないんです!」

シヨウキ「・・・ゾーン共、確かめる。」

ゾーン「はっ!」

シヨウキの命令で、ゾーンはドリーム達に襲い掛かった。

ドリーム「くっ・・・どうやらやるしかないみたいね！いくよ！」

ドリームの言葉と共に、3人もゾーンに立ち向かっていく。

ドリーム「クリスタルフルーレ！」

ピーチ「ピーチロッド！」

ブロッサム「ブロッサムタクト！」

剣を持って襲い掛かるゾーンに対して、3人も専用武器を取り出して応戦する。

ドリーム「はあっ！」

ピーチ「たあ！」

ブロッサム「はああ！」

ゾーン「くっ・・・うああ！」

3人の攻撃でゾーン達が徐々に押されていく中、その様子を見ていたシヨウキは目を見張った。

シヨウキ「なるほど、これがプリキュアの力・・・聞いてた以上のものだな・・・」

シヨウキがそうつぶやいてる内に、勝負がつこうとしていた。

ドリーム「プリキュア！シユーステイングスター！」

ピーチ「プリキュア！ラブサンシャイン・フレッツシュ！」

ブロッサム「プリキュア！ピンクフォルテウエイブ！」

ゾーン「うぎゃああああああ！！！！」

3人の必殺技を同時に受けたゾーンは、塵となって消滅した。

ピーチ「よし・・・！」

ドリーム「次は貴方よ！」

そう言つてドリームはシヨウキに攻撃を仕掛けようとするが、シヨウキは右手を差し出して攻撃を制止した。

シヨウキ「待て、貴様らと戦う気はない。」

ブロッサム「え・・・？」

シヨウキは不適な笑みを浮かべると、3人に話し始めた。

シヨウキ「貴様らが魔石を持っていないかどうかはまだ疑わしいが、

ひとまず今日のところは引き上げてやる。」

ブロッサム「貴方達の目的は一体なんなんですか？」

シヨウキ「いいだろう、教えてやる。我々ルーイン帝国の目的は……人類の滅亡と全宇宙の支配、それだけだ。」

ピーチ「なんですって!」

シヨウキ「それ以上のことはいずれ話してやる。」

そう言つてシヨウキは、3人に背中を向けた。

シヨウキ「プリキュアよ、今回はこの程度にしておくが、次は覚悟しておくがいい。貴様らが魔石を持っていることはわかっているのだからな。」

そしてシヨウキは一瞬のうちに姿を消し、後には3人のプリキュアが残された。

ドリーム「一体……何だつたんだろう……。」

ピーチ「ルーイン帝国……長い付き合いになりそうだね……。」

ブロッサム「新しい戦いが始まるんですね……。」

ドリーム「でも……私達は絶対負けない!」

ピーチ「うん!どんな敵がやって来たつて、私達は戦い続ける!戦い続けて、そして絶対勝つてみせる!なぎささんが教えてくれた思いを胸に!」

ブロッサム「この世界を……皆さんを守る為に!」

ルーイン帝国との出会いと同時に、プリキュア達の新たな戦いが始まった。

プリキュア達は強い想いを胸に、帝国との戦いに挑むことを決意する。

しかし彼女達は知らなかった。

時を同じくして、とある少女の物語が始まっていたということ……

第1話「戦いは終わらない」(後書き)

次回、ユニバースとセラフが登場！

第2話「光臨、新たなる戦士」

ドリーム達が帝国との戦いを終えた頃・・・

ゾーンA「見つけたぞ！」

街から少し離れた人気の少ない神社の中で、数人のゾーンが1人の少女を囲んでいた。

ゾーンB「もう逃がさんぞ。」

ゾーンの1人が、銀髪の少女に向かって話します。

ゾーンC「さあ、魔石を渡してもらおうか。」

ゾーンD「おとなしく渡せば、命だけは助けてやる。」

ゾーン達は次々に話し始めるが、少女は全く動じることなく彼等に言い返した。

少女「・・・何もかもが貴方達の思い通りになると思ったら、大間違
いよ。」

その言葉に、ゾーン達は憤る。

ゾーンA「ほう・・・では渡さぬというのだな？」

少女「当然でしょ。」

ゾーンB「ふん、素直に渡せばいいものを、馬鹿な奴だ。」

ゾーンの1人がそう言うと、少女の肩にとまっている鷹の様な姿をした生き物が答えた。

鷹「悪いが、お前達帝国の思うようにはさせせん。この世界にプリキ
ユアがいる限り、お前達の願いが叶うことは決して無い！」

ゾーンC「貴様ら、言わせておけば・・・！」

ゾーンD「こうなったら、力づくでも魔石を・・・！」

少女「そうはいかないわ。いくわよ！」

そう言って少女は、右手にはめた銀色の宝石がついた指輪をすつと構えた。

鷹「頼んだぞ。」

少女「ええ、任せて。」

鷹は少女の肩から離れ、同時に少女は指輪に光を集め始める。

少女「……………」

そして少女は何も言わずにそのまま指輪を額にかざし、掛け声を放った。

少女「トランス！キュアユニバース！」

するとその瞬間、少女の体はまばゆい光に包まれた。

その光景を見てゾーン達は一斉に身構える。

少女「はっ！」

少女が右手を勢いよく振ると光は消え、そしてそこには少女の姿は無く、変わって1人の戦士が立っていた。

黒色をベースとし、所々に黄色いラインが入った腹部の露出した衣装、スニーカーに似たデザインのシューズ、銀色のロングヘアーがツインテールに変化したその戦士は、ゾーン達の前に立つとゆっくりと構え、そして名乗りを上げた。

???「銀河に光る希望の星！キュアユニバース！」

この辺で紹介しておこう。

彼女の名は皇リイナ。この街に住む15歳の少女である。

おしとやかで責任感が強く、どんな時でも冷静沈着な優しい少女だ。彼女の隣にいるのは、パートナーのギン。リイナと同様常に冷静沈着であり、リイナと共に行動しながら戦い続ける彼女をいつもサポートしているのだ。

そして彼女は今、ギンに授かった力を使って伝説の戦士プリキュア、キュアユニバースへと変身したのである。

ユニバース「いくわよ！」

キュアユニバースは専用武器コスモブレードを取り出すと、ゾーン達に向かっていった。

ユニバース「はあっ！」

彼女の放つ一撃が次々とゾーン達を撃破していく。

ゾーン「くっ・・・調子にのるな！」

ゾーン達は次々とユニバースに襲い掛かるが、逆に彼女の攻撃に返り討ちにあっていくだけだった。

ゾーン「はあ！」

突然2人のゾーンが左右から切り掛かってくるが、ユニバースは高く飛び上がってかわし、コスモブレードにエネルギーを込め始めた。ユニバース「火星の大いなる力、受けてみなさい！プリキュア！マーズフレイム！」

炎を纏ったコスモブレードによる一撃が、多くのゾーン達を撃破した。

そしてユニバースが着地すると、ゾーン達が全員でユニバースを囲み始めた。

ゾーン「死ねえ！」

ゾーン達は一齐に切り掛かるが、ユニバースは動じることなくコスモブレードを構える。

ユニバース「・・・はあああああ！」

ゾーン「！？ぐああああ！」

ユニバースはコスモブレードで回転切りを放ち、ゾーン達を一気に吹っ飛ばした。

ゾーン「おのれ・・・ただでは済まさんぞ・・・」

ゾーン達は再び立ち上がり、攻撃態勢に入る。

ユニバース「くっ・・・さすがに数が多いわね・・・」

一般兵とはいえ、この数を1人で相手にするのは彼女にとって僅かながら厳しいものがあつた。

そして、ゾーン達は一齐にユニバースめがけて走りだした。

その時だった。

「プリキュア！セラフィムフレア！」

突然ユニバースの後ろから何かが現れ、そして一瞬で数人のゾーン達を切り付けて撃破した。

ゾーン「何だ!?」

ユニバース「・・・!?」

ユニバースやギン、ゾーン達が驚いていると、そこには西洋の騎士に天使を足した様な姿をした戦士が立っていた。

ゾーン「何者だ!」

???「・・・私は・・・」

戦士はゾーン達の方を向き、高らかに名乗りを上げた。

???「悪しき者を断罪する破邪の極光!キュアセラフ!」

一同「・・・」

全員が、驚きのあまり声が出なかった。

ユニバース「キュア・・・セラフ・・・」

セラフ「邪悪なる存在は、私が破壊する!」

ゾーン達はしばらく驚きで言葉が出なかったが、すぐに体制を整えた。

ゾーン「まさかプリキュアが他にもいたとはな!だが誰が来ようとも、我々ルーイン帝国の敵ではない!」

セラフ「・・・ふふ、強がりと言えるのも今のうちよ。」

ゾーン「何だと!」

セラフ「いくわよ!セラフイムセイバー!」

そう言うとセラフは、2本の剣を持ってゾーン達に向かっていった。

セラフ「はああ!」

彼女の鮮やかな二刀流の前にゾーン達は満足に反撃出来ないまま次々と倒されていく。

ユニバースは襲ってくるゾーン達を倒しながらも、その様子を見つめていた。

ユニバース「ねえ、ギン・・・あのプリキュアについて何か知らない?」

ギン「いや・・・私も初めて見るプリキュアだ・・・」

そうしている内に、セラフはほとんどのゾーンを撃破していた。

セラフ「よし、あと少し!」

「そこまでだ！」

するとそこへ、ゾーンをグレードアップさせた様な外見をした男がやって来た。

ゾーン達の大將、ジエネラルゾーンである。

Gゾーン「ガキ共が、手間をかけさせてくれたな。」

セラフ「どういたしまして。」

Gゾーン「この俺がたっぷり礼をしてやる！」

そう言っつてジエネラルゾーンは剣を構えた。

セラフ「やれやれ・・・というわけでキュアユニバース、あいつ倒してくれる？」

ユニバース「え・・・ええ!？」

セラフの突然の一言に、ユニバースは戸惑った。

同じプリキュアであり、尚且つ初対面であるキュアセラフに、いきなり敵を倒すことを依頼されてしまったのだから無理もない。

ユニバース「わ・・・私が？」

セラフ「ええ、頼んだわよ。」

そう言っつてセラフは、ユニバースの後ろに下がってしまった。

ギン「リイナ、どうする？」

ユニバース「どうするも何も・・・やるしかないでしょ。」

ユニバースはコスモブレードを片手に、ゆっくりとジエネラルゾーンに接近する。

Gゾーン「貴様が相手か。いいだろう。」

同時にジエネラルゾーンも剣を構えながらユニバースと距離を置く。

Gゾーン「はあっ！」

すると、いきなりジエネラルゾーンが切り掛かってきた。

ユニバースも素早くコスモブレードで攻撃を受け止めるが、ジエネラルゾーンの力に徐々に押されていく。

ユニバース「くっ・・・!」

彼女はジエネラルゾーンとは過去にも何人かと戦ったことがあるが、気のせいか今回はいつもより力が込められているように感じた。

Gゾーン「残念だったな。俺達帝国はここ数年の間に進化したのさ。お前達を倒す為にな！」

ユニバース「っ……負けるもんですか！」

そう言つてユニバースは、勢いよくコスモブレードを振つてジェネラルゾーンを押し返した。

ユニバース「ギン、いくわよ！」

ギン「よし、わかつた！」

ギンはユニバースの背中まで飛んでくると、一瞬のうちに巨大な翼へと変身してユニバースと一体化した。

ユニバース「はっ！」

Gゾーン「させるか！」

ジェネラルゾーンは素早く切り掛かるが、ユニバースは空高く飛翔して攻撃をかわし、空中で両足にエネルギーを込め始めた。

ユニバース「はああああああ……」

Gゾーン「！まずい！」

ジェネラルゾーンはその場から逃げようとするが、その瞬間ユニバースは彼めがけて勢いよく急降下しながらキックを放った。

ユニバース「青き地球の大いなる力、受けてみなさい！プリキュア！アースキック！」

Gゾーン「っ……！ぬあああああ……」

ユニバースのキックが勢いよく直撃し、ジェネラルゾーンは大きく吹っ飛ばされた。

そしてそこへ、コスモブレードを持ったユニバースが走ってくる。

ユニバース「はああああ……」

ユニバースはふらふらのジェネラルゾーンを渾身の一撃で切り付け、とどめを刺した。

Gゾーン「うおおおお……」

断末魔を上げながら、ジェネラルゾーンは塵となって消滅した。

ユニバース「ふう……」

それを見届けたユニバースは変身を解き、同時にギンも彼女と分離

して元の姿に戻った。

するとそこへ、セラフがやって来た。

セラフ「さすがね。」

セラフはリイナの前に立つと、変身を解いてリイナより少し年上程の少女へと姿を変えた。

リイナ「あの・・・貴方は？」

リイナは少し警戒しながら尋ねた。

少女「ああ、そういえばまだちゃんと自己紹介してなかったわね・・・とりあえずここじゃないだし、私の家に行きましょう。着いてきて。」

「
そう言っつて少女は歩き始め、リイナとギンも半信半疑のまま後に着いていった。」

第2話「光臨、新たなる戦士」（後書き）

次回、セラフとユニバースの出会いの物語。

第3話「唯とリイナ」

少女「着いたわよ。ここが私の家。」

リイナとギンは突然現れた謎のプリキュア、キュアセラフに案内されて彼女の家へとやって来た。

彼女の家は、見るからに豪華な外観をしており、豪邸と言ってもいい程だった。

そんなことを思ってるうちに、リイナとギンは彼女の部屋へ通され、彼女と向かい合って座っていた。

少しの間沈黙が続いたが、こほんと咳払いをして少女が口を開いた。少女「改めて・・・はじめまして、私は天宮唯。よろしく。」

天宮唯。少女はそう名乗った。

リイナ「あ、私は・・・」

唯「皇リイナさんでしょ。知ってるわ。貴方の戦いは何度も見せてもらったもの。」

リイナ「え・・・そうだったんですか？」

唯「ええ。」

そう言つて唯はギンの方を向いた。

唯「勿論貴方のこともね。」

ギン「・・・」

リイナ「あの・・・」

唯「ん？」

リイナ「天宮つてもしかして、あの天宮グループの？」

唯「ええ。世界的大企業、天宮グループの娘・・・それが私よ。」

リイナ「その天宮さんが、一体何の用でしょうか・・・」

唯「・・・」

リイナ「・・・？」

リイナの質問に対して唯はしばらく黙っていたが、やがて真剣な表情で口を開いた。

唯「率直に言わせてもらおうとね・・・貴方に、私と協力してルーイン帝国を倒してほしいの。」

リイナ「え・・・？」

唯の返事に、リイナもギンも耳を疑った。

リイナ「それってどういう・・・」

唯「驚かせてごめんなさい。でも、少し私の話を聞いてくれる？」

リイナ「あ・・・はい・・・」

リイナが黙ったのを確認して、唯は話を始めた。

唯「3年前・・・中学一年生の時に、人命救助活動の見学があつてそれに参加したの。」

リイナ「・・・」

唯「その時よ、初めてルーイン帝国のことを知ったのは。」

ギン「・・・」

唯「最初は少し半信半疑だったけど、それからも帝国の襲撃は何度も報道されたし、私自身も帝国に壊滅させされた街をこの目で見たから、すぐに帝国の存在を確信したわ。」

リイナとギンが見つめる中、唯は話を続ける。

唯「プリキュアの力に目覚めた私は、自分でレスキュー部隊を結成して人々を守る為に活動しながら、プリキュアとして帝国からの刺客と戦い続けた。そして、他のプリキュアと協力して遂に皇帝を倒した・・・それで終わったと思つてた。でも本当はそうじゃなかった。」

リイナ「・・・どういうこと？」

唯「1ヶ月前のコンカロードの一件、貴方も知ってるわよね？」

リイナ「ええ・・・」

唯「・・・帝国は滅んでなんかいなかった。奴らはこの数年の間に力をつけて、コンカロードの死と同時に再び活動を再開したの。勿論私は相手になつたわ。けど、奴らは予想以上に強くなつていて私1人じゃとても戦いきれない。だから、キュアユニバースである貴方の力を貸してほしいの。」

リイナ「私の・・・力・・・」

唯「ええ・・・貴方を初めて見たのは、やっぱり3年前だったわね。あの時は少し見た程度だったけど、貴方の強さはすぐにわかったわ。私は信じてる・・・貴方ならきつと帝国を倒す心強い味方になってくれるって。」

リイナ「・・・そんな話を急にされても・・・」

リイナは困った表情になり、そのままうつむいてしまった。

リイナ「・・・私は・・・」

ギン「リイナ・・・お前・・・」

唯「・・・」

しばらくの間誰も口を開こうとしなかったが、突然ギンが何かに反応するかのよう叫んだ。

ギン「・・・！この気配、帝国だ！」

リイナ「えっ？」

唯「本当!？」

ギン「ああ、間違いない。」

唯「・・・リイナ。」

リイナ「・・・行きましょう。」

唯「大丈夫？なんだか凄く辛そうに見えたけど・・・」

リイナ「そんなことないですよ。それより、帝国が何をするかわかりません。急ぎましょう。」

唯「そうね。」

リイナ、ギン、そして唯は屋敷を出て街へと急いだ。

街では、メロディとリズムがゾーン達と戦闘を繰り広げていた。

メロディ「はあっ！」

リズム「やあ！」

2人は順調にゾーンを撃破していくが、倒しても次々と現れるゾーン達に次第に体力を奪われていく。

メロディ「くっ・・・倒しても倒してもキリがない！」

すると、ゾーンの大群の中から2人のジェネラルゾーンが現れた。
GゾーンA「プリキュアよ、無駄な抵抗はやめて素直に魔石を渡したらどうだ。」

リズム「だから魔石って何なの？私達そんなの知らないわよ！」
GゾーンB「とぼけるな！貴様らの中の誰かが持っているということとはわかってるんだ！」

GゾーンA「こうなったら無理にでも突き止めてやるか。」
メロディ「くっ……！」

ゾーン達が2人に対して攻撃体制に入り、メロディとリズムがそれに身構えたその時だった。

唯「待ちなさい！」

リイナと唯がメロディとリズムの後ろから現れた。

リズム「え……？」

メロディ「誰……？」

唯「ルーン帝国、貴方達の思い通りにはさせないわ！リイナ、いける？」

リイナ「ええ……頑張るわ！」

唯「よし、いくわよ！」

そう言つて、唯はエンブレム型のアイテムを取り出して前に差出し、リイナは右手にはめた指輪をゆっくりと額に近付けてそれに光を集め始めた。

唯「プリキュア！セラフィックアドベント！」

リイナ「トランス！キュアユニバース！」

掛け声と共に二つの変身アイテムが光り、それに続いて2人の体も光り始める。

そして2人は光の中でプリキュアへと変身し、再びその姿を現した。
メロディ「嘘！？」

2人はゾーン達に向かって名乗りを上げる。

セラフ「悪しき者を断罪する破邪の極光！キュアセラフ！」

ユニバース「銀河に光る希望の星！キュアユニバース！」

GゾーンB「面白い・・・ならば貴様らを倒して魔石の在処聞き出すとするか！いけ、ゾーン！」

セラフ「そうはさせるもんですか！いくわよ、ユニバース！」

ユニバース「ええ！」

そして2人は、ゾーン達に向かっていった。

セラフ「セラフィムセイバー！」

ユニバース「コスモブレード！」

それぞれ専用武器を取り出し、ゾーン達を攻撃していく。

その様子をメロディとリズムは驚いた表情で見っていた。

リズム「ねえ、メロディ！見たことのないプリキュアが！」

メロディ「うん！一体誰なの！？あの2人！」

2人がそうこう言ってる間に、セラフとユニバースはほとんどのゾーン達を倒していた。

セラフ「プリキュア！セラフィムブレイカー！」

ユニバース「プリキュア！マーズフレイム！」

セラフは足に光の刃を発生させて回し蹴りを放ち、ゾーン達を一気に撃破。

ユニバースは炎を纏ったコスモブレードで残るゾーン達をまとめて一刀両断にした。

セラフ「よし、後はあいつらだけね！」

セラフとユニバースは、残った2人のジェネラルゾーンに向かっていった。

同時にジェネラルゾーンも剣を構える。

ユニバース「はあ！」

GゾーンA「ふん！」

ユニバースはジェネラルゾーンと剣による接戦を展開する。

GゾーンB「どりゃあ！」

セラフ「はっ！」

その隣でセラフは、ジェネラルゾーンの攻撃をかわしながら素早くパンチとキックで応戦する。

GゾーンB「おのれ！」

セラフ「あなたの攻撃なんか効かないわよ！」

そう言うとセラフは、ジェネラルゾーンの腹に掌底を打ち付けた。

GゾーンB「何！？」

セラフ「プリキュア！セラフイムインパクト！」

その瞬間、掌底から光の衝撃波が放たれ、ジェネラルゾーンは大きく吹っ飛ばされた。

GゾーンB「ぐああああああ！！！」

セラフ「・・・とどめよ。」

セラフは再びセラフイムセイバーを取り出すと、それに光を集中させてセラフイムセイバーを巨大化させた。

セラフ「はああああああ・・・！！！」

剣が巨大化したのを確認したセラフは、勢いよく剣を振ってジェネラルゾーンを切り付けた。

GゾーンB「ぎゃああああああ！！！」

ジェネラルゾーンは剣で真っ二つに切り裂かれ、そのまま塵となって消滅した。

そしてユニバースも、ジェネラルゾーンにとどめを刺そうとしていた。

GゾーンA「くっ・・・！！！」

ユニバースはコスモブレードの先端をジェネラルゾーンに突き付けた。

ユニバース「金星の大きいなる力、受けて見なさい！プリキュア！ヴィーナストリーム！」

そしてその瞬間、コスモブレードから勢いよく攻撃が放たれ、ジェネラルゾーンに命中した。

GゾーンA「う・・・うおおおおお！！！」

光線が直撃したジェネラルゾーンは、苦しんだ後に塵となって消滅した。

セラフ「ふう・・・。」

ギン「やったな。」

ユニバース「ええ・・・」

ギンに笑顔で接するユニバースに再びセラフが話し掛けた。

セラフ「リイナ、さっきの話・・・」

ユニバース「・・・私は・・・その・・・」

セラフ「いいわよ、無理に結論を出さなくても。」

ユニバース「え？」

セラフ「すぐには決められないのはわかってるわ。答えを出すのはいつでもいいわよ。私は屋敷にいつでもいるから、困った時はいつでも来るといいわ。」

ユニバース「・・・ありがとう・・・」

セラフ「いいのよ。」

メロディ「あの・・・」

ユニバース「え？」

セラフ「あ・・・」

2人が話を終えたところで、メロディが話し掛けてきた。

メロディ「貴方達は、一体・・・」

第3話「唯とリイナ」（後書き）

次回、セラフ、ユニバースと本家組の交流&共闘。

なるべく早く更新出来るように頑張ります！

第4話「魔石」(前書き)

オリキャラの設定に唯を追加しました。

第4話「魔石」

リイナと唯は、響と奏に連れられて湖のほとりに立つナッツハウスのやつて来ていた。

ナッツハウスに到着すると、つばみやラブをはじめとするプリキュアの仲間達が2人を出迎えてくれた。(ただし、MH組は不在)
ラブ「響、その2人がさつき言ってた……?」
響「うん。」

そう言つて響が2人の方を向くと、唯が最初に挨拶した。

唯「はじめまして、天宮唯です。よろしく。」

つばみ「こちらこそ、よろしくお願いします!」

唯とつばみが笑顔で握手をかわしている横で、リイナは少し緊張した様子で立っていた。

それを見ていたかれんは優しく話し掛ける。

かれん「ねえ、貴方の名前はなんて言うの?」

リイナ「え?あつ……私は、リイナ……皇リイナです……こつちは、パートナーのギン……」

かれん「そんなに緊張しなくても大丈夫よ。同じプリキュアなんだから、気軽に接してくれていいわよ。」

リイナ「あ……ありがとう……それにしても驚いたわ……こんなにプリキュアがいたなんて……」

かれん「ふふ。でも、実はここにいる以外にもまだいるのよ。」

リイナ「……そうなんだ……」

リイナは少しは落ち着いた様子だったが、どこか暗い感じがした。
奏「ところで唯さん、一つ聞きたいことがあるんですけど……」

唯「……わかつてるわ。ルーイン帝国のことでしょう。」
奏は黙つてうなずいた。

唯「いいわ。どうせ話すつもりだったし、私が知ってる限りの情報を教えてあげる。」

そして唯は、ルーイン帝国について話し始めた。彼らが以前から何度も地球を襲撃していたこと、皇帝が倒されて滅んだかと思いきや、彼らは3年間の間により強力になっていたこと、コンカロードの死と共に活動を再開したこと、そして謎に包まれた「魔石」をプリキュア達から奪おうとしていること等、自分が話せる全ての情報を話した。

唯「私に言えるのは、これくらいね。」

唯から全てを知らされたプリキュア達は、深刻な表情になっていた。くるみ「ルーイン帝国、なんて奴らなの・・・」

いつき「全宇宙の支配に、人類の滅亡・・・恐ろしすぎる・・・」
ゆり「私も戦ったからわかるわ・・・あの恐ろしさは忘れられない・・・」

かつて力を失う前にルーイン帝国と戦った過去を持ち、前皇帝の撃破にも貢献したゆりも深刻な顔をした。

咲「ねえ、一つどうしてもわからないことが・・・」

唯「・・・何かしら？」

咲「あいつらが狙ってる魔石って、一体何なの？」

その質問で、全員が唯に注目する。

ラブ「そういえば・・・私達プリキュアが持つてるって奴らは言うてたけど・・・」

のぞみ「でも、現に私達は魔石なんて持ってないし、そんなの見たことも聞いたこともないよ。」

つぼみ「お二人共、何か心当たりはないんですか？」

唯「ごめんなさい、それに関しては私もわからないわ・・・リイナはどう？」

リイナ「・・・私は・・・」

リイナは少し困った様子だった。

リイナ「・・・ごめんなさい・・・知らない・・・」

唯「そう・・・」

うらら「お二人も知らないってことは、やっぱり魔石は私達も知らない他の誰かが持つてるんじゃないか・・・」

えりか「そもそもその魔石って、一体どんな力があるの？」

唯「魔石については、私もさすがに・・・」

するとその時、今まで全く口を開くことのなかったギンが、突然話し始めた。

ギン「・・・奴らが言う魔石とは・・・ルーイン帝国の皇帝一族に代々伝わる、王家の宝である二つの石ことだ。」

唯「えっ？」

リイナ「ギン・・・？」

驚く一同だったが、ギンは気にせず話を続けていく。

ギン「魔石には、邪悪で強力な力が込められている。使い方次第では、星を破壊したりすることも可能な恐ろしい兵器にもなるだろう。」

リイナ「・・・!!」

ギン「同時に魔石は、皇帝の力の源でもあるんだ。3年前、二つあった石が突然両方共何者かによって盗まれ、帝国は大混乱に陥った。そしてその混乱の中、前皇帝が出陣した。だが、魔石を奪われて力が不完全な皇帝は思うように力が出せないまま反撃に合い、そのままセラフやムーンライトによって倒されたというわけだ。」

ゆり「なるほど・・・」

美希「それで、魔石は結局どこにあるの？」

ギン「・・・」

唯「・・・?どうしたの？」

リイナ「・・・ギンにもわからないのよ。そうでしょ？」

ギン「・・・ああ・・・」

りん「結局、魔石の在処はわからずじまいか・・・」

祈里「でも凄い・・・どうしてそんなに詳しいの?」ギン「・・・前に倒した帝国の兵士から無理矢理聞き出しただけだ・・・」

舞「そうなんだ・・・」

リイナ「・・・」

かれん「リイナ、どうしたの？」

見ると、リイナはとても不安そうな表情になっていた。

リイナ「ううん・・・大丈夫・・・」

かれん「本当？かなり顔色が悪いわよ？」

リイナ「ありがとう。でも本当に大丈夫だから・・・」

すると、ギンが何かを察知して叫んだ。

ギン「帝国の奴らが現れた！」

のぞみ「え！？」

唯「リイナ、いくわよ！」

リイナ「あっ・・・うん！」

唯とリイナ、ギンはすぐさまナッツハウスを飛び出して街へ向かった。

響「あ、待って！」

奏「響、私達もいくわよ！」

響「うん！」

それを追って、響と奏もナッツハウスを飛び出して街へと向かった。

街では、またしてもゾーン達が入々を襲っていた。

Gゾーン「人間共よ！おとなしく我らルーイン帝国の力の前にひざまずくがいい！そして、お前達はそのまま滅亡を迎えるのだ！」

唯「そうはさせない！」

そこへリイナと唯が到着し、遅れて響と奏も到着した。

唯「これ以上貴方達の好きにはさせないわ！リイナ、変身よ！」

リイナ「・・・」

唯「リイナ！」

リイナ「あっ・・・ええ！いくわよ！」

響「奏、私達も！」

奏「ええ！」

唯「プリキュア！セラフィックアドベント！」

リイナ「トランス！キュアユニバース！」

響、奏「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！！！」

4人はプリキュアへと変身し、名乗りを上げた。

セラフ「悪き者を断罪する破邪の極光！キュアセラフ！」

ユニバース「銀河に光る希望の星！キュアユニバース！」

メロディ「爪弾くは荒らぶる調べ！キュアメロディ！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

メロディ、リズム「届け、二人の組曲！スイートプリキュア！！」

ゾーン「現れたな、プリキュア。無駄な抵抗はやめておとなしく魔石を・・・」

ゾーンが話し終える前に、セラフがセラフィムセイバーで彼の体を切り裂いていた。

セラフ「帝国の話なんて、いちいち聞いてられないわよ。」

Gゾーン「貴様ら、やってくれるな・・・ゾーン共！いけ！」

ジェネラルゾーンの命令で、ゾーン達が4人に襲い掛かる。

セラフ「ユニバース！いくわよ！」

ユニバース「ええ！」

リズム「私達もいくわよ！」

メロディ「オツケー！」

しかし、4人のプリキュアは怯むことなくゾーン達に立ち向かっていくと、次々と返り討ちにしていった。

メロディ、リズム「プリキュア！パッションート・ハーモニー！

！！」

メロディとリズムの放った光線が、迫って来るゾーン達を一撃で撃破した。

ユニバース「コスモブレード！」

その隣で、ユニバースとセラフはそれぞれの武器を使ってゾーン達を切り付けて倒していく。

ゾーン「こいつら・・・強い！」

セラフ「はあああああ！」

ゾーン「くっ！」

セラフの攻撃に身構えるゾーン達だったが、セラフはセラフィムセイバーを鞭に変化させると一気にゾーン達に向けて必殺技を放った。セラフ「プリキュア！セラフィムウィップ！」

鞭による攻撃が次々とゾーン達を切り裂いていき、気付いた時にはセラフの周りにいたゾーン達は全て倒されていた。

ゾーン「くっ、なら一番勝てそうなあいつを狙え！」

そして、残ったゾーン達は一斉にユニバースに襲い掛かる。

しかし、ユニバースは向かって来るゾーン達に向けてコスモブレードの先端を構え、必殺光線を放った。

ユニバース「プリキュア！ヴィーナーストリーム！」

ゾーン「なっ！？うあああああああああ！」

ゾーン達は反撃する間もなく、ユニバースの技で全て倒された。全てのゾーンを倒したセラフは周囲を見渡すが、ジェネラルゾーンの姿はどこにもなかった。

セラフ「あいつ・・・逃げたわね・・・」

そう言っただけでセラフは、メロディとリズムに話し掛ける。

セラフ「ありがとう。おかげで被害を抑えることが出来たわ。」

リズム「そんな・・・ねえ・・・」

メロディ「私達は、プリキュアとしての使命を果たしただけです。」

セラフ「ねえ、お願いがあるんだけど・・・もし良かったら、これから帝国を倒す為に一緒に戦ってくれないかしら？」

メロディ「もちろんオッケーですよ！ね、リズム？」

リズム「うん！」

セラフ「ありがとう。そう言ってくれれば助かるわ。」

リズム「気にしないでください。」

セラフとメロディ、リズムがそんな話をしている中、ユニバースは何かを感じていた。

ギン「ユニバース、どうした？」

ユニバース「感じるの……強い力を……」

ギン「やはりお前もか……」

ユニバース「この感じ……以前どこかで……」

その頃、逃げ延びたジェネラルゾーンは狭い路地にいた。

Gゾーン「ふう、なんてヤバイ奴らだ……逃げて正解だったな……
もっと強力なゾーンを連れて出なおすとするか……」

???「そうはさせないわよ。」

ジェネラルゾーンがその場を離れようとしたその時、何者かが彼の前に姿を現した。

Gゾーン「?なんだ貴様！」

赤を基調とした所々に黒と銀のラインが入ったスーツを身に纏い、ヘルメットを装着したその戦士は、何も言わずにジェネラルゾーンに銃を突き付けた。

Gゾーン「なっ……!」

その瞬間、謎の戦士は銃を勢いよく連射してジェネラルゾーンを攻撃した。

Gゾーン「ぬああああああ!……ば……馬鹿な……」
攻撃を食らったジェネラルゾーンはその場に倒れ、やがて塵となつて消滅した。

それを見届けた謎の戦士は、ヘルメットを脱いだ。

そこには、金髪のショートボブの髪型をした、18程の少女がいた。
???「ルーイン帝国……私が必ず倒してみせる！」

第4話「魔石」(後書き)

今回はウィングが登場・・・なのですが、その前に「プリキュア
オールスターズAnother Story」キュアブラック、光
の使者の新たな戦い」の執筆を開始したいと思います。

第5話「もう一人の戦士」

帝国の中央にそびえ立つ、通称「王の城」。

その内部のとある部屋で、シヨウキはグレムとザンゴに現時点での状況を報告していた。

シヨウキ「・・・と、だいたいこんなところだ。」

ザンゴ「キュアユニバースですか・・・是非ともお会いしたいですね・・・」

グレム「そうねえ。プリキュア達も思ったよりやるみたいだし、あたしもいつか会いたいものだよ。」

シヨウキ「お前ら、そんなことを言ってる場合じゃないだろ。まったく・・・」

グレム「ふふ、あんたは心配性ね。だからあいつを呼んだんでしょ？」

そう話すシヨウキ達の前には、獣人の様な体に龍の頭を持った男が立っていた。

シヨウキ「ヴァルナ星人サイト、わかってるな。」

サイト「任せとけ！プリキュアだかなんだか知らんが、俺様に勝てる奴なんていねえ！軽く相手して来てやる！」

シヨウキ「頼んだぞ。」

サイト「おうよ！」

そして、サイトは地球へと向かった。

一方その頃、天宮邸では。

ユニバース「はっ！」

セラフ「はああ！」

リイナと唯はそれぞれプリキュアに変身し、特訓に励んでいた。

セラフ「もっと相手の動きをよく見て！ただやみくもに動いたらって、

勝てないわよ！」

ユニバースのパンチを受け止めたセラフは軽く腕をひねって体制を崩せると、素早くユニバースに蹴りを放った。

しかしユニバースはなんとか蹴りをかわし、セラフと距離を置きながらコスモブレードを構える。

ユニバース「はあああああ！」

そのまま真っ直ぐセラフに突っ込んでいき、即座にセラフもセラフイムセイバーを取り出して身構えた。

ユニバース「はあっ！」

ユニバースはコスモブレードを勢いよく振り下ろし、セラフも素早くそれを受け止めた。

セラフ「ふん！」

セラフはセラフイムセイバーに力を込めてユニバースを押し返した。ユニバース「っ・・・！プリキュア！ヴィーナスストリーム！」

後退しながらも、ユニバースはすかさずセラフに光線を放った。

セラフ「・・・！」

その瞬間、光線はセラフに命中したかに見えた。

しかしセラフは背中に装備したセラフイムコートをクローク状に纏ってバリアを形成し、ユニバースの攻撃を防いだ。

ユニバース「くっ・・・でも次こそは・・・！」

セラフ「はい、ストップ！」

ユニバースは再び走りだそうとするが、セラフがそれを制止した為すぐに立ち止まった。

セラフ「うん、今日はこんなところね。」

ユニバース「ふう・・・。」

2人は変身を解いた。

唯「戦い方は良くなってるわ。後はそれを実戦で上手く生かしていくことね。」

リイナ「そうですね・・・唯さん、ありがとうございます。」

唯「もう、唯でいいのに。」

そして、リイナは天宮邸を後にしようとギンと共に屋敷を出た。
するとそこへ唯がやって来てリイナを呼び止めた。

唯「リイナ、ちよつといいかしら？」

リイナ「何？」

唯「うん、たいしたことじゃないかもしれないけど・・・あちこちで噂されてる赤い戦士について、貴方何か知らない？」

リイナ「赤い戦士・・・？」

赤い戦士、最近街で噂になっている謎の戦士だ。

1人の青年と共に突然現れてはその鮮やかな戦法で人々を悪の魔の手から救い、そしてまた去っていく為人々の間ではちよつとしたヒーローになっている。

リイナ「ごめん・・・私もよくわからないわ・・・」

唯「そう・・・わかったわ。それじゃ、気を付けて帰りなさいね。」

リイナ「うん・・・」

そしてリイナは天宮邸を離れ、自宅へと向かった。

歩きながら、リイナは赤い戦士のことについて考えていた。

リイナ「赤い戦士・・・か・・・ギン、何かわかる？」

ギン「・・・」

ギンは目を閉じたまま何も答えない。

リイナ「・・・ふう・・・」

リイナがため息をついたその時、突然ギンが目を開いて叫んだ。

ギン「帝国の気配を感じる・・・！」

リイナ「えっ!？」

急いで周囲を見回すと、リイナの周りに次々とゾーンやジェネラルゾーン達が現れ、最後にサイトが姿を現した。

リイナ「ルーイン帝国・・・！」

サイトはリイナを見つけると、うつすらと笑みを浮かべながら口を開いた。

サイト「見つけたぞ、お前がプリキュアか。」

リイナ「・・・だつたら?」

サイト「俺様はヴァルナ星人サイト! 目的はただ一つ、とつとと魔石を出しやがれ!」

リイナ「魔石は・・・無いわ・・・」

サイト「・・・そうか、まあいい。あるかないかは俺様が確かめてやる! いけ、ゾーン!」

リイナ「っ・・・」

襲い掛かるゾーン達に、リイナは変身しようと身構える。

するとその途端どこからか銃声が聞こえたかと思うと、先頭を切っていたゾーンが突然火花をあげながら倒れ、消滅した。

それを見た残りのゾーン達は一斉に立ち止まった。

サイト「ああ?」

リイナ「え・・・?」

ギン「・・・?」

リイナとギンは戸惑いながらも銃声がした方向を振り向いた。

リイナ「あれは・・・?」

そこには、自分よりも年上程に見える左手に銃を持った少女と、バイクにまたがりながら同じく銃を持った青年がいた。

少女「ふう・・・大丈夫?」

リイナ「え? は・・・はい・・・」

何故かリイナは、目の前の2人に見覚えがあつた。

少女「こいつらは私に任せて、お嬢ちゃんは早く逃げなさい・・・あれ・・・お嬢ちゃん、前に私と会つたことある?」

リイナ「えっ?」

突然の質問に、リイナは戸惑つた。

少女「・・・気のせいよね・・・さあ、いくわよ!」

少女はそう言うのとゾーン達の前に立ち、腕にブレスを装着した。

少女「プリキュアインストール!」

『7・7・9』

そしてブレスに番号を入力したその瞬間、少女の体は光に包まれた。

その中で、赤を基調とし所々に銀と黒のラインが入った装甲が次々と彼女の体に装着されていき、光が消えた時には少女は全身に装甲を纏っていた。

更に、彼女の頭上にヘルメットが出現し、彼女はそれを掴むと頭に装着した。

リイナ「赤い戦士・・・！」

変身が完了したその姿はまるで一昔前のメタルヒーローを連想させる外見をしており、彼女はゾーン達に向かって高らかに名乗りをあげた。

???「天駆ける正義の羽ばたき！キュアウイング！」

サイト「・・・・・・・・・・」

ゾーン「・・・・・・・・・・」

ギン「・・・キュアウイング・・・・・・・・・・」

リイナ「・・・あっ！」

全員が沈黙する中、リイナはようやく彼女のことを思い出した。

一ヶ月前、世界の支配者コンカロードの手下によって街が襲撃された際、リイナは人々を助ける為に変身して立ち向かった。

そこでリイナ、ギンと共に共闘したのが目の前にいる彼女、神村七佳とその従兄の相崎翔太である。

そして七佳は、腕に装着したウイングブレスを使うことで、プリキユアへと変身出来るのだ。

その名は、キュアウイング。

リイナ「あの時のプリキユア・・・あの子が・・・・・・・・・・」

ウイング「はっ！」

ウイングは右手に剣型の武器ウイングソードを、左手に銃型の武器ウイングショットを持ってゾーン達に向かっていった。

サイト「ああ！もうどうでもいい！ゾーン共、やれ！殺せ！」

同時にゾーン達も一斉にウイングに襲い掛かった。

ウイング「はああ！」

ウイングはゾーン達を右手に持った剣で切り付け、更に左手に持った銃で次々と狙撃していく。

ウイング「あんた達！女の子1人にこの人数は酷いんじゃないの？」
サイト「うるさい！ジェネラルゾーン、いけ！」

Gゾーン「はっ！」

残ったゾーンと共に、2人のジェネラルゾーンが襲い掛かるが、ウイングは気にせず攻撃を続けていく。

リイナ「……」

リイナはその間、ただウイングの躍進を見てることしか出来なかった。

そこへ、プリキュア5のメンバーが到着した。

かれん「リイナ！」

リイナ「みんな……！」

うらら「リイナさん、あの人は？」

りん「もしかして……今噂になってる、赤い戦士？」

リイナ「……うん……」

目の前で戦っている見たことのない戦士の姿に、全員が戸惑いを隠せないでいた。

そうしてる間に、気が付けばウイングはほとんどのゾーン達を撃破していた。

Gゾーン「ぐっ……！」

ウイング「一気にとどめを刺すわよ！」

そう言っつてウイングは、両手に持った剣と銃を一つに合体させた。

『8・8・9』

同時に素早くプレスに番号を入力し、ジェネラルゾーン達に向けて銃口を構えた。

Gゾーン「……！」

ウイング「プリキュア！ウイングバスター！」

その瞬間、銃口から勢いよく光線が放たれ、ゾーンやジェネラルゾ

ーン達に命中した。

Gゾーン達「ぎゃああああああああ!!」

ジェネラルゾーン達は悲鳴をあげながら爆発し、消滅した。

そこへ、サイトがやって来た。

サイト「たいした実力だが・・・いい気になるのもそこまでだ!はあ!

するとサイトは、口から何発も火炎弾を発射してウイングを攻撃した。

ウイング「うつ・・・!」

サイト「へっ!もつと苦しみやがれ!」

ウイング「っ・・・なかなかやるじゃない・・・ふん!」

ウイングはサイトの攻撃に耐えながら銃ですかさずサイトを狙撃した。

サイト「ぐおお!」

ウイングはサイトが怯むと同時に、後退して体勢を整えた。

ウイング「これで決めるわよ!」

そうやってウイングは再びブレスに番号を入力した。

「2・2・4」

すると、番号を入力したその瞬間ウイングの背中に光の翼が出現し、その眩しさに全員が一瞬目を覆った。

サイト「・・・!?!」

ウイング「いくわよ!」

そう言うと同時にウイングは空高く飛び上がり、上空で華麗に飛翔した。

そして、ウイングは飛翔するのを止めると、剣と銃を持って勢いよく急降下を始めた。

サイト「くっ!そうはいくか!」

サイトは火炎弾を発射してウイングを撃墜しようとするが、ウイングは剣を振って火炎弾を打ち消し、素早くサイトに向けて銃を連射した。

サイト「ぐああ！」

ウイング「まだまだいくんだから！」

そう言っつてウイングは再び上昇し、旋回してまた急降下した。

そしてまた上昇して急降下するという戦法を続け、徐々にサイトにダメージを与えていった。

こまち「凄い……」

のぞみ「……うん……」

くるみ「なんて強さなの……」

のぞみ達が驚嘆の声をあげる中、リイナとギンはウイングを興味深そうな目で見つめていた。

そうこうしている内に、ウイングはサイトにとどめを刺す為に急上昇した。

ウイング「これで最後よ！」

『4・4・5』

ウイングは番号を入力し、それと同時に彼女の右足に徐々にエネルギーが蓄まっつていく。

ウイング「よし、あとちょっと……！」

サイト「させるか……っがあ!？」

サイトが火炎弾でウイングを妨害しようとしたその瞬間、突然彼は狙撃された。

慌てて振り向くと、そこには相崎翔太が銃口を向けて立っていた。

その間にウイングは右足にエネルギーを蓄め終えていた。

ウイング「サンキュー！翔太！」

エネルギーが蓄まったのを確認したウイングは素早く旋回し、サイトに右足を向けながら勢いよく急降下していった。

ウイング「はあああああ……！」

サイト「……！」

ウイング「プリキュア！バスタードロップ！」

ウイングが技名を叫ぶと同時に、彼女のキックがサイトに直撃した。サイト「う……ぐあああああああ……！」

技を食らったサイトは叫び声をあげながら爆発し、そして消滅した。ウイングは着地すると同時にヘルメットを脱ぎ、翔太の元へ駆け寄った。

ウイング「翔太、どうだった！？今回の私の戦いぶり！」

翔太「はは・・・いつも通りだな。」

翔太は薄笑いを浮かべながらそう答えた。

ウイング「もう・・・ってあれ？」

ここでウイングは、リイナ達が先程からずっと自分のことを見つめているのによく気が付いた。

ウイング「えっと・・・私に何か用かな・・・？」

第5話「もう一人の戦士」(後書き)

次回は、七佳と唯が共闘します。

第6話「七佳の過去」(前書き)

オリキャラの設定にイメージジCVを追加しました。

第6話「七佳の過去」

リイナと七佳が再会した次の日・・・

リイナが住んでいる町の外れに、高い丘があった。

爽やかな風が吹き、太陽の光が気持ち良く当たる為、リイナは落ち込んだ時やリラックスしたい時には必ずここに来るようにしている。今日もリイナはそんなお気に入りの場所に寝転がり、ある考え事をしていた。

その内容は勿論・・・

リイナ「・・・・・・・・」

ギン「・・・まだ考えてるのか？キュアウイングのことを・・・」

リイナ「・・・うん・・・私達に比べれば見た目はちよつと変わってるかもしれないけど、あの人も同じプリキュアだし・・・・・・・・それにあの強さ・・・あの人は、私と同じ想いなのかな・・・・・・・・？」

ギン「・・・・・・・・」

リイナ「・・・・・・・・」

リイナもギンも、それ以上は何も話さなかった。

一方その頃、ナッツハウスでは。

七佳「はじめまして！私は神村七佳。こっちは従兄の・・・」

翔太「相崎翔太だ。よろしく。」

響「こちらこそ、はじめまして。」

ウイングのことをリイナに知らされた唯の呼び掛けによって、七佳と翔太はナッツハウスを訪れていた。

現在ナッツハウスには、MH組を除くプリキュアオールスターズが全員集合している。

その中には、黒川エレンの姿もある。

七佳「それにしても・・・ここ、いいところね。」

ナツツ「そう言ってもらえると嬉しいナツ。」

七佳「わっ！何！？ぬいぐるみがしゃべった!?!」

目の前にやって来たココやナツツをはじめとする妖精達に、七佳は目を丸くした。

ココ「ぬいぐるみじゃないココ。」

うらら「ココ達は、いつも私達をサポートしてくれる妖精なんです。」

七佳「・・・?」

七佳には言ってる意味が全くわからなかった。

七佳「ちよつと待って。そもそも、みんなは一体どういう繋がりでここに集まってるわけ?」

響「あれ、唯さんから知らされてないんですか?」

七佳「ええ・・・」

のぞみ「私達はみんな、七佳さんと同じプリキュアですよ。」

七佳「へえ、そうなんだ・・・。。。。。。って、ええっ!?!」

のぞみの言葉を聞いた七佳は、信じられない程の驚きを見せた。

奏「そ、そんなに驚かなくても・・・」

しかし、目の前にいる19人の少女が全員プリキュアであると言われれば普通は驚く。

まして七佳は、プリキュアのこととは知っていたものそのままで大勢いるとは予想していなかった為、余計に驚いた。

七佳「・・・そうなんだ。」

気のせいかな、少し元気がないように見える。

つぼみ「あの・・・大丈夫ですか?」

七佳「え?ああ、大丈夫よ。気にしないで。」

翔太「・・・。。。。。」

唯「そろってるわね。」

そこへ、全員を集めた張本人である唯がようやく到着した。

唯「あら？リイナは？」

かれん「リイナなら、今日は一人でいたって言ってたわ。」

唯「ふうん・・・まあいいわ。」

そう言つて唯が挨拶をしようと七佳の方を向くと、七佳の隣に立っていた翔太が驚いた表情で唯を見ていた。

翔太「君は・・・」

それに気付いた唯も、翔太に対してお辞儀をした。

唯「お久しぶりです。」

その様子を見た七佳は、更にわけがわからなくなった。

七佳「え？どういうこと？ねえ翔太、この子は誰なの？」

翔太「落ち着け、今から説明してやるから。」

翔太は一旦七佳を落ち着かせると、自身も心を落ち着かせてから言った。

翔太「この子は天宮唯さん。・・・三年前、お前を助けてくれた子だ。」

彼のその一言に、全員が同じ疑問を持った。

七佳「私を・・・助けた？」

咲「一体、どういうことなんですか？」

翔太「・・・七佳、三年前のことを話すことになるが・・・大丈夫か？」

七佳「・・・」

七佳はしばらく黙っていたが、やがて決心したかの様に答えた。

七佳「・・・話してちょうだい。せつかくだから話しましょう、あの

日のこと。」

翔太「・・・わかった。」

そして、翔太はゆっくりと話し始めた。

翔太「・・・俺と七佳は昔から何かと一緒にいることが多く、ほとんどいつも一緒だった。三年前のあの日も・・・」

ラブ「三年前・・・？」

翔太「俺は年の離れた妹を連れて、いつものように七佳の家に遊び

に行った。そこまでは、何の変哲もないいつもの日常だった。だが………

突然翔太は口を閉ざし、代わりに唯が口を開いた。

唯「街が突然襲撃を受けたのよ………ルーイン帝国にね。」

一同「……！！！」

翔太「……ああ。いきなり不気味な奴らが現れたかと思えば、街の人達が次々と襲われていった。勿論、すぐに俺達のところにもそいつらはやって来た。」

その瞬間、翔太の表情が一気に重くなり、七佳も黙ったまま俯いてしまった。

翔太「その時のことは、忘れてくても忘れられない。俺達の目の前で、七佳の両親はあつという間に殺された。直後に俺の妹も………つぼみ「そんな………」

翔太「俺は、七佳、そしていつしよにいた七佳の彼氏を連れてどうにか逃げようとしたがすぐに追いつかれ、その彼氏も殺された。」
響がふと七佳を見ると、七佳は震えていた。

翔太「俺と七佳も連中に体をあちこち傷つけられて遂に万事休すかと思っただが、そこへ間一髪キュアムーンライトが駆け付けたおかげで命拾いしたんだ。」

えりか「ゆりさんが？」

ゆり「ええ、まだ力を失う前だったから覚えてるわ。邪悪な気配を感じて行ってみれば、街は既に壊滅寸前そんな中で私は二人を見つけ、すぐに二人を襲っていたゾーン達を倒したわ。ゾーン達を従えていた、幹部らしき人物には逃げられてしまったけど。」

翔太「そして、同じくそこへ駆け付けたのが………」

唯「私ね。」

翔太「ああ。唯さんが瀕死の状態に陥ったりイナを急いで病院まで連れていってくれたんだ。」

七佳「………」

翔太「結局街は壊滅。無事に生き残ったのは俺達二人を合わせても

数えられる程度・・・この世に地獄があるなら、そこはまさに地獄だったよ。その後、俺と七佳はこれ以上帝国による犠牲者を出さない為にも、自らの手でプリキュアを作ることを決意したんだ。あらゆる限りの方法を尽くして手に入れたあらゆる組織の技術を詰め込んだ結果、約二年の月日をかけて遂にキュアウイングを完成させ、そして現在に至る・・・というわけだ。」

一同は、何も返す言葉が無かった。

翔太「・・・すまない、こんな話をしてしまったて・・・少し席を外すよ。」

そう言つて翔太が外へ出ていくと同時に、唯は七佳の元へ駆け寄つた。

唯「七佳さん・・・」

七佳「・・・貴方が私を助けてくれたのね・・・ありがとう。ゆりさんも、ありがとう。」

顔を上げた七佳の表情は、笑っていた。

響「あの・・・七佳さん？」

七佳「ん？」

響「その・・・今の話、辛くなかったですか？」

七佳「・・・もう、何言つてんのよ。そんなにいつまでも落ち込んでるわけじゃない。プリキュアの力を手に入れて以来、私は前向きに生きていくって決めただから。」

奏「そうなんですか・・・」

七佳「ふう、なんだかすつかり暗い感じになっちゃったわね。そうだ唯ちゃん、今日はなんで私をここに呼んだの？」

その時、ココが叫んだ。

ココ「何か出たココ！」

りん「えっ!？」

美希「まさか帝国?」

唯「きつとそうね。七佳さん、一緒に来てくれますか？」

七佳「当然でしょ。急いで行きましょ。」

響「奏、エレン！」
奏、エレン、「うん！」

街では、ゾーンやジネラルゾーンが人々を襲っていた。

Gゾーン「人間共よ！早く我らルーイン帝国の力の前におとなしくひざまずけ！どの道貴様らには滅亡するしか道はないのだからな！」

七佳「そうはさせないわ！」

そこへ、七佳、唯、響、奏、エレンが到着した。

七佳「これ以上あんた達の好きには絶対させないわよ！あんな惨劇をもう二度と繰り返させはしないんだから！みんな！」

5人はそれぞれ変身アイテムを取り出し、プリキュアへと変身する。

七佳「プリキュアインストール！」

「7・7・9」

唯「プリキュア！セラフィックアドベント！」

響、奏、エレン「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！」

「！」

変身が完了したと同時に、翔太も到着した。

ウイング「天駆ける正義の羽ばたき！キュアウイング！」

セラフ「悪しき者を断罪する破邪の極光！キュアセラフ！」

メロディ「爪弾くはあらゆる調べ！キュアメロディ！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

ビート「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

Gゾーン「ふん！ゾーン共、やれ！」

ジネラルゾーンの命令でゾーン達が襲い掛かるが、ウイング達もそれに立ち向かっていく。

ウイング「てやあ！」

セラフ「はあっ！」

ウイングとセラフは共に共闘し、ゾーン達を倒していく。

セラフがセラフィムセイバーで次々とゾーン達を倒していると、背後から別のゾーンが二人がかりで襲い掛かる。

しかし次の瞬間、銃声と共に二人のゾーンはその場に倒れた。
セラフが銃声のした方を向くと、ウイングがウイングショットを構えて立っていた。

セラフ「やるじゃない。」

ウイング「まあね。」

二人は背中合わせに立つと、それぞれ武器を持って構えた。

セラフ「そっちは頼んだわよ。」

ウイング「任せて。」

その言葉と同時にウイングは銃を乱射し、セラフも剣で次々とゾーン達を撃破していく。

ビート「メロディ、リズム、私達も決めるわよ！」

チームワークでゾーン達を圧倒していたメロディ達も、ミラクルベルティエ、ファンタステイックベルティエ、ラブギターロッドといった武器を取り出して必殺技を放った。

メロディ、リズム「翔け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ミュージックロンド！！」

ビート「翔け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ハートフルビートロック！」

3人が放った三つの光のリングがゾーン達を囲み、

メロディ、リズム、ビート「三拍子！1、2、3、フィナーレ！！！！」

3人の掛け声と共にゾーン達は爆発を起こして消滅した。

セラフ「プリキュア！セラフィムスラッシュ！」

セラフは光を纏って巨大化させたセラフィムセイバーでゾーン達を一刀両断し、残るはジェネラルゾーン1人のみとなった。

Gゾーン「おのれ・・・！」

セラフ「ウイング！」

ウイング「ええ！」

ウイングはウイングソードとウイングショットを合体させ、プレスに番号を入力する。

ウイング「プリキュア！ウイングバスター！」

掛け声と共に銃口から勢いよく光線が発射され、ジェネラルゾーンに命中した。

Gゾーン「うおおおおおっ！！」

ジェネラルゾーンは悲鳴をあげながら消滅した。

ウイング「ふう。」

敵を全滅させた5人は変身を解く。

唯「七佳さん。」

七佳「ん？」

唯「もしよかつたら、帝国を倒す為にこれからもいつしよに戦ってくれませんか？」

七佳「なんだそんなこと・・・オッケーに決まってるでしょ。私はあれ以来、この世の悪は全て倒すって決めたんだから。」

唯「そうですね。ありがとうございます。」

七佳「いいのよ。じゃあ、今日はこれで失礼するわね。」

そう言つて七佳は、バイクのエンジンをかけて待っている翔太の後ろに乗り、二人はそのままバイクに乗って去っていった。

奏「行っちゃったわね・・・」

エレン「ねえ、七佳さん、口ではああ言ってたけど、やっぱり本当は辛いと思うわ。」

響「うん・・・」

唯「・・・」

翔太「・・・七佳。」

七佳「何？」

バイクを運転しながら翔太は七佳に聞いた。

翔太「シヨックだったか？プリキュアがあんなにいと知って。」

七佳「・・・何言ってるのよ、そんなわけないじゃない。」

翔太「そうか？」

七佳「そうよ。私がそんなことをいちいち気にすると思うっ。」

翔太「・・・ならいいんだがな。」

翔太はそれ以上何も話すことなく帰路についた。

その頃、ルーイン帝国では

シヨウキ「キュアウイングだと!? 一体どうなっているんだ! あんな奴がいるなんて聞いていないぞ!」

ウイングの突然の登場に、シヨウキは立腹していた。

グレム「落ち着きなさいよ。また対策を考えればいいじゃないの。」

シヨウキ「ふん! それよりピュアードとザンゴはどこに行ったんだ!?!」

グレム「ピュアードはどうせまたトレーニングでしょ。ザンゴならイワオちゃんのところに行ったわよ。」

シヨウキ「何? 一体二人で何をしているんだ。」
グレム「さあ?」

ここは、城の入り口からいくらか離れたところにある研究室と思われる部屋。

そこにザンゴはいた。

その目の前には、眼鏡をかけた中年男性が座っている。

彼の名はアビューズ星人イワオ、帝国の兵器等の開発担当幹部である。

イワオ「・・・キュアユニバースにキュアウイングですか・・・」

ザンゴ「はい、いかがいたしましたでしょうか。」

イワオ「ふふ、たいした問題ではありませんよ。いずれ我々の手で片付けてやればいいのです。それよりザンゴ君、わかってますね?」

ザンゴ「勿論です。」

イワオ「では、私の準備が整い次第よろしくたのみますよ。ふふ・・・」

・・・」

遂に再会を果たしたリイナと七佳。

しかしその頃、ルーイン帝国では怪しい野望がうずまいていた。リイナと七佳、二人の物語がここに始まりを告げるのであった。

第6話「七佳の過去」(後書き)

次回内容は未定です。

現在ストーリーリー難航中の為、皆さんの要望を受け付けようと思いません。

何かあればどうぞ。

(クロスオーバーは出来ればまだご遠慮ください)

ユニバースとウイングの必殺技集（前書き）

次回の内容が決まるまでの繋ぎです。

オリキャラの設定と同様、新しいのが出るたびに更新します。

ユニバースとウイングの必殺技集

「ユニバースの必殺技」

「プリキュア・アースキック」

地球の大きいなる力を使って放つ必殺技で、現時点でのユニバースの最強技。

両足にエネルギーを集めると同時に空高く跳躍し、相手に向けて勢いよく急降下しながらキックをぶつける。

また、ギンが合体した状態で放つことで威力が倍増する。

「プリキュア・ヴェーナスストリーム」

金星の大きいなる力を使って放つ必殺技。

光を集めたコスモブレードの先端から、相手に向けて強力な光線を放つ。

「プリキュア・マーズフレイム」

火星の大きいなる力を使って放つ必殺技。

コスモブレードに炎を纏わせて素早く相手を切り裂く他、炎を纏った光の刃を放って攻撃することも可能。

「水星の大きいなる力」

詳細不明。

「プリキュア・ジュピターボルテージ」

劇中未使用。

GASH氏の考案。

「土星の大きいなる力」

詳細不明。

「天王星の大いなる力」
詳細不明。

「海王星の大いなる力」
詳細不明。

〈ウイングの必殺技〉

「プリキュア・ウイングバスター」

ウイングソードとウイングシヨットを使った必殺技。

2つの武器を合体させた後、ウイングブレスに『8・8・9』と番号を入力して光線を放つ。

「プリキュア・バスタードロップ」

現時点でのウイングの最強技。

ウイングブレスに『4・4・5』と番号を入力することで右足に全エネルギーを蓄積させ、上空から勢いよくキックを放つ。

第7話「特訓！タッグバトル！」（前編）（前書き）

オリキャラの設定にイワオを追加しました。

第7話「特訓！タッグバトル！（前編）」

この日、地球はいつにも増して平穏であった。人々は誰もがいつもと変わらぬ日常を過ごしている。

珍しいことにルーイン帝国の襲撃も無く、あまりの平穏さにこの日のリイナは少し退屈していた。

リイナ「……………」

退屈しのぎに、いつもの様に丘の上に寝転がるリイナ。

この日は特にすることもなく、ただ暇を持て余していた。

リイナ「…なんなんだろ…この平穏さ……………」

ギン「しかし、帝国が全く襲って来たないとはな……………」

リイナ「うん…来ないのはいいことだけど、今までにも何度かそんなことあったし……………」

ギン「このまま何も無ければいいんだが……………」

二人が帝国の動きについて考えているとそこへ、誰かがやって来た。リイナが体を起こして見上げると、そこには七佳と翔太が立っていた。

七佳「よっ。」

リイナ「あっ、七佳さん…こんにちは……………」

七佳「もう、そんなに気を使わなくても大丈夫よ。呼び方も七佳でいいから。」

リイナ「はぁ…でも、一応年上ですし…それに私、今まで誰かを呼び捨てにしたこと少ないから……………」

七佳「ふうん…ま、いつか。」

リイナ「それで、今日は二人で何の用ですか？」

七佳「ん？あぁ、別に大したことじゃないけどね。よく考えたら私達、まだちゃんと挨拶してなかったでしょ。」

リイナ「そういえば、確かに……………」

七佳「というわけで…改めて、私は神村七佳。こいつはあたし

の従兄の・・・」

翔太「相崎翔太だ。」

七佳「よろしくね。」

リイナ「あっ、私は皇リイナ。こっちはパートナーのギンです。こちらこそよろしくお願ひします。」

そう言つて二人は握手をかわした。

七佳「これからは、帝国を倒す為に一緒に戦つていきましょう。」

リイナ「はい。それで私、七佳さんにいろいろ聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

七佳「いいわよ。どんなこと？」

その頃、天宮邸ではプリキュア5のメンバーが唯に集められていた。かれん「模擬戦？」

唯「ええ。ちよつとあの二人を鍛えようと思つてね。」

うらら「それつて、リイナさんと七佳さんのことですか？」

唯「そうよ。ルーイン帝国を倒す為にはどうしてもあの二人には強くなつてもらふ必要があるの。だから私達で、模擬戦としてを6対6のチーム戦をやるわよ。」

くるみ「へえ、面白そうじゃない。」

のぞみ「うん！やるうよ！」

りん「いいけど、残り三人はどうするの？」

唯「響達を呼ぶわ。新技も出来たんだし、ちよつどいい機会でしょ。」

こまち「たまにリアルなところが出てくるわね・・・」

そしてその頃、リイナは七佳と翔太から二人の過去を聞かされていた。

リイナ「そうなんですか・・・帝国に家族を・・・」

七佳「ええ。だから私は、みんなの仇を打つ為にこうして戦ってるの。勿論、帝国のことは絶対許さないわ。」

翔太「……」

七佳「私はなんとしても帝国を潰す。その為には……」

その時、リイナの携帯から「Switch On!」の着メロが鳴った。

七佳「ん？電話？」

リイナ「あ、唯さんです。何だろ……？」

再び、天宮邸

うらら「あ、来ましたよ。」

リイナとギン、七佳は急いで天宮邸へとやって来た。

リイナ「遅くなってごめんなさい。」

奏「大丈夫ですよ。私達も今来たところですから。」

既に響、奏、エレンもやって来ていた。

唯「まあいいわ。全員揃ったことだし、早速始めましょう。」

そして一同は、唯に連れられて屋敷内にあるトレーニング用の広場へとやって来た。

りん「それにしても本当に広いですね……」

唯「当然よ。天宮グループは世界でもトップクラスの大企業なんだから。それじゃあみんな、変身するわよ。」

のぞみ「よし！みんな！」

響「うん！」

のぞみ、りん、うらら、こまち、かれん「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

くるみ「スカイローズ・トランスレイト！」

響、奏、エレン「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！」「」

リイナ「トランス！キュアユニバース！」

七佳「プリキュアインストール！」

『7・7・9』

唯「プリキュア！セラフィックアドベント！」

リイナ達は一齐にプリキュアへと変身した。

セラフ「全員変身したわね。それじゃあルールを説明するわよ。試合は2対2のタッグバトルで行うわ。戦い方は各自自由、どちらかが二人共負けを認めるか、私が続行不能と見なした時点で終了よ。これでいいかしら？」

メロディ「オッケー！」

ドリーム「じゃあまずは第一試合、いつてみよう！」

・第一試合 ローズ、レモネードVSリズム、ビート

ローズ「ビートが相手じゃ、絶対負けられないわね。」

ビート「あら、あまり私を見くびらない方がいいわよ。」

ローズ「・・・言ってくれるじゃない。」

ビート「言っとくけど、トレーニングに先輩後輩は関係なしだからね？」

ローズ「当然でしょ・・・！」

次の瞬間、二人は同時に目の前の相手に飛び掛かった。

二人の拳が空中で勢いよく激突する。

リズム「二人共なかなかやるわね。それじゃあ私達も始めましょうか。」

レモネード「はい。」

リズム「貴方と直接対面するのは初めてだけど、絶対負けないわよ！」

レモネード「望むところです！（・・・実を言うと、リズムとは前に一度戦ったことがあるんですけどね。まあ、あれは偽物でしたけど。）」

詳しくは『プリキュアオールスターズAnother Story キュアブラック、光の使者の新たな戦い』を参照。

しかし、前回と違って今度はリズム本人が相手であるということ
レモネードはすぐに認識した。

レモネード「シャイニングフルーレ！」

リズム「ファンタスティックベルティエ！セパレーション！」

互いに専用武器を取り出すやいなや、いきなりレモネードが切り掛
かった。

勿論リズムもベルティエで素早く攻撃を受け止める。

リズム「結構力強いよね・・・でも・・・負けない！」

リズムは力を込めてレモネードを押し返すと、

リズム「プリキュア！ファンタスティックピアチエーレ！」

ベルティエからハート型の炎をレモネードめがけて放った。

レモネード「わっ！」

間一髪でレモネードは攻撃をかわした。

リズム「私も手加減はしないわよ！」

レモネード「そうですね・・・じゃあ私も！」

レモネードは再び剣を構え、リズムと対峙する。

アクア「みんな気合いが入ってるわね。」

ユニバース「うん・・・凄い・・・」

ドリーム「ローズもレモネードも頑張れ！」

ウイング「これじゃ、私達も負けてられないわね。」

ユニバース「・・・」

ビート「プリキュア！ハートフルビートロック！」

ビートはローズに向けて光のリングを放った。

ローズ「まだまだ甘いわね。実力の差を見せてやるわ！」

そう言うとローズはあっさりビートの必殺技をかわし、ミルキイパ
レッタを取り出して構えた。

ローズ「ミルキイローズ・ブリザード！」

そして、ビートに向けて氷の花吹雪を放った。

ローズ「どうよ、これなら・・・」

しかし、ローズが勝利を確信したその時、ビートの背後から飛んで

きたハート型の炎がローズの必殺技を相殺した。

ローズ「なっ……!!」

見るとそこには、ベルティエを構えたリズムが立っていた。

ビート「助かったわ、リズム。」

リズム「このくらい当然でしょ。」

ローズ「くっ……!!」

そこへレモネードが駆け付ける。

レモネード「すみません。リズムを止められなくて……」

ローズ「大丈夫よ、心配しないで。」

レモネード「ローズ、私達もチームプレーでいきましょう。」

ローズ「…そうね。」

レモネード「まず、ローズがビートと戦ってる間に私がリズムの動きを止めます。その後私が合図したら、リズムを攻撃して怯ませてください。そうすればもうこっちのもんです。」

ローズ「わかったわ。」

そう言うと同時に、ローズはビートに飛び掛かった。

リズム「ビート!!」

加勢しようとするリズムだったが、

レモネード「貴方の相手は私です!!」

レモネードによって阻止された。

そのままレモネードは剣でリズムを押し返し、

レモネード「いきます!プリキュア!リズムチエーン!!」

リズムが怯んだ隙について光の鎖を放ち、彼女の動きを封じた。

前回と同じ手段を使って勝利しようというわけだ。

リズム「っ……!!」

レモネード「よし、ローズ!今です!!」

ローズ「オツケー!!」

しかし、この時レモネードは重要なことを忘れていた。

今戦っているリズムとビートが、本物であることを。

リズム「くっ……ビート!!」

ビート「ええ！」

ローズ「!?」

するとビートは、突然ローズの腹に膝蹴りを放って怯ませ、

ビート「プリキュア！ハートフルビートロック！」

レモネードめかけて光のリングを発射した。

レモネード「っ・あああっ！」

ビートの技はレモネードのすぐ近くに直撃し、その衝撃でレモネードは技を解除してしまった。

ローズ「レモネード！くっ・..！」

立ち上がるローズに、拘束から逃れたリズムが立ちはだかる。

リズム「悪いけど、貴方達じゃ私達のチームワークには勝てないわよ。」

ローズ「なんですって!?!」

レモネード「うああああっ！」

そこへ、ビートに押されてレモネードが吹っ飛ばされてきた。

ローズ「レモネード！」

レモネード「うっ・..！」

ビート「リズム！」

リズム「ええ！」

二人はそれぞれファンタスティックベルティエとラブギターロックを構えた。

リズム、ビート「翔け巡れ！トーンのリング！プリキュア!！」

リズム「ミュージックロック！」

ビート「ハートフルビートロック！」

それぞれの武器から光のリングが放たれ、レモネードとローズに向かって飛んでいく。

ローズ「っ！」

レモネードを抱きしめながら、ローズは目をつぶった。

その時、

セラフ「はっ！」

突然セラフが割り込み、セラフィムコートでバリアを形成して二人の必殺技を打ち消した。

レモネード「え・・・？」

セラフ「終了よ。勝負はあったわ。」

リズム「・・・ってことは？」

セラフ「今の勝負はリズムとビートの勝ちよ。」

ビート「や・・・やったあ！やったよ！メロディ！」

メロディ「うん！凄いよ、二人共！」

メロディ、リズム、ビートは三人で喜び合う。

レモネード「ごめんなさい・・・私のミスです・・・」

ローズ「気にすることないわ。私達のチームワークが劣ってたのよ。もっと頑張らなきゃね。」

レモネード「・・・そうですね。」

ルージュ「ふう・・・それじゃ、次は私達の番ですね。」

ミント「ええ。頑張りましょう。」

メロディ「私だって負けないんだから！」

というわけで、タッグバトルは次回に続く！

第7話「特訓！タッグバトル！」（前編）「（後書き）」

次回、後半戦！

頑張って更新するぞ！

第8話「特訓！タッグバトル！（後編）」

・第二試合 ルージュ、ミントVSセラフ、メロディ

メロディ「な・・・なんか、負ける気がしないんだけど・・・」

セラフ「あら、そう?」

ルージュ「さすがにこの二人はちょっと厳しいですね。」

ミント「ええ。とにかく、出来る限り戦いを長引かせないようにしましょう。」

そう言つて、二人はファイヤーフルーレとプロテクトフルーレを取り出して構えた。

セラフ「メロディ、貴方はキュアルージュだけを相手にしなさい。」

メロディ「え?う、うん。」

そして、セラフはセラフイムセイバーを取り出すやいなや、目にもとまらぬ速さでミントに飛び掛かった。

ミント「は・・・速い!」

すぐに剣で攻撃を受け止めたミントは、なんとかセラフを押し返そうとする。

ルージュ「ミント!くっ・・・!」

ルージュは助けに向かおうとするが、そこへ飛び掛かってきたメロディと戦闘になる。

メロディ「ごめん、ルージュ。でも私だって負けたくないの!」

ルージュ「っ・・・!」

メロディは一旦ルージュと距離を置くと、ミラクルベルティエを取り出した。

メロディ「ここでやらなきゃ、女がすたる!」

ルージュ「面白いじゃない。だったら私も全力でいくわよ!」

ルージュがそう言い終えると同時に、二人は再び激突した。

一方・・・

セラフ「プリキュア!セラフイムインパクト!」

「ミント「きゃあああ！」

セラフの技を受けてミントは大きく吹っ飛ばされた。

「ミント「くっ……！」

セラフ「どうしたの？まさかその程度じゃないわよね？」

「ミント「っ……」

ミントは立ち上がり、再び剣を構える。

セラフ「……そうこなくっちゃね！はああああ！」

「ミント「私だって……負けるわけにはいかないわ！はああああっ
！」

しかし、予想以上にセラフの実力はミントを上回っていた。

何度ミントが切り掛かってもセラフはことごとく片方の剣で攻撃を受け止め、その瞬間にもう片方の剣でミントを切り付けるのを繰り返していく。

「ミント「あああああっ！」

セラフの攻撃で徐々に傷だらけにされていくミント。

その様子を見たルージユはなんとか助けようと試みるが、メロディとの戦いで精一杯だ。

「ルージユ「メロディ！悪いけどこうなったらすぐにも貴方に勝たせてもらっわよ！」

メロディ「こっちだって、そう簡単にはやられないんだから！」

そう言っつてメロディはベルティエをルージユに向けて構え、必殺技を放った。

メロディ「プリキュア！ミュージッククロンド！」

メロディが光のリングを放つと同時に、ルージユも両腕を交差した。ルージユ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

ルージユの放った炎の球とメロディの放った光のリングが勢いよく激突し、強烈な爆発が起きた。

するとその瞬間、炎の中からルージユが現れ、素早い動きでメロディに切り掛かった。

メロディ「なっ……！」

メロデイもとつさにベルテイエで攻撃を受け止めようとしたが、ルージユの力に押されて大きく後退してしまった。

ルージユ「ミント!」

メロデイを退けたルージユは、すぐにセラフに苦戦しているミントの元へ駆け付けた。

ルージユ「大丈夫ですか?」

ミント「ええ・・・」

ルージユ「セラフ!こつからは私が相手よ!」

セラフ「・・・いいわよ。」

ルージユ「はああああ!」

ルージユとセラフは互いに剣で何度も相手に切り掛かり、二人の剣が激突を繰り返す。

ルージユ「はっ!」

その時、ルージユの背後からいきなりメロデイが攻撃してきた。

メロデイ「まだ終わってないんだから!」

ルージユ「っ!」

攻撃をかわしたルージユは一旦セラフとメロデイから離れると、再び両腕を交差した。

ルージユ「プリキュア!ファイヤーストライク!」

ルージユはセラフめがけて素早く炎の球を放つ。

メロデイ「セラフ!」

しかし、セラフは全く同じることなく、セラフィムコートでバリアを形成して炎の球を跳ね返した。

更に、跳ね返された炎の球はそのままミントへ向かってまっすぐ飛んでいく。

ミント「・・・!」

ルージユ「危ない!」

すると、突然ルージユがミントの前に立ち、次の瞬間炎の球がルージユに命中した。

ルージユ「っ・・・ああああっ!」

攻撃を受けたルージュは、その場に倒れた。

ミント「ルージュ！どうして・・・」

ミントが駆け寄ると同時に、ルージュは再び立ち上がった。

ルージュ「っ・・・私、あの時決めたんです。ミントは・・・・・・・・・・
私を守るって！！」

ミント「ルージュ・・・」

ルージュ「はああああっ！」

そして、ルージュは再びセラフに立ち向かうが、セラフはセラフィムセイバーで容赦なくルージュを追い詰めていく。

ルージュ「くっ！」

セラフ「メロディ！今よ！」

ルージュ「!？」

ルージュが慌てて後ろを向くと、メロディが必殺技の構えに入っていた。

メロディ「プリキュア！ミラクルハートアルペジオ！」

メロディの放ったハート型の炎が、ルージュに襲い掛かる。

するとその時、

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

ミントが緑のエネルギー弾を放ち、メロディの必殺技を相殺した。

ルージュ「ミント！」

ミント「私だつて助けられてばかりいるわけにはいかないわ。一緒に戦いましょう。」

ルージュ「はい！」

その様子を見て、セラフはかすかに微笑んだ。

メロディ「やるわね！だったら私達も・・・」

そう言つて再び戦おうとするメロディを、セラフが制止した。

セラフ「これ以上戦う必要は無いわ。この勝負は引き分けよ。」

ミント「え？」

メロディ「ひ、引き分け!？」

セラフ「ええ。理由は言わなくてもわかるわね。さ、最後の試合を

始めましょう。」
メロディ「うん……」
セラフ「二人共、頑張るのよ。」
ユニバース「は、はい。」
ウイング「任せといて！」
レモネード「あっちのチーム、強いですね……」
ミント「そうね。まだ一勝も出来てないけど、二人共大丈夫？」
ドリーム「任せて、私とアクアがみんなの分まで頑張るから！ね、
アクア！」
アクア「ええ！」

・第三試合 ドリーム、アクアVSユニバース、ウイング
ウイング「このコンビ組むの、初めて会った時以来ね。」
ユニバース「うん。準備はいい？ウイング。」
ウイング「勿論よ、ユニバース。」
そう言っつて、二人は同時に武器を取り出し、それぞれの相手に向か
つていった。
それを見て、ドリームとアクアもフルーレを取り出して身構える。
ドリーム「くるよ！」
アクア「ええ！」
ユニバース「はっ」
ウイング「はああああ！」
ユニバースはアクアに、ウイングはドリームに素早い動きで切り掛
かった。
どちらも一進一退の攻防を続ける。
アクア「っ！」
ユニバース「くっ……！」
アクアとユニバースも、互いに一步も譲らぬ勝負を繰り広げていた。
アクア「貴方の実力を直接見るのは初めてだけど、思った以上にや
るじゃない。」

ユニバース「ありがとう。でも・・・今は戦いに集中しましょう！」
そう言うとユニバースは、コスモブレードを高く振り上げた。

ユニバース「プリキュア！マーズフレイム！」

そして、炎を纏った剣でアクアを攻撃する。

しかしアクアも負けてはいない。

剣の一撃を素早くかわすと同時に両腕を交差し、必殺技を放った。

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

水の矢が勢いよく放たれ、ユニバースに襲い掛かる。

ユニバースは剣を構えて攻撃を防いだが、剣を包んでいた炎は消えてしまった。

アクア「私に炎技は通用しないわよ！」

ユニバース「だったら・・・プリキュア！」

ユニバースは剣に光を集めると、その先端をアクアに向けた。

ユニバース「ヴィーナストリーム！」

次の瞬間、剣の先端から勢いよく光線が放たれた。

それに対してアクアはうるたえることなくドリームに呼び掛ける。

アクア「ドリーム！」

ドリーム「っ・・・オツケー！」

ウイングとつばぜり合いを演じていたドリームは、素早く後退してアクアにフルーレを投げ渡した。

右手に自身のトルネードフルーレ、左手にドリームのクリスタルフルーレを持った二刀流となったアクアは、二本の剣を交差させて光線を受け止め、力強く押し返すことで打ち消した。

ユニバース「やるじゃない・・・！」

アクアの実力により若干戸惑いつつも、ユニバースは再び彼女に立ち向かっていった。

ウイング「武器なしで私に挑むなんて、いい度胸じゃない！」

フルーレを渡して丸腰となったことで劣勢に陥ったドリームは、とにかくウイングの攻撃をかわしていた。

ウイング「どうしたの？さっきまでの勢いは!？」

そう言つてウイングは、ドリームに向けて銃を構える。

ドリーム「・・・！」

それを見て即座にまずいと感じたドリームは、素早く両腕を交差した。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

ドリームは全身に光を纏い、ウイングめがけて突っ込んでいく。

ウイング「っ！」

ウイングは威嚇射撃を繰り返すが、全てドリームに跳ね返されてしまふ。

ドリーム「はああっ！」

ウイング「！」

ユニバース「いけない！」

アクアに押され気味のユニバースは、ウイングの様子に気付くやいなや素早くアクアから離れ、ウイングの前に立った。

ウイング「ユニバース！」

ユニバース「はああああっ！」

ユニバースは高く跳躍すると、両足にエネルギーを込めて勢いよく急降下した。

ユニバース「プリキュア！アースキック！」

ドリームの体当たりとユニバースのキックが激しく激突し、やがて二人共相手の攻撃で大きく吹っ飛ばされた。

ユニバース「きゃっ！」

ドリーム「うわあっ！」

アクア「ドリーム！」

ウイングとアクアはそれぞれのパートナーの元へ駆け寄る。

ウイング「大丈夫？」

ユニバース「うん、なんとか・・・」

ウイングに支えられながら立ち上がると、ユニバースはドリームとアクアに言った。

ユニバース「さすがね、二人共。でも・・・次の一撃で終わりにし

ましよう。」

ドリーム「えっ?」

ユニバース「どっちのチームワークが上か、これで決めるのよ。」

ユニバースの突然の提案に二人は一瞬悩んだかに見えたが、すぐに答えた。

アクア「いいわよ。ね、ドリーム?」

ドリーム「うん!でも、手加減はなしだからね!」

ウイング「よし、決まりね!」

そう言つてウイングは剣と銃を一つに合体させ、ブレスに番号を入力した。

『8・8・9』

銃にエネルギーが蓄積されていく横で、ユニバースも再び剣に光を集めていく。

ドリーム「アクア!あの技いくよ!」

アクア「ええ!」

ドリームとアクアは同時に両腕を交差して必殺技を放った。

ドリーム「プリキュア!シューティングスター!」

アクア「プリキュア!サファイアアロー!」

そして次の瞬間、ドリームは光を纏いながらアクアの放った水の矢と一体化し、そのまま勢いを上げて突っ込んでいく。

同時にユニバースとウイングもそれぞれ剣と銃から光線を放った。

ユニバース「プリキュア!ヴィーナスストリーム!」

ウイング「プリキュア!ウイングバスター!」

二人の放った光線が一つとなり、ドリームと激しくぶつかり合う。

ドリーム「くっ……!」

徐々にドリームが二人を押ししていくが、ユニバースとウイングも負けじと押し返そうとする。

ドリーム「っ……私とアクアの……ううん、私達六人のチーム

は、負けたりしないんだから!」

ユニバース「……!」

ウイング「なっ・・・!!」

ドリーム「はあああああっ！」

その途端、ドリームは強烈な勢いで光線を打ち破りながら二人に激突した。

ユニバース「きゃあああっ！」

ウイング「うああああっ！」

勢い余って三人は思い切り地面に倒れこんだ。

ドリーム「いたた・・・あっ！二人共、大丈夫!？」

ウイング「な・・・なんとかね・・・」

ユニバース「私達は大丈夫だから、気にしないで。」

そこへ、セラフがやって来た。

セラフ「勝負あつたわね。」

それから数分後、プリキユア達は全員変身を解き、天宮邸で休息をとっていた。

模擬戦の結果は、互いに一勝一敗一分けという結果になった。

七佳「ふう・・・模擬戦のはずなのに、結構疲れたわね。」

リイナ「そうですね。」

そこへ、りんと奏が紅茶とカップケーキを持ってきた。

奏「みんなお疲れさま。お茶が入ったわよ。」

のぞみ「やったあ！」

響「待ってました！」

うらら「いただきます！」

のぞみ、うらら、響はすぐさまカップケーキに手をのばした。

奏「あらあら、慌てなくてもまだあるわよ。」

りん「まったく、あんた達は・・・」

のぞみ「？」

エレン「ふふ。結構楽しかったわね、模擬戦。」

響「そう？私はもうちょっと楽しみたかったかな。」

こまち「でもそれぞれの実力を確認するいい機会だったと思うわ。」

くるみ「うらら、私達はもう少し鍛える必要がありそうね。」

うらら「はい！頑張ったのぞみさん達より強くなってみせましょう！」

かれん「のぞみ、聞いた？どうやら私達も負けてられないみたいよ。この調子で頑張るわよ。」

のぞみ「はい！」

かれん「大丈夫なの？もう・・・」

リイナ「ふふ、みんな楽しそうね。ちょっと羨ましいな・・・」

かれん「心配しなくても、すぐに二人も馴染めるわよ。」

リイナ「・・・そうね。ありがとう。」

七佳「リイナ、わかってるわね。私達もこれからもっと強くなるわよ。」

リイナ「はい、二人で強くなっていきましょう。プリキュアとして・

・・・」

七佳「・・・どうかした？」

リイナ「・・・いえ、なんでもありません。」

七佳「ふうん・・・あれ、そういえば唯はどこにいったの？」

その頃、唯は邸の玄関で誰かと話していた。

????「どうですか？あの二人は。」

唯「なかなか面白い子達ですね。これからは楽しみです。」

????「そうですか。それなら安心です。これからもリイナと七佳を導いてやってくださいね。」

唯「はい。」

????「じゃあ、僕はこれで。」

そう言っつて、その男性は去っていった。

唯「任せてください・・・ファウストKさん。」

第8話「特訓！タッグバトル！」（後編）「（後書き）」

ストーリーに関するアイデアはまだまだ募集中です！

第9話「前作のおさらい」(前書き)

総集編です。

第9話「前作のおさらい」

ある日、リイナと七佳、ひかり、くるみ、ラブ、美希、祈里、つぼみ、えりか、いつき、ゆりはある場所に来ていた。

ラブ「ここに来るのも久しぶりだね。」

リイナ「ここは・・・？」

そこは、以前世界の支配者コンカロードと戦った際にメンバー全員で約束を交わしたあの草原だった。

えりか「久しぶりに来たけど・・・やっぱここ気持ちいい〜！」

七佳「確かに・・・なかなかいいところじゃない。」

そして一同は、しばらくの間爽やかな風にあたっていた。

いつき「そういえば・・・気付けばあの戦いからもう2ヶ月以上も経つんだね・・・」

七佳「あの戦いって、例のコンカロードとの？」

いつき「うん。」

つぼみ「もうそんなに経つんですか。」

ひかり「早いですね。」

ラブ「アイリさんに勇奈さん、元気にしてるかな？」

リイナ「誰なの？」

祈里「私達がコンカロードに苦戦してた時に、助けにきてくれたの。」

えりか「しかも、二人共すっごく強かったんだから！」

七佳「じゃあその二人、もしかして・・・」

くるみ「ええ、あの二人も私達と同じプリキュアよ。」

ゆり「ただし、別の世界のね。」

七佳「やっぱり・・・プリキュアは他の世界にも大勢いるのね・・・」

リイナ「七佳さん・・・？」

七佳「・・・それで、その二人はどんな人だったの？」

つぼみ「アイリさんのプリキュアはキュアデイリーとって、私達を始めとするあらゆるプリキュアの能力を使えるんです。」

アイリ「プリキュア！スキャニング・チェンジ！」

『キュアライド！デイリー！』

デイリー「全ての光の集大成！キュアデイリー！」

「貴方達に殺された仲間の痛み、思い知りなさい！」

『キュアライド！ルージユ！ファイナルgogoroライド！スススス
トライク！』

「元気でね、この世界のプリキュア達。」

ひかり「勇奈さんは、キュアコズミックというプリキュアに変身するんです。」

くるみ「コズミックはユニバースと同じ宇宙の力を使うプリキュアで、セラフに負けなくらい強かったわ。」

勇奈「プリキュア！コズミックチャージ！」

コズミック「平和を守護する星の輝き！キュアコズミック！」

「私達はそれぞれの世界で生きてるみんなが好きだから！あんだ達みたいな奴らの思い通りには絶対させない！」

「プリキュア！コズモデストロイア！」

「当然よ。だって友達なんだから。」

ラブ「二人共、強くてかつこよかったなあ・・・」

七佳「・・・ねえ。」

ラブ「何ですか？」

七佳「もし良かったら、コンカライドとの戦いについて話してもらっていいかな？」

ラブ「いいですよ。ね、つぼみ。」

つぼみ「はい。そもその始まりは、街にトルーパー達が現れたの

がきっかけでした。」

トルーパー「プリキュア、発見。」

「プリキュア、我々トルーパーが排除します。」

いつき「トルーパー達は一体一体は弱かったけど、数が多すぎてこずったね。」

えりか「何度も戦いすぎて疲れたし。」

つぼみ「それから私達は、トルーパーを追いかけたのがきっかけでコンカロード達がアジトにしている塔に集められたんです。」

くるみ「そこで初めてコンカロードとその部下の十闘士達に会ったのよね。」

ゆり「ええ、忘れもしないわ。」

ラーセニー「このラーセニー様に任せておきな。」

トリック「十闘士トリック、ここに。」

スランダー「このスランダー様を無視して先に進むとは、いい度胸ではないか。」

グリード「俺の名はグリード。コンカロード様の野望の為に、貴様らを倒す！」

エストレンジ「俺はエストレンジ。よろしく頼む。」

ライアー「・・・我が名は・・・ライアー・・・プリキュア・・・俺と戦え・・・」

キリング「私の名はキリング。キュアピーチ、覚悟するがいい！」

インモラル「僕はインモラル。よろしく頼む。」

プレジューデイス「せっかくこのプレジューデイス様がわざわざ来てやったってのに、もう行っちゃまうことないだろ。俺とも戦ってくれよ。」

ラス「貴様らなど、コンカロード様が相手をするまでもない。ここで私がまとめて始末してくれる！」

美希「思い出してみると、どいつもこいつも厄介な奴らばかりだったわね。」

ひかり「その十闘士達と共に現れたコンカロードによって彼の野望を知らされた私達は、この場所で約束したんですよね。」
祈里「絶対、生きてまたここに集まるうってね。」

つぼみ「それじゃ皆さん、また明日会いましょう。」
咲「うん。」

なぎさ「きつとまた、ここで会おうね！」
のぞみ「約束だよ。」

リイナ「やっぱりみんな、凄く仲がいいのね。」
いつき「うん．．．でも．．．．．」

つぼみ「．．．現実には、私達の想像を遥かに上回っていました．．．．．」

七佳「どういうこと？」

ラブ「．．．．．実は．．．．．」

美希「．．．私やえりか、いつき、せつな達は．．．十闘士達との戦いで一度命を落としたんです。」

七佳「えっ．．．？」

リイナ「．．．そんな．．．．．」

ルージュ「死ぬなんて簡単に言わないで！私達は6人一緒よ！」

レモネード「．．．そうでしたね．．．．．ルージュ．．．ミントは無事ですか？」

ルージュ「．．．弱ってるけど、この通り無事よ。」
レモネード「よかった．．．守れて．．．．．」

ルージュ「レモネード？しっかり！ねえ！レモネード！．．．うらら．．．．．」

いつき「うららが死んだ時は、正直信じられなかったよ。あんなことになるなんて思ってもなかったし。」

くるみ「私も、のぞみやかれんも、凄く辛かったのを覚えてるわ。」
えりか「その後、いつきはうららの仇を討ったんだよね。」
いつき「うん。」

サンシャイン「これ以上、貴方達の好きになんかさせない！」

スランダー「ならかかってこい。そして自分の無力さを思い知りな！」

サンシャイン「ふんっ！」

いつき「スランダーは強かったけど、どうにか勝てたよ。でも……

「
リイナ「……でも？」

いつき「……直後に現れたエストレンジに圧倒されて……」

サンシャイン「ルージュ……マリン……ムーンライト……ブ
ロツサム……ごめんね……私……」

七佳「……」

つぼみ「……それから、苦戦は続きました。」

美希「こまちさんにりん、なぎささん、私とせつな、のぞみでさえも奴らには適わなかったわ。」

ラブ「美希さんとせつなが死んだ時は私も悲しみのあまり挫けそうになったっけ……でも、ブッキーがそんな私を励ましてくれたんだよね。」

パイン「どうしていつまでも自分を責めるの!？」

「確かに、2人はラブちゃんの為に死んだのかもしれない。でも、

それはラブちゃんのせいじゃない。絶対に。」

「2人はラブちゃんを守る為に命を犠牲にしたのよ。それって、2人はこの世界を託したってことじゃないの？」

「だったら、2人の犠牲を無駄にしちゃ駄目でしょ？2人の想いを継いで戦って！」

ラブ「ブッキー、あの時は本当にありがとう。ブッキーがいなかったら、私どうなってたことか・・・」

祈里「ううん、そんなことないよ。あの時も言ったけど、私は当然のことをしたただけだもん。」

美希「へえ、そんなことが・・・」

ひかり「そういえば、ほのかさんも・・・」

ホワイト「お願い・・・私のことはほつといて・・・私、なぎさのそばにいたいので・・・」

ルミナス「っ・・・!!」

『パシッ!!』

ルミナス「いい加減にしてください！なぎささんが死んで、辛いのはよくわかります。でも、それで悲しむだけでいいんですか？そんなほのかさんを見て、なぎささんが喜ぶと思いますか？」

「今ほのかさんがするべきことは、悲しむことじゃない。なぎささんの為に、力の限り戦うことでしょうか？ここで立ち止まっていても何も始まりません。あいつを倒して、なぎささんを安心させてあげる。それが今ほのかさんのやらなきゃいけないことじゃないですか。」

ひかり「・・・」

七佳「で、それからどうなったの？」

つぼみ「その後も、かれんさんとえりかが犠牲になってしまいました。でも、私達は悲しみを乗り越えて十闘士に立ち向かったんです。」

「ラブ、そして、最後の十闘士ラスを倒して遂にコンカロードのところまでたどり着いたんだけど……」
「くるみ……コンカロードの力の前に、全員為す術もなく追い詰められたわ。」
「ひかり、更に街ではトルーパー達が一斉に暴れだして、さすがにもう駄目かと思つたその時……」
「つぼみ、メロディとリズム、コズミックにディリー、そして、別の世界のヒーロー達が助けに来てくれたんです。」

「通りすがりの仮面ライダーだ。」
「俺、参上!!」
「キバつて、いくぜー!」「……お婆ちゃんが言っていた……ま
ずい飯屋と悪の栄えた試しはない。」
「振り切るぜ!」
「……さあ、お前の罪を数えろ!」
「楽して助かる命がないのは、どこも一緒だな。」
「特捜戦隊!デカレンジャー!」
「炎神戦隊!ゴー!オンジャー!」
「天下御免の侍戦隊!シンケンジャー!参る!」
「星を護るは天使の使命!天装戦隊!ゴセイジャー!」
「海賊戦隊!ゴーカイジャー!」

えりか「他にも五星戦隊ダイレンジャーや、トミカヒーロー達も来てたんだって。」
七佳「そういえば、私達この戦いで初めて出会ったんだっけ。」
リイナ「はい。」

リイナ「トランス!キュアユニバース!」
七佳「プリキュアインストール!」

ユニバース「銀河に光る希望の星！キュアユニバース！」
ウイング「天駆ける正義の羽ばたき！キュアウイング！」
キリング「馬鹿な！プリキュアがまだいただと!?」
ユニバース「キュアウイング・・・？」
ウイング「キュアユニバース・・・？」
ユニバース「ウイング、同時に奴に必殺技を仕掛けるわよ！」
ウイング「ええ、いいわ！」
ユニバース「プリキュア！アースキック！」
ウイング「プリキュア！バスタードロップ！」

つぼみ「そうだったんですか？」
七佳「ええ。正直、また会うとは思ってなかったけどね。」
くるみ「ありがとう。かれんの仇を討つてくれて。」
リイナ「いいのよ。それにかれんは今も元気じゃない。」
ラブ「一方で私達も、コンカロードから光のエネルギーを奪うことに成功したんですが、またしてもコンカロードに追い詰められてしまいました。」
ひかり「だけどその時、死後の世界からなぎささん達が帰ってきたんです。」
ゆり「なぎさ達のおかげで、私達は遂にコンカロードを倒すことが出来たわ。」

コンカロード「くっ・・・負けるものか！私は世界の支配者！貴様らごときに負けるはずがない！」
ブラック「まだわかってないみたいね！」
ブロッサム「貴方達は、自分達の目的の為に多くの命を奪いました！」
ピーチ「人の命を何とも思わない奴らに、私達は絶対負けられないんだから！」
ドリーム「私達プリキュアがいる限り、この世界を貴方達の思い通

りにはさせない！」

ブライト「どんな敵が来ようとも、私達がこの世界を守ってみせる。」

ブラック「いつだって、私達の想いは一つ！」

プリキユア達「「私達はどんな時でも仲間を信じ、みんなを絶対に守ってみせる！」」「」

コンカロード「ぐうっ……！！！」

プリキユア達「「はああああああああ！！！！！」」「」

コンカロード「く……うおおおおおお！！！！！」

ラブ「そして、私達は再びこの場所に集まり、誓ったんです……」

ひかり「私、心配なんです……また恐ろしいことが起こるんじゃないかって……」

なぎさ「……大丈夫。」

ひかり「え？」

なぎさ「確かに、全てが終わったわけじゃない。いつまた強大な悪が襲ってくるかわからないわ。でも……」

ほのか「でも？」

なぎさ「この世界には、私達プリキユアがいる。だから、この世界を悪の思い通りにはさせない。みんなを守る為なら、私達は何度だって立ち上がる！」

ほのか「なぎさ……」

なぎさ「私達プリキユアは、命ある限り戦い続ける！そして、どんな敵が来ようとも、絶対勝ってみせる！プリキユアオールスターズは、これからも張り切っていくわよ！」

くるみ「こうして思い出してみると、結構厳しい戦いだっただわね。」

美希「でも、私達はこうして勝利することが出来た。」

祈里「これも勇奈さんやアイリさん、そして、私達を応援してくれ

たみんなのおかげね。」

リイナ「でも・・・私はみんなが頑張ったからこそ勝てたんだと思うよ。」

つぼみ「そう・・・ですか？」

七佳「私もそう思うわ。あの戦いで一番頑張ったのは、言うまでもなく貴方達自身じゃない。」

リイナ「みんながコンカロードと戦ったことで、勇奈さん達もそんなみんなを助けてくれたんでしょ？自分達に堂々と自信を持ってもいいと思うな。」

ひかり「リイナさん・・・七佳さん・・・」

そこへ、翔太とギンが走ってきた。

翔太「七佳！ここにいたか！」

七佳「翔太？どうしたの？」

リイナ「もしかして・・・」

ギン「ああ、帝国の奴らがまたやって来た。」

リイナ「やつぱり・・・」

七佳「久しぶりのお出ましじゃない。リイナ、急ぎましょう！」

リイナ「はい！」

七佳「貴方達もいくわよ！」

ラブ「え？」

七佳「どんな敵が来ようと、みんなで絶対勝ってみせるんですよ！」

つぼみ「・・・はい！」

ゆり「そうだったわね・・・みんな、いくわよ！」

一同「・・・はい！」

そして、一同は帝国に立ち向かうべく街へと向かっていった。

第9話「前作のおさらい」(後書き)

因みに、今だから言えますが、当初はマジでプリキュア全滅させようと思った時もありました。

しばらくはこっちの更新を優先しようと思っています。

第10話「のぞみがさらわれた!？」(前書き)

なんかやたら長くなったな・・・

第10話「のぞみがさらわれた!？」

ある日の帝国、

シヨウキ「おのれプリキュア・・・」

なかなか魔石を奪えないでいるシヨウキは、少し機嫌が悪かった。シヨウキ「俺達が活動を再開してから一ヶ月以上経つというのに、未だに魔石が二つ共手に入らないとはどういうことだ!」

グレム「そうよねえ・・・」

シヨウキ「ザンゴ、本当に奴らが魔石を持つてるのか?」

ザンゴ「ええ、勿論です。」

シヨウキ「だったらいいんだがな・・・次はあいつに任せるとするか。」

その頃、唯とのぞみは喫茶店で仲良く話していた。

何故二人が一緒にいるのかというと、今日唯はかれんと会う約束をしていたのだが、かれんが来られなくなったのでその代わりとしてのぞみを呼んだからである。

のぞみ「そういえば、唯さんってかれんさんと知り合いなんですよ。ね。」

唯「ええ。元々天宮家と水無月家は私が生まれる前から親交が深かったからね。私とかれんもすぐに仲良くなれたわ。」

のぞみ「二人共、いつも仲良さそうですもんね。」

唯「あら、そう言うのぞみだって、かれんと最近いい感じじゃない。」

のぞみ「そ、そんなことないですよ。」

唯「何言ってるの。この前の模擬戦でも、抜群のコンビネーション発揮してたじゃない。」

のぞみ「・・・そう・・・ですか?」

唯「うん、私の方こそ見習いたいくらいよ。」

のぞみ「あ……ありがとうございます。」

のぞみは照れ臭そうに言った。

唯「ふふ、これからも頑張ってるね。」

それからしばらくの間、仲良く話し続ける二人。

そんな二人を、店の外から二人の怪しい男が見つめていた。

????「な、なかなか出てきませんね……」

????「よし、もうすぐ計画を実行だ。杉山、あの娘が店を出て一人になったところを襲え。」

杉山「あ……角田の親分、やっぱり誘拐なんて止めましょうよ。」

┌

角田「ああ？今更何言ってるんだよ。」

杉山「だって天宮家といえば、世界でもトップクラスの大企業ですよ。下手なまねしたらどんな目に会うか……」

角田「馬鹿野郎、警察が怖くて誘拐犯が勤まるかってんだ。」

杉山「そうですね……」

角田「いいからお前は黙って俺の言う通りにしてる。」

そして、店を後にしたのぞみと唯は帰路に着いていた。

のぞみ「ところで、今日はかれんさんと何を話すつもりだったんですか？」

唯「実は、かれんにもリイナの成長を見守ってもらおうと思ってね。」

┌

のぞみ「リイナさんを？」

唯「あの子、リイナのこと気にしてるみたいだし、ちょうどいいかなって思ったの。その話はまた私から直接かれんに伝えるわ。」

のぞみ「そうですねですか。」

唯「私はこれからリイナのところに行くけど、一緒に来る？」

のぞみ「いえ、私はみんなのところに行つてきます。」

唯「わかったわ。じゃあ、ここでお別れね。」

のぞみ「はい、唯さんも頑張ってくださいね。」

そして、二人は互いに別々の方向へ歩きだす。

のぞみが振り向いた時には既に唯の姿は見えなくなっていた。

のぞみ「唯さんも頑張ってるなあ・・・私も負けないうようにしななきゃ。よし、頑張るぞー！頑張って・・・」

その瞬間、のぞみは背後にいた杉山に突然ハンカチで口を塞がれた。のぞみ「んんっ！？んんっ！んんっ！」

のぞみは必死でもがくが、次第に力が抜けていく。

どうやらハンカチに薬がしみ込ませてあつたらしい。

のぞみ「ん・・・んん・・・」

遂にのぞみは意識を失ってしまった。

杉山「・・・ああ・・・やつちやつたよ・・・何やってんだろ、俺・・・」

眠ったのぞみを抱えた杉山が罪悪感に襲われていると、そこへ角田が車を走らせてきた。

角田「何してやがる！早く乗れ！」

角田は杉山の正面で停止し、急かすように命令した。

杉山は後部座席にのぞみを寝かせて助手席に乗り込み、角田は再び車を走らせる。

角田「よくやった。さすがは俺の子分だ。」

杉山「あ、ありがとうございます・・・」

嫌そうな杉山とは対照的に、角田は上機嫌だった。

そして、車は赤信号で一旦停止した。

角田「後はこいつの家に脅迫電話をかけて身代金を・・・・・・おおお！？」

後部座席を振り返って、角田は驚愕した。

さらうはずだった少女とは別の少女が眠っていたのだから無理もない。

角田「おい！お前何やってんだ！」

杉山「は、はい？」

角田「はいじゃねえよ！天宮唯はこの娘じゃねえんだよ！お前、隣にいた方の娘をさらいやがったな！」

杉山「え、えええ！？」

角田「くそっ……！とりあえず一旦この娘を連れていく。考えるのはそれからだ。」

そう言つて、角田は猛スピードで車を走らせる。

何者かが後を付けていることにも気付かず……

その頃ナッツハウスでは、全員なかなか来ないのぞみを心配していた。

こまち「のぞみさん、どうしたのかしら……」

うらら「本当ですね……」

りん「あの子が遅刻するのはよくあることだけど、いくらなんでも遅すぎるわ。」

ココ「のぞみに電話してみるが？」

くるみ「そうね……あら、かれん？」

そこへ、学校帰りのかれんがやって来た。

かれん「生徒会の仕事があった以上に早く終わったのよ。」

ナッツ「のぞみに会わなかったか？」

かれん「会わなかったけど……唯と一緒にじゃないの？」

うらら「はい。唯さんに電話したら、とっくに別れたって……」

くるみ「まさか、何かあったんじゃない……」

かれん「……のぞみ……」

のぞみ「……ん……」

どこかの倉庫かと思われる場所で、のぞみは目を覚ました。

のぞみ「（ここはどこ……？確か私、みんなのところに行こうとして……そしたらいきなり眠くなって……とにかく、まずここを出よう……）」

そう思つてその場を離れようとしたが、どうしたことか体が全く動

かない。

のぞみ「(う、動けない！何これ、縛られてる！？)」
気が付くと、のぞみは全身を縄で嚴重に縛られていた。

更にそれだけでなく、口には声を出せないように猿轡まで噛まされ
ている。

これによって、のぞみは助けを呼ぶことも出来なくなってしまっ
ていた。

のぞみ「んううっ！ううっ！」

どうにかして拘束から逃れようと試みるが、いくらもがいても縄が
緩む様子は全く無く、助けを呼ぼうにも猿轡のせいでまともに喋る
ことすら出来ない。

のぞみ「うう・・・」

のぞみが仕方なく抵抗をやめると、そこへ角田と杉山がやって来た。

角田「起きたか。」

のぞみ「ううっ・・・」

角田「そう怯えるな。お前には何もしねえよ。」

杉山「親分、これからどうするんですか？」

角田「間違っちゃったんだから仕方ねえ。こいつの携帯から電話し
て天宮唯を呼び出すしかねえだろ。」

のぞみ「(この二人が私を・・・もしかして私、唯さんと間違われ
て・・・?)」

角田「そうと決まれば、早速携帯で連絡を・・・」

そう言つて角田がのぞみのキュアモに手をのばしたその時、

????「その必要はない。」

角田「!?!」

突然背後から声が出た。

見るとそこには、リクガメを模した様な姿をした怪人が立っていた。
????「ここからは、このフリーズ星人セトルに任せてもらおうか。」

のぞみ「(ルーイン帝国!どうしてここに!?)」

角田「な、なんだお前は！」

杉山「や、ヤバいですよ親分！逃げましょう！」

角田「黙れ！ここまで来て逃げられるか！おいお前、邪魔するんじゃないええ！」

セトル「邪魔なのは・・・貴様らの方だ！」

そう言くとセトルは、角田めがけて腕から光弾を放った。

角田「ぐはあっ！」

光弾をくらった角田は大きく吹っ飛ばされ、壁に激突して意識を失った。

杉山「親分！？うわあああ！」

直後に杉山も同じように壁に吹っ飛ばされて意識を失った。

セトル「これで邪魔者は消えた。さて・・・」

のぞみ「っ・・・！！！」

セトルは傍に落ちていたのぞみのキュアモを拾うと、誰かに電話をかけた。

相手は勿論・・・

りん「あつ、のぞみから電話だ・・・」

りん達だった。

うらら「さつきは出なかったのに、どうしたんでしょうか？」

りん「もしもし、今どこに・・・えっ？」

くるみ「りん？」

りん「・・・そんなこと・・・あつ、待ちなさい・・・」

電話は切られてしまった。

うらら「のぞみさん、どうしたんですか？」

りん「・・・出たのはのぞみじゃなかったわ。」

こまち「え？」

りん「・・・帝国の連中が、のぞみをさらったって・・・」
その瞬間、一同に衝撃が走る。

りん「返してほしかったら魔石と交換だなんて・・・」

かれん「っ……………」

セトル「よし、これでは奴らが来るのを待つだけだな。しかし……」

セトルは気絶した二人を見つめる。

セトル「プリキュアをさらって人質にすることで魔石を要求する作戦だったが……まさかさらう手間が省けるとはな。貴様らには礼を言っぜ。」

のぞみ「っ……………」

セトル「さて、俺はこれから取引場所に行く。貴様も一緒に来い。のぞみ「んうっ！」

動けないのぞみを無理矢理立たせ、セトルはのぞみと共に倉庫を後にした。

一方りん達は唯に連絡を入れ、シロップに乗って取引場所へと向かっていた。

うらら「のぞみさん……無事ですすよね……………」

くるみ「ねえ、りん。」

りん「？」

くるみ「どうするつもり？私達、魔石なんか持ってないのよ。」

りん「……………どうすればいいと思う……………」

くるみ「考えてなかったの!？」

りん「ごめん……………」

くるみ「っ……………」

ココ「とにかく、急ぐココ。」

ナツ「そうナツ。唯とリイナも向かってるナツ。だからきつとなんとかなるナツ。」

かれん「……………」

こまち「かれん、どうしたの？顔色が悪いわよ？」

かれん「だって……私のせいでのぞみが……………」

こまち「えっ……?」

かれん「私があの時、代わりに行かせてなかったら……のぞみは……」

こまち「……かれん、それは違うわ。のぞみさんがさらわれたのは、貴方のせいなんかじゃない。絶対に。だから、自分を責めないで。」

かれん「こまち……」

そうしているうちに、一同は取引場所に到着した。

セトル「早かったな。」

シロップから降りた一同の前に、セトルが姿を見せた。

足元には、のぞみが縛られたままの状態で転がっている。

りん「のぞみ!」

のぞみ「(みんな!)」

くるみ「のぞみを解放しなさい!」

セトル「じゃあ、魔石を渡してもらおうか。」

くるみ「……それは……」

セトル「……どうした?まさか出せないわけじゃないよな?」

のぞみ「(持ってないのに渡せるわけじゃないじゃん!)」

りん「……」

セトル「だったら、交渉は決裂だな。」

一同「……!」

すると、セトルはのぞみの頭を思い切り踏ん付けた。

のぞみ「うっっ!」

うらら「のぞみさん!」

ココ「のぞみ!」

セトル「おっと、近づいたらどうなるかわかってるよな?」

そう言っつて、セトルはのぞみの首を掴んだ。

のぞみ「!」

りん「くっ……!」

こまち「のぞみさん……」

のぞみ「うっっ!」

セトル「恨むなら、貴様の仲間を恨むんだな。」

そして、徐々にのぞみの首を締め始めた。

のぞみ「うっっ！うっっ！」

のぞみは涙を流しながら抵抗するが、セトルは徐々に腕の力を強めていく。

のぞみ「うぐっ……！」

セトル「あばよ……」

かれん「待って！」

その時、突然かれんが前へ出た。

くるみ「かれん！？」

かれん「お願い！これ以上のぞみを傷つけないで！」

セトル「何？」

かれん「のぞみは間違えてさらわれただけなの！私が代役を頼んだせいで……人質なら私が代わるから、のぞみを放して！」

のぞみ「（かれんさん……）」

セトル「……」

かれんの突然の要求に、若干の戸惑いを見せるセトル。

するとその時、

セラフ「プリキュア！セラフィムブーメラン！」

上空からブーメランが飛んできたかと思うと、セトルのすぐ近くを

飛んでいった。

セトル「うおっ！？」

突然の出来事に怯んだセトルは、思わずのぞみから後退した。

セラフ「今よ！ユニバース！」

ユニバース「はい！」

そして次の瞬間、上空から勢いよく急降下してきたユニバースがのぞみを救出した。

セトル「しまった！」

セラフ「はああ！」

更に、セラフがキックを放ってセトルを吹っ飛ばした。

セトル「ぐああ！」

ココ「ユニバース！」

ナッツ「セラフ！」

ユニバースはのぞみを抱えたまま着地すると、コスモブレードで彼女の縄を切り、猿轡を外した。

ユニバース「大丈夫？」

のぞみ「はい、なんとか……」

かれん「のぞみ！」

自由になったのぞみに、かれんが抱きついてきた。

のぞみ「か、かれんさん……」

かれん「ごめんなさい、のぞみ……私のせいで……」

そこへセラフもやって来た。

セラフ「私が一緒だったばかりに……ごめんなさい。」

のぞみ「……もういいですよ、二人共。私、気にしてませんから。」

かれん「のぞみ……」

のぞみはかれんに対して優しく微笑んだ。

セトル「くそ！こうなったら力ずくだ！いけ、ゾーン共！」

セトルはゾーンを召喚し、一斉に襲い掛かった。

セラフ「ユニバース！」

ユニバース「はい！」

セラフとユニバースは、共にゾーン達に立ち向かっていく。

くるみ「みんな！私達も続くわよ！」

りん、うらら、こまち「「Yes!!」「」「」

くるみ達もプリキュアに変身しようと、キュアモを構えた。

かれん「待って。」

しかし、かれんによって制止される。

のぞみ「かれんさん？」

かれん「……みんな、お願い。あいつは私に倒させて。」

くるみ「な、何言ってるの！」

こまち「一人より、みんなで戦った方が……」

かれん「お願い！」

かれんは全員に頭を下げた。

うらら「かれんさん……」

のぞみ「……いいですよ。かれんさんがそこまで言うんですし。」

かれん「のぞみ……」

のぞみ「でも、一人で戦っちゃ駄目ですよ。」

そう言うとのぞみは一瞬でキュアドリームに変身し、クリスタルフルーレをかれんに差し出した。

りん「のぞみがそう言うなら……」

うらら「仕方ないですね。」

こまち「頼むわよ。」

りん、うらら、こまちも変身し、各自のフルーレをかれんに渡した。かれん「みんな……ありがとう。」

そして、両手に五本の剣を握り締めながら、かれんは走りだした。

かれん「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

走りながら変身すると同時に、物凄い勢いでゾーン達を切り付けていく。

アクア「はああっ！」

セラフ「アクアもなかなかやるじゃない。」

そこへジェネラルゾーンが襲い掛かってきた為、セラフはセラフィムセイバーで応戦する。

一方ユニバースは、大量のゾーン達に疲れかけてきていた。

ギン「大丈夫か？」

彼女の背中に合体していたギンが心配そうに話しかける。

ユニバース「いつもいつも数が多くて嫌になるわね……」

気が付くとユニバースは、周囲を大量のゾーンとジェネラルゾーン達に囲まれていた。

ユニバース「くっ……」

Gゾーン「かかれ！」

その一言で、全員がユニバースに襲い掛かる。

ユニバース「こうなったら一か八か・・・」

そう言うとユニバースは、コスモブレードに炎を纏わせた。

ユニバース「火星の大いなる力、受けてみなさい！プリキュア！マーズフレイム！」

すると次の瞬間、剣から物凄い量の炎が放たれ、ユニバースが剣を一振りすると同時に全てのゾーン達が炎に包み込まれ、倒された。

セラフ「今のは!?!」

ルージュ「な・・・何が起きたの・・・?」

その様子に、ジェネラルゾーンを撃破したセラフも、ルージュ達も驚いた。

レモネード「す・・・すごいです！ユニバース！」

ドリーム「今の技、どうやったの!?!」

セラフ「驚いたわ。まさかあんなことも出来るなんてね。」

しかし、最も驚いているのはユニバース自身だった。

ユニバース「何・・・今の技・・・」

ミント「ユニバース?」

ユニバース「・・・なんて力・・・」

気のせいか、ユニバースの表情が沈んで見える。

ギン「ユニバース・・・」

ドリーム「・・・そうだ！アクアは！」

見ると、アクアは劣勢に陥っていた。

セトルの怪力に思う様に反撃出来ず、トルネードフルーレ以外のフルーレは地面に刺さってしまっている。

セトル「諦める。貴様一人に何が出来るというのだ。」

アクア「諦めるわけじゃないでしょ！のぞみを傷つけた貴方を私は絶対許さない！それに、私は一人じゃない。みんなもついてるわ！」

そう言うとアクアは、剣を構えた。

セトル「何をしようと無駄だ。」

アクア「それはどうかしら?」

そう言うとアクアは弧を描くように剣を一回転させ、次の瞬間十字

を描くように剣を振り、十字状の光の刃を放った。

セトル「なっ・・・！」

それに対してセトルはなんとか耐えようとするが、力及ばず吹っ飛ばされてしまった。

セトル「ぐああ！」

倒れるセトルに向かって、再び五刀流となったアクアが走る。

アクア「とどめよ！」

アクアは高く跳躍しながら剣にエネルギーを込める。

アクア「キュアフルーレ！ファイブアタック！」

五本の剣が、勢いよくセトルを切り裂いた。

セトル「ぐああっ！ば・・・馬鹿なあああああ！！！」

セトルは、悲鳴をあげながら爆発した。

アクア「はあ・・・はあ・・・」

ドリーム「かれんさん！」

変身が解けて倒れるかれんを、ドリームが抱き起こす。

ドリーム「かれんさん・・・」

かれん「・・・のぞみ・・・」

ドリーム「・・・ありがとう、かれんさん。」

そう言つて、ドリームはかれんの額に自身の額をぶつけた。

ドリーム「いつかのお返しです。」

かれん「・・・やられちゃったわね・・・」

ドリーム「・・・あはは。」

かれん「ふふ。」

唯「・・・みんな、行きましょう。」

それを見ていた唯達は、静かにその場を立ち去る。

くるみ「のぞみ、いいなあ・・・」

りん「まあまあ、今回は大目に見てやりましょうよ。」

うらら「そうよ。ね、リイナさん・・・リイナさん？」

リイナ「ごめん、私ここで失礼するわね。」

そう言つて、リイナはギンと共に走り去っていった。

うららら」「……どうしたんでしょうね」「……」

こまち「何か、悩んでるように見えたけど……」
唯「……」

リイナ「……さっきのあの力……あれがユニバースの力だとした
ら……私はどうすれば……」

第10話「のぞみがさらわれた!？」（後書き）

シド先輩、技借りちゃいました・・・

響「関係ないけど、もうすぐ映画だね。」

アコは映画を見てから出すタイミングを決めようと思います。

第11話「リイナと七佳の私生活」(前書き)

私生活というよりは、溜まっていた設定を一気に公開と言った方が正しいかも。

第11話「リイナと七佳の私生活」

皆さん、こんにちは。皇リイナです。

ある方から要望があったので、今日は私から皆さんに私の普段の日常を紹介したいと思います。

皆さんもご存知の通り、私はキュアユニバースとして日々ルーイン帝国と戦っています。ちゃんと普通の一面もあるんですよ。

これまでに普段の私の様子を見せたことはほとんどなかったので正直少し不安もありますが、頑張って紹介しますね。

では……………

街の中央に位置している、私立草壁大学附属中学校。私はこの学校に通う中学三年生です。

今日も始まる、いつもの日常。

リイナ「行ってきました。」

智代「いつてらっしゃい。頑張るのですよ、リイナ。」

この人は皇智代。お医者さんをやっている私のお母さんです。

ちなみに、お父さんは冒険家で世界中を旅しているので全くと言っていい程家にいません。

でも、時々手紙と一緒に送られてくる写真で、現地の人達と一緒に元気な姿を見せてられています。

そんな二人に、私は育てられてきました。

リイナ「うん、お母さんも頑張ってたね。それじゃあ。」

智代「…貴方…リイナは今日も頑張ってますよ……………」

????「皇さん、おはよう。」

この子は私の友達の飛鳥 日和さん。

私と同じくらい、内気でおとなしい子です。

リイナ「おはよう、飛鳥さん。」

日和「・・・皇さん、一つ思うんだけど・・・」

リイナ「何？」

日和「・・・出会って三年くらい経つし、私達、そろそろ名前で呼び合ってもいいんじゃないかな・・・？」

リイナ「うん・・・」

日和「・・・駄目？」

リイナ「（今まで誰かを呼び捨てにしたことなんて全然ないから、ちよつと悩むなあ・・・でも、かれんは呼べたし・・・よし。）」

日和「・・・皇さん？」

リイナ「・・・うん。いいよ、日和・・・さん・・・」

日和「あ、ありがとう。リイナ・・・ちゃん・・・」

リイナ「・・・やっぱり、呼び捨てにするのは難しいね。」

日和「でも、名前では呼べたんだし、これからもよろしくね。」

リイナ「うん。」

日和「今日も早く帰るの？」

リイナ「お母さんがどうなるかはわからないけど、一応そのつもり。」

「
実は私のお母さんは仕事であまり家にいないので、私はほぼ毎日一人で暮らしているんです。」

日和「たまには私の家に来たら？リイナちゃんなら、喜んで歓迎するよ。」

リイナ「ありがとう。でも大丈夫だから、気持ちだけでもらうね。」

日和「そう・・・なら仕方ないね。」

リイナ「ううん、心配してくれてありがとう。それじゃあね。」

日和「うん、バイバイ。また明日。」

リイナ「ただいま、ギン。」

みんなには、ギンは私のペットということにしています。

私が早く帰るようにしてるのは、ギンを早く鳥かごから出して自由にしてあげる為でもあるんです。

リイナ「今日はどうだった？」

ギン「ああ、帰ってきていきなりですまないが、早速いくぞ。」

リイナ「ということとは、また？」

ギン「既に唯やかれん達が向かった。行けるか？」

リイナ「うん！」

こうして、今日も私はギンと一緒に戦いの地へ向かうのです。

みんな元気？神村七佳だよ。

この際だから、私の私生活も紹介するね。

とは言っても、そんなに話すことは無いけど。

みんなも知ってる通り、私は三年前に両親を殺されたわ。

だから、それからは翔太の実家に引き取られて暮らしてるの。

七佳「じゃあ行ってくる！」

翔太「ああ、頑張れよ。」

言っとくけど、私だってちゃんと学校には行ってるんだからね。

・・・まあ、学校生活に関しては何も話すことは無いんだけどね・・・

あの日以来、あまり他人と話さなくなっちゃったし、友達なんて・・・

・・・

気分を変えて、ここからは翔太の働いてる研究室を紹介するね。

翔太の家は、外見上はどこにでもある建物だけど、その地下には翔

太が叔父さん（翔太の父親）と独自に開発した研究所があるのよ。

今日はその一部を公開！

まず紹介するのがここ、翔太の研究室よ。

この場所で翔太はキュアウイングに関する研究、開発を進めてるわ。キュアウイングが誕生したのもこの場所よ。

次はここ、私が使ってるトレーニングルームよ。ここでいつも銃を撃つ練習をしてるの。

見てて。ウイングショットを五発連射し、全体的の中心近くに命中させる。

なかなかのものでしょ。

道場もあるのよ。

剣や格闘技の特訓はここで行うの。

因みにこの道場の隣には、プリキュア専用のトレーニングルームがあるわ。

次はそこを紹介するわね。

ここがそのトレーニングルーム。

体を鍛えた後は、ここでプリキュアとしての技を磨くのよ。

キュアウイングになったばかりの頃は、ここでよく必殺技の猛特訓を重ねてたわね。

勿論、今でもしょっちゅう使ってるわよ。

それから、過去に行われたプリキュアの戦いの様子も沢山記録されてるわ。ブラック&ホワイトVSピーサード戦、プリキュア5VSムカーディア戦の映像を流す。

他にもここでは、どんな場所でも戦えるように、水中や砂漠、異次元等あらゆるバトルステージの状況を作り出すことが出来るのよ。

さて、これで一通りの解説は終わったわね。

それじゃあ、私はそろそろ行かなきゃいけないから。

さっき翔太から、帝国の連中が現れたって連絡があったのよ。

じゃ、またね！

七佳「プリキュアインストーリー！」

第11話「リイナと七佳の私生活」(後書き)

急いで書いたとはいえ、我ながら中途半端な話だな・・・

なぎさ「私の話の更新まだー？」

もうちょっと待って。

次はそっち更新するから。

第12話「悩み」(前書き)

ようやく話が進展。

第12話「悩み」

今日も、ルーイン帝国と戦闘中のプリキュア達。
ユニバース、ウイング、セラフとプリキュア5のメンバーでゾーン達を圧倒していた。

ウイング「プリキュア！ウイングバスター！」

セラフ「プリキュア！セラフイムブレイカー！」

ウイングやセラフが必殺技で次々とゾーンを撃破する中、何人かのゾーン達がユニバースに襲い掛かる。

ギン「来るぞ！」

ユニバース「う・うん。」

迫るゾーン達に向けてユニバースはコスモブレードを構える。

ユニバース「金星の大いなる力、受けてみなさい！プリキュア！ヴィーナストリーム！」

剣の先端から勢いよく光線が放たれ、ゾーン達を一撃で葬った。

しかし、ゾーン達はまだ結構な数が残っている。

ローズ「いつものことながら、数が多くてイライラするわね。」

アクア「とにかく、早いこと終わらせましょう。ドリーム！」

ドリーム「オッケー！」

そう言うと、ドリームは自身のクリスタルフルーレをアクアに渡した。

トルネードフルーレとクリスタルフルーレの二刀流となったアクアは、素早い動きでゾーン達に向かって走り出す。

アクア「レモネード、奴らの動きを止めて！」

レモネード「わかりました！プリキュア！プリズムチェーン！」

レモネードはアクアの頭上から光の鎖を放ち、ゾーン達の動きを封じた。

アクア「キュアフルーレ！ツインスラッシャー！」

そしてアクアは、二本の剣で一気にゾーン達を切り裂き、撃破した。

ミント「さすがアクアね。私達も負けてられないわ！」
ルージュ「はい！いきますよ！」

ルージュとミントは、ジェネラルゾーンを前に構えた。

Gゾーン「面白い、かかってこい！」

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

まずミントが緑のエネルギー弾を放ち、行く手を阻むゾーン達を蹴散らしていく。

その際にルージュは高く跳躍し、ジェネラルゾーンの頭上へと迫った。

Gゾーン「何！？くっ！」

ジェネラルゾーンは咄嗟に頭上を見上げるが、逆光で思わず目を眩ましてしまった。

その隙をついて、ルージュは右足に炎を纏わせる。

ルージュ「プリキュア！ファイアーストライザー！」

次の瞬間、ルージュは炎を纏った回し蹴りをジェネラルゾーンにぶつけた。

Gゾーン「しまっ……がああああああっ！」

ルージュの技が直撃し、ジェネラルゾーンは爆発した。

ローズ「ドリーム、私達も決めるわよ！」

ドリーム「うん！」

ドリームとローズは手を繋大量ぐと、もう片方の手をゾーン達に向けてかざした。

ドリーム、ローズ「ツインローズ・シャインストリーム！」

二人の手からピンクと紫の光線が放たれ、あっという間にほとんどのゾーン達が倒されていった。

戦闘員とはいえ、善戦を続けるプリキュア5を見てセラフは満足そうに笑みを浮かべる。

しかし、ユニバースとウイングはそうではなく、むしろ彼女達の実力に驚愕してるように見えた。

ユニバース「……凄い……」

ウイング「これが・・・プリキュアのカ・・・」

シロップ「凄くて当然ロブ。ドリーム達は過去に二つの組織から世界を守ったほどだロブ。そう簡単にはやられないロブ。」

ユニバース「ねえ、ドリーム達の力・・・今使ったのよりも強いのがまだあるの？」

ナッツ「勿論ナツ。プリキュアはこれからもどんどん強くなるナツ。」

ユニバース「そう・・・なんだ・・・・・・・・・・」

ギン「・・・リイナ・・・・・・・・」

そうしている内に、残るはジェネラルゾーン一人となっていた。ドリーム「とどめよ！」

ルージュ、レモネード、ミント、アクア「「Yes!!!」」「五人はジェネラルゾーンに向けて、各自のフルーレを構える。プリキュア5「「プリキュア！ファイブスラッシュ!!!!」」「

五本のフルーレから光の刃が一斉にジェネラルゾーンに命中し、彼はゆっくりとその場に倒れ爆発した。ローズ「よし！」

プリキュア達は全員変身を解いて一ヶ所に集合した。りん「それにしても、帝国もしつこいわね。」

うらら「まったくです。私達が魔石を持ってないっていつも言っているに・・・・・・・・」

唯「とにかく、相手は人類の滅亡と全宇宙の支配を企む連中よ。魔石のことはともかく、奴らは私達が倒さなければいけない存在に変わりはないわ。」

のぞみ「そうですよね・・・私達プリキュアが頑張らないと！」

リイナ「・・・・・・・・」

かれん「リイナ？」

リイナ「えっ？」

かれん「どうしたの？随分顔色が悪いけど・・・」

リイナ「な、なんでもないよ・・・私、今日はもう失礼するね。ギ

ン、先に帰ってるから。」

そう言つて、リイナは早々にその場から去つていった。

かれん「リイナ……」

こまち「なんだかりイナさん、最近元気ないわね。」

うらら「この前のぞみさんが誘拐された時くらいからですよね？」

くるみ「なんか、悩んでるようにも見えただけど……」

七佳「……ギン、貴方なら何か知ってるんじゃないの？」

ギン「……」

唯「話してくれるかしら？お願い。」

ギン「……仕方ない。こんなに早く話すことになるとは思つてな

かったが、この機会に話しておこう。実は……」

リイナは自室のベッドに寝転がり、右手の中指にはめたシルバーリングを見つめた。

リイナ「……この力は、本当に私にとって必要なものなの……？」

かれん「リイナが、プリキュアの力を拒んでる？」

のぞみ「どうということ？」

ギン「……あいつは元々争いを好まない優しい性格だからな。プリキュアになつたばかりの頃は、まだそんなことを気にすることも戦つていた……。だが、あいつは戦つていくうちに次第にその力の強さに気付きはじめ、やがてある疑問を持つてしまった。『この力は本当に世界を守る為に必要なのか？』というな。」

うらら「リイナさんが、そんなことを……」

のぞみ「……でも、わかるかもしれない。」

かれん「そうね。今まで全然考えたことなかったけど、確かにプリキュアの力は凄まじいものだわ。」

こまち「実際に敵に狙われたこともあつたわね。」

りん「それで、リイナさんは？」

ギン「それ以来あいつは、少しずつだがプリキュアの力を拒むよう

になってしまった。私が説得してなんとか戦ってもらっているが、正直に言うとおいつはキュアユニバースの力を半分も発揮出来ない。

のぞみ「ええっ!?!」

ギン「本当だ。本人がわざとやっているのかもしれないが、ユニバースの真の力はあの程度ではない。この前の戦いでユニバースの必殺技が強力になっていたのは、恐らくおいつが力を抑えきれなくなってきたんだろう。」

唯「・・・まさかあの子がそんな複雑な悩みを持っていたなんてね・・・」

七佳「・・・」

次の日、七佳は学校から帰る途中で翔太に電話をかけていた。

翔太「・・・そうか・・・リイナちゃんがそんなことを・・・」

七佳「ええ。正直、プリキュアの力を拒むなんて私には信じられなかったわ。」

翔太「どういうことだ?」

七佳「・・・」

翔太「七佳?」

その時、遠くで大きな爆発音がした。

七佳「今のは!?!」

七佳は通話を切ると、急いで音のした方向へ走っていった。

ウイング「あれは・・・」

ネガトーン「ネーガトーン!」

キュアウイングに変身した七佳が到着したその場所では、メロディ、リズム、ビート、そして初めて見る少女が、ウイングにとってはこれまで初めて見る敵、マイナーランドの怪物ネガトーンが戦っていた。

メロディ「ミュージズ、とどめよ!」

ミューズ「オツケー！」

ミューズと呼ばれた黄色い戦士はモジューレにフェアリートーンを差し込み、必殺技を放つ。

ミューズ「プリキュア！スパークリング・シャワー！」

彼女の必殺技が炸裂し、ネガトーンは倒された。

ウイング「あの子、凄い・・・」

ファルセット「くっ、覚えてる！」

マイナーランドの幹部ファルセットは退散し、メロディ達も変身を解いた。

奏「やったわね。」

響「うん・あれ、七佳さん？」

ウイングはヘルメットを脱ぎ、響達のところまでやって来た。

ウイング「今の戦い、よかったわよ。さすがね。」

響「あ、ありがとうございます！あつ、紹介しますね。この子は調辺アコちゃん、私達の新しい仲間です。キュアミューズってプリキュアになれるんです。アコちゃん、この人は神村七佳さん。キュアウイングに変身する、私達の先輩だよ。」

アコ「はじめまして。調辺アコです。」

ウイング「神村七佳よ。よろしくね。」

握手をかわしながら、ウイングは密かにつぶやいた。

ウイング「小学生でプリキュア・・・か・・・」

エレン「七佳さん？」

ウイング「ううん、何でもない。」

アコ「ところで、一つ聞いていいですか？」

ウイング「何かしら？」

アコ「キュアウイングって言ってましたけど・・・もしかしてその姿がそうなんですか？」

ウイング「ええ・・・どうかしたの？」

アコ「いえ、プリキュアにしては随分変わった姿なので・・・」

「あんたが言うな」アコとウイング以外全員がそう思ったのは言う

までもない。

奏「それはそうよ。だってキュアウイングは七佳さんのお兄さんが開発した存在なんだもの。」

アコ「じゃあ、人工プリキュアってこと？」

ウイング「・・・まあ・・・そういうことね・・・」

気のせいかな、ウイングの声が少し沈んで聞こえた。

ウイング「・・・じゃあみんな、私はそろそろ失礼するわね。」

響「あ、はい！」

そして、ウイングは変身を解いて七佳の姿へと戻り、その場から去っていった。

響「ねえ・・・なんか今日の七佳さん、元気なかったよね？」

奏「え？そうだったかしら？」

エレン「私もよ。」

響「うーん・・・そうかなあ・・・」

その夜、七佳は自室のベランダで腕に付けたウイングブレスを見つめていた。

七佳「そうよ・・・所詮私は人工プリキュア・・・本当の力なんて・・・」

そして七佳は、先程のアコの言葉を思い出した。

『随分変わった姿なので・・・』

七佳「・・・私は、みんなとは違う・・・」

アコの何気ない一言で、リイナと七佳の運命が大きく動くことになるのだが、勿論そんなことを彼女達が知るはずはなかった。

第12話「悩み」(後書き)

祈里「なんだか、私達全然出番ないよね。」

大丈夫です。

次回は美希たんも出るし、その後ラブ達も出しますから。

美希「やった！あたし、完璧！」

・・・だといけど。

第13話「ザンゴ現る」

ある日、シヨウキは城の中を走り回っていた。

シヨウキ「どこへ行きやがった・・・」

大広間にいくと、グレムが暇そうな顔をして振り向いた。

グレム「どうしたの？さっきからあちこち走り回って。」

シヨウキ「どうしたも何も、ザンゴを見なかったか？」

グレム「ザンゴ？そういえばどこにもいないわね・・・さっきイワオちゃんと話してたみたいだけど・・・」

シヨウキ「あいつ・・・一体どこへ・・・まさか地球か!？」

グレム「だとしたら珍しいわね。ザンゴが自ら動くなんで、きっと何かあるわよ・・・」

シヨウキ「・・・」

その頃地球では・・・

ザンゴ「久しぶりの地球はいいですね・・・癒されます・・・」

ザンゴは建物の屋上で、地球の空気を堪能していた。

ザンゴ「ふう・・・さて、働くとしますか。」

ふとザンゴが下を見下ろすと、そこには舞、かれん、美希の3人が楽しそうに歩いていた。

ザンゴ「プリキュア・・・見つけましたよ・・・」

そう言ってザンゴは、建物から飛び降りた。

舞、かれん、美希は仲良く街中を歩いていた。

かれん「全く・・・のぞもりんも、本当に世話が焼けるんだから・・・」

美希「私も、ラブとぶつきーがお気楽過ぎて参っちゃいますよ。せつなは平気みたいですけど・・・」

舞「お二人共、苦労されてるんですね・・・」

美希「舞だつてそうじゃない。いつも咲に振り回されて・・・」

舞「私はもう、それでいいと思つてますから・・・」

かれん「・・・そうね・・・なんだかんだ言つて、みんなとは長い付き合いになるわけだし・・・」

美希「お互い、これから頑張つていかないといけませんね。」

かれん「そうね。ふふ・・・」

その時、舞に抱かれていたチョツピが何かに反応するかの様に叫んだ。

チョツピ「3人共、邪悪な気配を感じるチョピ！気を付けるチョピ！」

舞「え！？」

美希「なんですつて！？」

すると、突然3人の目の前に数人のゾーンが出現した。

かれん「やつぱり帝国だつたのね！」

美希「舞は下がつてて！ここは私とかれんさんが！」

舞「わかりました！」

咲がないので変身出来ない舞は素早く建物の陰に隠れ、かれんと美希は変身アイテムを構える。

かれん「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

美希「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！」

そして2人はプリキュアに変身する。

アクア「知性の青き泉！キュアアクア！」

ベリー「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ！キュアベリー！」

ユアベリー！」

アクア「いくわよ！」

ベリー「はい！」

2人は専用武器を取り出してゾーン達に向かっていく。

アクア「トルネードフルーレ！」

ベリー「ベリーソード！」

2人は武器で次々とゾーン達を切り付けては倒していった。
アクア「はああ！」

ゾーン「ぎゃああ！」

そして、アクアの放った一撃が最後の1人を撃破した。

アクア「・・・？もう終わりなの？」

ベリー「なんか・・・意外にあっけなかったですね・・・」

「いやあ、見事な戦いぶりでしたよ。」

アクア、ベリー「誰！？」

2人が声のした方を振り向くと、そこにはザンゴが笑みを浮かべながら立っていた。

ザンゴ「はじめまして。僕はルーイン帝国の幹部でザンゴと言います。以後お見知りおきを。」

ベリー「次から次へとしつこい奴らね！」

アクア「何度来たって同じよ！私達は魔石なんて持ってないんだから！」

ザンゴ「おや？勘違いしてるみたいですね。今日僕が来たのは、魔石目当てじゃないんですよ。」

アクア「え・・・？」

ザンゴ「ふふ。」

するとその時、アクアとベリーの背後に突然ジェネラルゾーンが現れ、2人を羽交い締めにした。

アクア「なっ・・・！」

ベリー「ちよっ・・・何なのよ！」

ザンゴ「僕が来た目的・・・それは、貴方達です。」

ベリー「ええ！？」

ザンゴ「そういうことですので、お二人には一緒に来てもらいますね。」

アクア「くっ・・・させるもんですか！」

アクアとベリーはジェネラルゾーンを振り払うと、剣で勢いよく切り付けて撃破した。

ベリー「次は貴方よ！」

ベリーはザンゴの方を向くと、ベリーソードを構えて必殺技を放った。

ベリー「プリキュア！エスポワールシャワー・・・フレッツシュ！」
そして、ベリーの必殺技がザンゴめがけて勢いよく放たれる。

ザンゴ「・・・」

しかしザンゴは全く動くことなく、そのまま正面から技をくらった。
ベリー「やったかしら!？」

アクア「・・・！ベリー、あれ！」

するとそこには、傷だらけのザンゴが笑みを浮かべながら立っていた。

ベリー「そんな!？直撃したはずなのに！」

驚きを隠せない2人に対して、ザンゴはあくまで笑顔で話し掛ける。

ザンゴ「これは驚きましたね。もう少し温厚な方々だと思ったのですが・・・」

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

彼が話すのを終える前にアクアが水の矢を放った。

矢は真つ直ぐザンゴに向かって飛んでいき彼に直撃するも、やはり彼は涼しい表情をしながらその場に立っていた。

ザンゴ「残念ですが、貴方方の攻撃で僕は倒せませんよ。」

アクア「くっ・・・!!」

ザンゴ「・・・さて、お話はこのくらいにしましょうか・・・」

そう言うと、ザンゴはすつと両手を構えた。

ベリー「・・・？」

アクア「一体何を・・・・・・うっ!？」

ベリー「アクア!？・・・うあっ!!」

その時、2人は突然頭を押さえながら苦しみだした。

アクア「うっっ・・・」

ベリー「くっ・・・うっ・・・」

2人はどうにかして技から逃れようとするが、とてもそんな余裕は

なかった。

そうしている内に、2人の意識が徐々に薄れていく。

ベリー「くっ……かれんさん……」

アクア「だ……駄目……うう……」

そして、遂に2人は意識を失い、その場に倒れてしまった。

ザンゴは両手を降ろすと2の元へと近づき、動かない2人を笑顔で見下ろした。

ザンゴ「ふふ……まずは2人……といったところですかね。」

するとザンゴは二人を抱えあげ、隠れている舞の方を向いた。

舞「……!」

見つかったことに焦り怯える舞だったが、ザンゴは笑顔で舞に言った。

ザンゴ「ご安心ください。貴方には何も致しませんから。」

そう言ってその場を立ち去ろうとするザンゴを、舞は慌てて呼び止めた。

舞「ま、待ちなさい!」

ザンゴ「どうかしましたか?」

舞「どうして私を狙わないの……?」

ザンゴ「ああ、プリキュアに変身出来ない状態で攫っても意味が無いからですよ。」

舞「……どういうことなの?それに、二人をどうするつもり?」

ザンゴ「残念ですが、今はこれ以上言えません。いずれ貴方も、他のプリキュアの方々も知ることになりますよ。心配しなくとも、二人はすぐにお返しします。では。」

舞「あ、まだ話は終わって……」

しかし、舞の言葉に耳を貸さずにザンゴはアクアとベリーを連れて姿を消してしまった。

舞「……かれんさん……美希さん……」

チヨッピ「とにかく、早くみんなにチヨッピ!」

舞「そうね、急ぎましよう!」

舞は、急いでナッツハウスへと向かった。

その頃、リイナはいつものように丘に寝そべって考え事をしていた。
リイナ「……………」

それを見ていたギンは、リイナがシルバーリングを気にしていること
とに気付く。

ギン「…………リイナ…………やっぱりお前……………」

リイナ「うん？何か言った？」

ギン「…………いや……………」

リイナ「そう…………ならいいけど……………」

そう言つて、リイナは再び寝そべろうとする。

するとそこへ、誰かがやって来た。

????「リイナ。」

リイナ「え？」

リイナとギンが振り向くと、そこには七佳が立っていた。

第13話「ザンゴ現る」(後書き)

次回、リイナと七佳が……

第14話「すれ違う想い・・・」(前書き)

東映はシド先輩切り(仮)に正式な名前を付けないんでしょうかね。

第14話「すれ違う想い・・・」

ナッツハウスに駆け付けた舞は、ついさっきの出来事を急いでのぞみやラブ達に伝えた。

ラブ「そんな！？美希たんとかれんさんが・・・」

のぞみ「攫われた・・・？」

こまち「しかも、新しい敵？」

舞「はい・・・そう新しい敵は凄く強くて、二人の技もまるで通用しなかつたんです。」

うらら「あの二人が負けるなんて・・・」

くるみ「幹部というだけのことはあるわね。」

舞「ごめんなさい・・・私はすぐそばにいたのに、何も出来ませんでした・・・」

咲「ううん、舞のせいじゃないよ。」

祈里「そうよ。こうして私達にそのことを知らせてくれたじゃない。」

「

舞「二人共・・・」

りん「それで、これからどうするの？」

ラブ「そんなの決まってるよね！」

のぞみ「うん！みんなでかれんさんと美希ちゃんを助けにいくよ！」

せつな「でも・・・助けるって、一体どこに？」

のぞみ、ラブ「あ・・・」

肝心なことを忘れていた。

二人がどこに連れ去られたかの手がかりが全く無いのだ。

うらら「そんな・・・これじゃ二人を助けに行けないじゃないですか・・・」

くるみ「っ！」

くるみは、悔しさのあまり壁を殴り付けた。

のぞみ「かれんさん・・・美希ちゃん・・・」

のぞみは外に出ると、不安そうな表情で空を見上げた。

その頃、当のアクアとベリーはというと・・・

ベリー「・・・・・・・・・・」

アクア「・・・・・・・・・・」

薄暗い牢に閉じ込められた二人は、何もせずじっと黙っていた。

体と手足を鎖で縛られ、背中合わせに鎖で拘束されている為動くことも出来ない。

はじめは拘束を解こうと協力して試みたが、それも不可能とわかった今は無駄なことはせず、ただ仲間の助けを信じて待っていた。

アクア「・・・・・・・・どれくらい時間が経ったのかしら・・・」

ベリー「さあ・・・・・・・・私達、これからどうなるんでしょうね・・・」

「

二人が途方に暮れていたその時、牢の外から足音が響いた。

それも、一人でなく何人かの人だ。

ベリー「だ・・・誰・・・？」

不自由な体のまま警戒する二人。

そして、そこに現れたのは・・・・・・・・

ザンゴ「お目覚めのようですね。」

いつものように不気味な笑みを浮かべたザンゴと、睨み付ける様な目つきをしたシヨウキとグレムが二人を見下ろしていた。

アクア「貴方達は誰？ここはどこなの？」

アクアの質問にシヨウキが答えた。

シヨウキ「我々は、ルーイン帝国前皇帝直属の幹部だ。俺の名はダ

イラ星人シヨウキ。」

グレム「同じく、ヨーク星人グレム。」

ザンゴ「僕の自己紹介は必要ありませんね。」

シヨウキ「さて・・・ようこそ、ルーイン帝国へ。」

アクア、ベリー「！？」

シヨウキの言葉に二人は一瞬耳を疑った。

アクア「ルーイン・・・帝国・・・？」

ベリー「ここが・・・？」

シヨウキ「そうだ。」

ベリー「・・・おかしいわよ！前にラブから聞いた話では、ルーイン帝国は宇宙の果てに存在するそうじゃない！だけど私達はこうして普通に呼吸出来るし、気温とかも全然気にならない！これってどういうこと！？」

???「私がお答えしましょう。」

ベリー「!？」

そこへ現れたのはイワオだった。

イワオ「アビューズ星人のイワオと申します。私もこの方達と同じく帝国の幹部です。」

ベリー「で？私の質問への答えは？」

イワオ「はい、それはこの星が限りなく地球と同じ環境を整えているからです。」

アクア「どうということ？」

イワオ「ふふ・・・」

するとイワオは、手に持っていたノートパソコンの画面を二人に見せた。

そこには、何やら巨大な機械が映し出されていた。

イワオ「この装置は、特殊な幻覚ガスを発生させる装置です。」

ベリー「幻覚ガス？」

イワオ「はい、この装置で作られる幻覚ガスは、地球のものと非常によく似た性質の大気を放つことで本来なら存在しない偽物の自然環境を作っているのです。この装置のおかげで、ここ惑星ベムズンの重力や空気中の酸素濃度等も全て地球とほぼ同じに合わせてあります。」

シヨウキ「貴様、俺達に黙ってザンゴにプリキュアを攫わせたとかと思えば、そんなことまでしていたのか。」

イワオ「申し訳ありません。私の計画の為には、どうしてもここでプリキュアに死んでもらっては困りますので・・・」

ザンゴ「それにしても、このような進んだ技術をお持ちになっておられるとは知りませんでしたね。」

イワオ「かつて手を組んでいた、ある宇宙人と協力して生み出したものなんですよ。その宇宙人はその後、生物兵器を備えた移動する遊星を作った直後に滅亡してしまいましたかね。」

アクア「じゃあ、そろそろ教えてもらえるかしら？私達を攫った理由を。」

イワオ「ああ、そうでしたね。ザンゴ君。」

ザンゴ「はい。」

するとザンゴは牢の鍵を開けて中に入り、二人に接近する。

ザンゴ「少し失礼しますね。」

ベリー「ちよっ・・・何!？」

そしてザンゴは、二人を連れて牢を出たかと思うと、突然二人を縛っていた鎖を破壊した。

アクア「えっ?」

ベリー「どういいうつもり!？」

ザンゴ「こうするんですよ。」

すると次の瞬間、ザンゴがパチンと指を鳴らしたと同時に二人の姿がその場から消えた。

ベリー「・・・ここは?」

気が付くと二人は、またしても見知らぬ場所にいた。

二人は今、古代のコロッセウムを連想させる闘技場の様な場所に立っている。

アクア「城が見えるから、どうやらまだ帝国にいるみたいね・・・」

ザンゴ「その通りです。」

二人の背後からザンゴが姿を現した。

ザンゴ「僕としては早く貴方達を地球に帰してあげたいので、手短

に済ませていただきますね。」

すると、ザンゴの背後から大勢のゾーンとジェネラルゾーンが現れ、一斉に二人に襲い掛かってきた。

ザンゴ「さあ、時間をかけることなく全員を倒せたなら、地球へ帰して差し上げます。」

アクア「・・・いいわ、やってやろうじゃないの。」

ベリー「だったら、これ使ってください。」

そう言うてベリーは、自身のベリーソードをアクアに渡した。

アクア「ありがとう、助かるわ。」

そこへ、ゾーン達が迫る。

アクア「いくわよ!」

ベリー「はい!」

二人は素早く駆け出し、ゾーン達を撃破し始めた。

ベリー「はあっ!」

武器をアクアに渡しているにも関わらず、ベリーは次々とゾーン達をキックで攻撃していく。

ゾーン「ふん!」

ベリー「なんの!」

ゾーンの一人が切り掛かるが、ベリーは素早く真剣白刃取りで受けとめる。

ベリー「はっ!」

そして、ゾーンを倒れさせると同時に彼らに向けて光線を放った。

ベリー「プリキュア! エスポワールシャワー!」

ベリーの放った光線で、ゾーン達は一気に消滅した。

アクア「はああっ!」

その一方でアクアも、トルネードフルーレとベリーソードの二刀流で順調にゾーン達を撃破していく。

アクア「さて・・・たまにはこんな倒し方もいいかしら。」

するとアクアは、突然立ち止まって目を閉じた。

Gゾーン「今だ! やれ!」

チャンスとばかりにゾーン達は一斉にアクアに切り掛かる。

しかし次の瞬間、アクアは突然目を開けたかと思うと、切り掛かるゾーン達を次々と返り討ちにしていく。

Gゾーン「何!?!」

そして、アクアも全てのゾーンを撃破した。

アクア「ベリー!最後は一気に決めるわよ!」

ベリー「はい!」

ベリーはアクアからベリーソードを受け取ると、必殺技の構えに入った。

同時にアクアも、剣で弧を描く。

ベリー「悪いの悪いのとんでいけ!プリキュア!エスポワールシャワー! フレーツシュ!」

まず、ベリーの必殺技がジェネラルゾーンに命中する。

Gゾーン「ぐおっ!」

ベリー「アクア!」

アクア「ええ!プリキュア!ブルークロス・スラツシュ!」

アクアは十字型の光の刃をジェネラルゾーンめがけて放った。

Gゾーン「ぐああああ!」

ジェネラルゾーンは攻撃に耐えきれず、消滅した。

ベリー「ふう……さあ、約束通り帰してもらうわよ……って、あれ?」

アクア「……いない?」

見ると、ザンゴの姿はどこにも無かった。

ベリー「あいつ、一体どこに……うっ……」

アクア「あっ……」

背後に潜んでいたザンゴに首筋を殴られ、二人は気を失ってしまった。

ザンゴ「ふふ……イワオさん、そろそろこの二人を帰してもよろしいでしょうか?」

ザンゴは通信機のような物でイワオに話しかけた。

イワオ「ええ、よくやってくれました。その二人のデータはもう十分です。」

ザンゴ「ありがとうございます。」

イワオ「この調子で残りのプリキュア達も頼みますよ。」

ザンゴ「了解しました。」

そう言っつて、ザンゴは二人を連れて地球へ向かった。

イワオ「後少し・・・後少しで私の野望は達成する・・・」

そう言っつと、イワオは手元に置いてあつた何かの企画書に手を伸ばした。

その企画書のタイトルは、『Project Cure Cybo

og

その頃、丘の上でリイナと七佳は互に見つめ合っていた。

七佳「・・・ギン、悪いけど少しの間二人きりにさせてくれない？リイナと二人で話がしたいの。」

ギン「・・・わかった。」

そう言っつて、ギンはどこかへ飛び去っていった。

七佳「・・・さて・・・リイナ。」

リイナ「は・・・はい。」

いつにも増して真剣な表情の七佳に、リイナは若干戸惑っていた。

七佳「ギンから聞いたわよ。貴方、プリキュアの力に悩んでるんですってね。」

リイナ「・・・はい。」

七佳「詳しく話してくれない？」

リイナ「・・・初めてプリキュアに変身した頃は、そんなことは全く思っつていませんでした。その頃は、ただ普通に世界を守るっつていう目的を胸に戦っつてましたから。でも・・・」

七佳「・・・でも？」

リイナ「・・・戦っつていくうちに、気付いてきたんです。プリキュ

アの力の凄まじさに。最初はあまり何とも思いませんでしたが、戦えば戦うほどこの力がとても強力で、とても恐ろしいものに思えてきて……」

リイナは少し間を開けて七佳に尋ねた。

リイナ「……七佳さん、この力は……本当に、世界を守る為に必要なんでしょうか……」

七佳「……当然でしょ。」

七佳は、重い口調で答えた。

七佳「貴方は世界を守るプリキュアなんですよ。その力は紛れもなく必要なものに決まってるじゃない。何も悩むことないわ。」

リイナ「だけど……この前の戦いでも、ユニバースの力が私の知らないくらい強力なものになってしまってた……このままじやきつと、私の力がいつか七佳さんやみんなを傷つけてしまうんじゃないかって、心配で……」

七佳「……そう……じゃあ……」

すると七佳は、リイナに右手を差し出した。

七佳「シルバ^{そいつ}リングを私にちょうだい。」

リイナ「……え……?」

七佳「私がキュアユニバースになって戦うから。」

リイナ「何を言ってる……」

しかし、七佳はあくまで真剣な表情をしている。

リイナ「……でも、七佳さんはキュアウイングじゃ……」

七佳「私は貴方達とは違うわ。確かに、貴方達からして見れば同じプリキュアかもしれない。けど、結局キュアウイングは私が作った人工的な存在に過ぎない。私が求めるのは、真のプリキュアの力。だから、貴方がプリキュアの力を拒むのなら、いつそのことその力を私に……」

リイナ「……それでも……やっぱり渡せません!確かに、この力に対して疑問に思うことはありますが……これは、私が授かった力!例え七佳さんの頼みでも、渡すわけにはいきません!」

七佳「・・・・・・・・」

リイナ「・・・・・・・・？」

七佳「・・・・わかったわ。」

リイナ「・・・・・・・・」

その言葉に、リイナは一瞬安心した。

しかし・・・

七佳「だったら・・・・・・・・その力を使いこなしてみなさい。」

リイナ「えっ？」

リイナがその言葉を理解するのを待たず、七佳はウイングブレスに番号を入力し、そして・・・

ウイング「はあああああっ！！」

変身が完了すると同時に、リイナに襲い掛かった。

第14話「すれ違う想い・・・」(後書き)

次回、ユニバースVSウイング

第15話「ユニバースVSウイング」(前書き)

プリキュア同士を戦わせることにほとんど抵抗を感じてない自分が
ちよっと怖い・・・

第15話「ユニバーズVSウイング」

コージ「みんな！」

かれんと美希を助ける方法が見つからず、困っているのぞみ達の上にコージと夏が駆け付けた。

のぞみ「ココにナッツ、どうしたの？」

夏「二人を見つけたんだ！」

うらら「えっ!？」

ラブ「本当!？」

夏「本当だ！」

コージ「こっちに来てくれ！」

二人の案内で、のぞみ達はナッツハウスの近くにある森の中に来て来た。

そして、しばらく進んだ先に倒れているかれんと美希を発見した。

のぞみ「かれんさん！」

ラブ「美希たん！」

すぐにのぞみとラブが二人の元へ駆け寄る。

ラブ「美希たん!美希たん！」

のぞみ「かれんさん！」

すると、かれんがゆっくりと目を覚まし、それに続いて美希も目を覚ました。

かれん「・・・のぞみ・・・」

のぞみ「かれんさん・・・」

美希「ラブ・・・それにみんなも・・・」

ラブ「二人共、大丈夫？」

うらら「一体、何があつたんですか？」

かれん「・・・!そういえば、私達確か・・・」

かれんと美希は、ついさつき遭遇した出来事を全て話した。

そして、その頃・・・

ウイング「はあああああっ!!」

キュアウイングに変身した七佳は、いきなりリイナに襲い掛かっていた。

リイナ「・・・!!」

彼女の突然の行動が全く理解出来ないリイナは、一瞬反応が遅れてしまった。

次の瞬間、轟音と共に土煙が上がり、ウイングはその場に立ち止まる。

しかし、そこにリイナの姿は影も形も無かった。

ウイング「・・・」

ふと上を見上げると、キュアユニバースに変身したリイナが翼を羽ばたかせながらウイングを見下ろしている。

二人を心配して遠くから見ていたギンが、素早く駆け付けてリイナを変身させたのだ。

ウイング「そこなきゃね。」

「2・2・4」

ウイングも光の翼を出し、飛び上がった。

ギン「リイナ、これはどういうことだ？」

ユニバース「わからない・・・でも、確実に言えるのは・・・」

ウイング「いくわよ!はあああああっ!!」

その瞬間、ウイングソードを持ったウイングがいきなり切り掛かってきた。

ユニバースもすかさずコスモブレードを取り出して受け止める。

ユニバース「ウイングは・・・七佳さんは、本気で私に戦いを挑んでる・・・!!」

ウイング「そうよ!さあ、プリキュアの力を見せてみなさい!」

そう言ってウイングはユニバースから離れ、ウイングショットを取り出すやいなやユニバースに向けて発砲した。

ユニバース「・・・!!」

素早くかわすユニバースだったが、そこへ再びウイングが切り掛かる。

ユニバース「うっ……！」

ウイングは空中を素早く飛翔しながら連続でユニバースを切り付けていく。

それに対して、満足に反撃出来ないユニバースは剣で攻撃を防ぐのが精一杯だった。

ウイング「どうしたの？さっきから守ってばかりじゃない！もっと攻めてきなさいよ！」

ユニバース「っ……！」

するとユニバースは、いきなり地上に向かって急降下し出した。

ウイング「何！？」

着地すると、ユニバースはギンに話し掛けた。

ユニバース「ギン、すぐに唯さんや翔太さんと呼んできて。私じゃ

あの人を止められないわ。」

ギン「だが、一人で大丈夫か？」

ユニバース「うん……なんとか持ちこたえてみせるから。」

ギン「わかった。なるべく早く！」

そう言っただけでギンは飛び去っていき、それと同時にウイングも地上に降り立つ。

ウイング「場所を変えて地上戦ってわけ？望むところよ。」

ユニバース「……」

ウイング「今度こそ本気で戦ってみなさい！」

そしてウイングは再びユニバースに襲い掛かった。

その様子を、遠くから見つめる人物がいた。

ファウストK「……やはりあの二人の激突は避けられなかったか……」

そう言っただけで彼が別の方向を見ると、ギンが唯と翔太と共に急いでいるのが見えた。

ファウストK「でも、まだ俺が行くには早すぎるし・・・やっぱりみんなを信じるしかないか・・・」

それだけ言うと、彼はどこかへと去っていった。

ファウストK「・・・管理者つてのも、なかなか大変だな・・・」

ウイング「はああ!」

ユニバース「っ!」

ユニバースは、ウイングの一方的な攻撃に徐々に追い込まれていた。ウイング「ちよつと、まさかそれで全力じゃないでしょうね!」

ユニバース「だって・・・!」

ウイングのパンチを受け止めながら、ユニバースは何度も呼び掛ける。

ユニバース「ウイング、もうやめて!こんな戦いが一体何になるっというの!」

しかし、ウイングは全く耳を傾けることなく攻撃を続ける。

ウイング「さつきから貴方は逃げてばかりじゃない!本当にプリキユアなら、もっとその力を見せてみなさいよ!」

ユニバース「くっ・・・どうすれば・・・」

ウイング「ふん!」

次の瞬間、ウイングのパンチがユニバースの露出した腹部に勢いよく炸裂した。

ユニバース「あああっ!」

痛みで膝をつくユニバース。

しかしウイングは、攻撃を止めることなく彼女に襲い掛かる。

ユニバースは立ち上がって応戦するも、やはり攻撃を防ぐことしか出来ない。

ウイング「どうしたの?プリキュアの力ってこんなに弱かったの!」

ユニバース「っ・・・はああ!」

するとその時、ユニバースはとっさにキックを繰り出し、初めてウ

イングを攻撃した。

ウイング「・・・！」

素早くかわすウイングだったが、ユニバースは続けてもう一度キックを放つ。

今度はかわしきれず、攻撃を受けたウイングは僅かに後退した。

ウイング「っ・・・！」

ユニバース「はあ・・・はあ・・・」

するとウイングは、いきなり笑みを浮かべた。

ウイング「・・・そうよ・・・そう来なきやね！」

そう言うとウイングソードを取り出し、次の瞬間ウイングソードに電撃を纏わせた。

ユニバース「・・・！」

ウイング「もつと本気を出してみなさい！」

そう言うと、ウイングは電撃を纏った剣でユニバースに切り掛かる。ユニバースもさすがにこれには対抗出来ず、再び防戦一方となってしまう。

ウイング「はああ！はあっ！」

ユニバース「っ・・・！」

すかさず剣を持つウイングの右腕を押さえるが、ウイングはいとも簡単に振りほどき、再び切り掛かる。

ユニバースもコスモブレードで受け止めるが、その瞬間ウイングはユニバースの脇腹にキックを放ち、彼女を後退させた。

ユニバース「うぐっ・・・うう・・・」

ウイング「はああ！」

そこへ、ウイングがユニバースめがけて剣を突き刺そうとしてきた。ユニバースはすぐにかわし、力強くキックを放ってウイングを後退させた。

ウイング「っ・・・！！うおおお！」

ユニバース「プリキュア！マーズフレーム！」

再び切り掛かるうとするウイングに対し、ユニバースは炎を纏った

光の刃をウイングソードめがけて放った。

ウイング「ああっ！」

衝撃に耐えきれず、ウイングは剣を落としてしまった。

ウイング「くっ……はぁ……はぁ……はぁ……」

ユニバース「はぁ……はぁ……」

互いの体力が徐々に限界に迫っていく。

ウイングはウイングソードを拾うと同時に、すかさず取り出したウイングショットを合体させ、プレスに番号を入力した。

「8・8・9」

それと同時にユニバースもコスモブレードの先端に光を集中させ、次の瞬間ウイングに先端を向けた。

ユニバース「プリキュア！ヴィーナズストリーム！」

ウイング「プリキュア！ウイングバスター！」

二人の同時に放った光線が勢いよく激突し、しばらくぶつかり合った後相討ちに終わった。

ウイング「うっ！」

ユニバース「きゃっ！」

二人は一瞬怯むも、すぐに体勢を整える。

しかし、二人の体力は既に限界を越えようとしていた。

ユニバース「はぁ……はぁ……」

ウイング「はぁ……はぁ……はぁ……はぁあああっ！」

ユニバース「……！」

それでも攻撃をやめる気配を全く見せないウイングは、ユニバースめがけてキックを放ってきた。

ユニバース「うう……」

しかしユニバースには、もう攻撃をかわせるほどの体力がほとんど残っていなかった。

そして、ウイングがすぐ目の前まで迫ったその時、

セラフ「プリキュア！セラフィムハンマー！」

突然横から鉄球が現れ、ウイングの攻撃を妨害した。

ウイング「うああっ！」

ウイングはそのまま吹っ飛ばされ、地面に倒れた。

ユニバースがふと横を見ると、セラフがギンと翔太と共に立っていた。

セラフ「ふう・・・間に合ってよかったわ。」

そう言つて、セラフとギンはユニバースの元へ、翔太はウイングの元へ駆け付ける。

セラフ「大丈夫？」

ユニバース「唯さん・・・くっ・・・」

変身が解け、リイナの姿に戻る。

その一方で、ウイングはというと・・・

翔太「どういふつもりだ、七佳！リイナちゃんを攻撃するなんて！」

翔太は、変身を解いた七佳の胸ぐらを掴んだまま激怒していた。

七佳「別に・・・ちよつとプリキュアの力の凄まじさを見せてもらおうとしただけよ。」

翔太「なんだと!？」

リイナ「ちよつと・・・二人共、やめてください!」

リイナは二人の間に割り込み、制止させた。

七佳「・・・ふん。」

七佳は不満そうな表情で歩きだし、途中でリイナに振り向いて言った。

七佳「リイナ、いきなり攻撃したことは謝るわ。ごめんなさい。だけど、これだけは言わせて。貴方の考えは絶対間違ってる。その力は間違いなく世界を守る為に必要なものよ。貴方もプリキュアなら、その力を恐れずに使いこなしてみなさい。」

そう言つて七佳は再び歩きだした。

翔太「おい、待てよ！」

翔太も急いで後を追いつけていった。

残されたギン、唯、そしてリイナは・・・

リイナ「・・・どうして・・・こんなことに・・・」

ギン「……………」

唯「……………」

リイナ「どうして…………どうしてなのよっ！……！」

リイナは、精一杯の声で叫んだ。

第15話「ユニバースVSウイング」(後書き)

かれん「ねえ、仮面ライダーアキラって、何？」
のぞみ「さあ……」

第16話「七佳の信念」(前書き)

この前の「スイートプリキュア」を七佳が見たら怒るかも。

第16話「七佳の信念」

七佳「その力は間違いなく世界を守る為に必要なものよ。貴方もプリキュアなら、その力を恐れずに使いこなしてみなさい。」

リイナ「……そんなこと言っただって……」
あの戦いから一日が経ったが、リイナはまだ七佳の言葉に迷っていた。

七佳はああ言ってるが、正直自分はやはりプリキュアの力が怖い。これまでのことを考えても、この力を今すぐ受け入れるのは無理そうだ。

ちなみに今回の件は、自分と七佳、それにギン、唯、翔太だけの秘密にしてある。

プリキュア同士で戦っただなんて、とても仲間に言えることではないし、それで仲間に余計な心配をかけたくない。

「これは自分と七佳、二人だけの問題だ」と自分に言い聞かせ、リイナは考えるのをやめた。

このまま何もしないでいようかとも思ったが、そこへギンが駆け付けてきた。

ギン「ゾーン達が現れた！既にキュアブロッサム達も向かっている。お前も急げ！」

リイナ「……うん……」
何故かやる気のない声で答えるリイナ。

ギン「どうした？」
リイナ「……うん、何でもない。行こう。」
リイナは立ち上がり、ギンと共に街へ向かった。

ブロッサム「ブロッサム・シャワー！」

マリン「マリン・シユート！」

その頃、街ではブロッサム達がゾーン達と戦闘を繰り広げていた。サンシャイン「プリキュア！ゴールドフォルテ・バースト！」

ムーンライト「プリキュア！シルバーフォルテウェイブ！」

ゾーン「うわあああつ！！！！」

Gゾーン「くっ・・・おのれ！」

マリン「あんた達もいい加減諦めたらいいのに。」

ブロッサム「しつこいのは嫌われますよ？」

Gゾーン「うるさい！うおおおおお！！！！」

ジェネラルゾーンは怒りながらゾーン達と共に襲い掛かってきた。そこへ、

ルージユ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

駆け付けてきたプリキュア5が、必殺技を放ってゾーン達を撃破した。

Gゾーン「何！？」

レモネード「プリキュア！プリズムチェーン！」

驚くジェネラルゾーンに向けてレモネードが光の鎖を放ち、動きを止めた。

Gゾーン「くっ！」

ドリーム「プリキュア！シユーティングスター！」

そして、光を纏ったドリームが彼にとどめを刺した。

Gゾーン「くっそおおおおお！！！！」

断末魔をあげながら、ジェネラルゾーンは消滅した。

ドリーム「やったあ！」

ミント「なんとか倒せたわね。」

マリン「まあ正直、みんなが来なくてもあたし達だけで倒せてただらうけどね。」

コフレ「マリン、ちょっと言い過ぎです。」

マリン「でもさあ、ルーイン帝国も偉そうなこと言ってる割りには全然大したことないと思わない？」

レモネード「確かにそうですね。」

アクア「でも、油断しない方がいいと思うわ。」

ムーンライト「ええ、相手は『破滅帝国』と恐れられるほどの存在。どんな手を使ってくるかわからないわ。」

マリン「大丈夫だって！あたし達に倒せない敵なんていないよ！」

しかし、彼女達は気付いていなかった。

戦い始めた時から何者かに見られていたことに・・・

???「ふっ・・・プリキュア共め、完全に油断しているな。だが、今日が貴様らの最後の日だ。」

そう言くと、謎の影はゆっくりと彼女達に近づき始めた。

???「よし・・・あの女にするか。」

謎の影は、徐々にブロッサムに迫る。

???「おい。」

ブロッサム「？サンシャイン、何か言いましたか？」

サンシャイン「ううん、私は何も・・・」

???「キュアブロッサム、聞こえるか？」

ブロッサム「誰ですか？どこにいるんですか？」

???「貴様の目の前だ。」

ブロッサム「!？」

???「貴様の体は・・・もらった！」

ブロッサム「い・・・嫌ああああああっ!!！」

マリン「ブロッサム!？」

ルージュー「な・・・何なのよ、あれ！」

ブロッサム
の様な何か
ブロッサム
の口の中
に入っ
ていく
のが見えた。

ブロッサム「あ・・・ああ・・・」

ブロッサムはしばらく苦しそうにもがいていたが、やがてがつくりとうなだれた。

マリ「ブロッサム！どうしたの！？」

彼女を心配したマリリンが急いで駆け付けるが、ブロッサムは黙ったまま動かない。

マリ「ブロッサム！ねえ、ブロッサムってば！」

ブロッサム「…マリリン…」

すると、ようやくブロッサムが顔を上げた。

「安心するマリリン達だったが、次の瞬間ブロッサムは信じられない行動に出た。

マリ「…がはっ！」

ブロッサムがいきなりマリリンの腹を殴ってきたのだ。

この行動に、ドリーム達は困惑する。

マリ「な…何すんの！ブロッサム…」

後退するもとつさにに体勢を整えるマリリンだったが、ブロッサムを見てすぐに彼女の異変に気が付いた。

マリ「ブロッサム…なの…？」

ブロッサムは笑っていた。

ただし、いつもの優しい笑顔ではなく、悪意に満ちた笑顔で。

ブロッサム「ふっ…こつも簡単に体に乗っ取れるとはな…」

「その言葉でドリーム達も不審に思い、全員が構えた。

ドリーム「貴方…一体誰なの？」

ブロッサム「ふん、いいだろう。教えてやる。俺の名はスピリト星人ビョーイ。見ての通り、人間に乗り移る能力を持っている。」

シプレ「ブロッサムから離れてください！」

ブロッサムB「やだね。」

ミント「ブロッサムに乗り移ってどうするつもり！？」

ブロッサムB「決まってるだろ。さっさと魔石を渡しやがれ！」

一同「…!?」「」「」

ブロッサムB「どうした？もう一度言ってやるのか？それとも、まさか渡せないって言うんじゃないよな？」

マリン「っ……」

ブロッサムB「言っておくが、魔石を渡さない限りこの体はずっと俺のものだからな。」

レモネード「そんな……」

サンシャイン「一体どうすれば……」

ブロッサムB「ふっ……ならこっちからいくぞ！」

すると、ブロッサムが目の前まで迫ってきたかと思うと、突然ドリムとアクアにパンチを放ってきた。

ドリム、アクア「きゃああああっ！」

突然の襲撃で二人は大きく吹っ飛ばされた。

ルージュ「二人共！」

ブロッサムB「よそ見をするな！」

ブロッサムは続けてルージュを殴って後退させ、更にミントとレモネードにもキックを放って吹っ飛ばした。

ルージュ「うっ！」

ミント「きゃあ！」

レモネード「あああっ！」

ブロッサムは今度はマリンに襲い掛かる。

マリン「くっ……」

身構えるマリンだったが、相手が大切な人では何も出来ない。

ムーンライト「マリン！」

サンシャイン「危ない！」

すかさずサンシャインとムーンライトが食い止めるが、ブロッサムはあり得ないほどの怪力で二人を押し返していく。

ブロッサムB「おらあ！」

サンシャイン、ムーンライト「きゃああああっ……」

二人は吹っ飛ばされて地面に激突した。

ブロッサムB「どうした？魔石を渡せばすぐに終われるんだぞ？」

ドリーム「くっ……」

マリ「プロツサム……」

ドリーム達がプロツサムを人質にされて動けないでいると、そこへユニバースとギンが到着した。

アクア「ユニバース！」

ユニバース「遅くなってごめんなさい。」

更に、少し遅れてウイングも到着した。

ユニバース「……ウイング……」

ウイング「……ふん。」

昨日の一件もあり、二人は少し気まずいになっていた。

アクア「二人共、どうしたの？」

ユニバース「……ううん、なんでもない……それより、どういう状況なの？」

サンシャイン「それが、敵の宇宙人がプロツサムに乗り移ってしまった……」

ムーンライト「プロツサムの体を人質にとって魔石を要求してきているの。」

ユニバース「そんな……」

マリ「魔石なんて無いし、どうすりゃいいのよ……」

ウイング「……ねえ、ということは、今のプロツサムは私達の『敵』なの？」

ルージ「え……？」

ウイング「今の彼女は体と意識を悪に乗っ取られているんですよ？現に、貴方達を襲ったんだし。」

サンシャイン「うん……今はそう考えていいかな……」

ウイング「わかったわ。それじゃあ……」

すると、ウイングはウイングショットを取り出し、その銃口をプロツサムに向けた。

マリ「え……？」

ドリーム「ウイング!？」

そして次の瞬間、ウイングはブロッサムめがけて勢いよく発砲した。
一同「……！！！！」

ブロッサムB「がああ！」

弾丸がブロッサムの肩に命中し、彼女は膝をついた。

ウイングは更に攻撃しようとするが、当然マリリン達に止められる。

ウイング「ちよつと、何するのよ！」

マリリン「それはこっちのセリフよ！なんでブロッサムを撃つたの！」

ウイング「決まってるでしょ！ブロッサムを倒す！」

マリリン「なっ……！」

その言葉に全員が驚き、同時にマリリンとルージユは激しい憤りを覚えた。

ルージユ「ちよつと！それ本気で言ってるの！？」

ウイング「当然でしょ！」

マリリン「仲間を攻撃するなんて、何考えてるのよ！」

ウイング「わかってるの！？今のブロッサムは私達と敵対する『悪』の存在なのよ！この世の『悪』は絶対倒さなければいけない！たとえそれが仲間だとしても！」

ドリーム「……違う……違うよ！そんなの絶対間違ってる！」

レモネード「そうです！仲間が悪に染まってしまったのなら、それを助けるのが最優先じゃないんですか！？」

ウイング「じゃあどうするの！？このままだと、やられるだけよ！」

シプレ「それでも、ブロッサムが死ぬなんてそんなの嫌です！」

ウイング「だけど……もうそれ以外に方法が無いのよ！」

そう言っつて、ウイングは再びブロッサムに銃口を向ける。

マリリン「やめてえ……！」

ウイング「……」

マリリンの懇願も聞かず、ウイングは引き金を引こうとした。

しかし次の瞬間、突然鈍い音が響き、ウイングは体勢を崩しかけた。

ウイング「……」

黙っつて隣を向くと、ユニバースが拳をこちらに向けていた。

ユニバースが、ウイングの顔を殴ったのだ。

殴られた箇所はヘルメットに守られていた為痛みは無かったが、さすがのウイングもこれには一瞬理解が遅れた。

全員が彼女の行動に驚愕していると、ユニバースが口を開いた。

ユニバース「・・・もう限界・・・」

そしてユニバースは、普段の彼女からは考えられないほど強い口調で言った。

ユニバース「こんなの、プリキュアでも何でも無い、ただの力の塊じゃない！ウイング・・・いいえ、七佳さん・・・やっぱり貴方は本当のプリキュアじゃないわ！仲間一人救えない七佳さんが、プリキュアになれるはずない！」

ウイング「なんですって！もう一度言ってみなさいよ！」

自らを否定するユニバースの言葉にウイングは激怒し、彼女に襲い掛かるうとするが、サンシャインが素早く食い止めた。

ウイング「っ・・・！」

ユニバース「・・・」

ムーンライト「二人共、冷静になりなさい。今はそんなことを言ってる場合じゃないでしょ。」

マリ「そうだよ！早くブロッサムを助けないと・・・！」

ウイング「・・・わかったわ。それなら貴方達の力でブロッサムを助けてみなさい。私は何もしないから。」

そう言つて、ウイングは後ろに下がった。

ドリーム達がブロッサムの方を向くと、傷が回復したのか彼女は平然とした表情で立っていた。

ルージュ「でも、どうするの？」

ドリーム「わからない・・・一体どうやってあいつをブロッサムの体から追い出せばいいの・・・」

助けるとは言ったものの、やはりどうしてもその方法が見つからない。

しかし、そんなことを考えている彼女達にブロッサムは容赦なく襲

い掛かってきた。

ブロッサムB「貴様ら、もう許さん！全員この手で殺してやる！」
サンシャイン「そうはさせない！」

すかさずサンシャインが応戦するが、やはりブロッサムを攻撃することが出来ない。

サンシャイン「うわあっ！」

ブロッサムのパンチを受け、サンシャインは大きく吹っ飛ばされた。
サンシャイン「うう……」

マリ「くっ……ブロッサム、もうやめて！」

我慢が限界を越えたマリは、ブロッサムに必死で呼び掛ける。

マリ「ブロッサム、聞こえる？そんな奴の言いなりになって本当にいいと思ってるの？お願いだから、いつもの優しいブロッサムに戻ってよ！」

ブロッサムB「無駄だ！もうこいつの人格は全て俺のものだ！」

そう言うと、ブロッサムは素早くマリンの正面に迫り、彼女の首を掴んで持ち上げた。

マリ「うぐっ……」

ブロッサムB「よし、まずは貴様から殺してやる。」

マリ「っ……つぼみ……」

ユニバース「……どうすれば……」

その様子を見ていたユニバースは、自身の体が震えていることに気付いた。

ユニバース「（！？なんで……なんで震えてるの？ちょっと、動いてよ！私、どうしちゃったの！？）」

しかし、行動しなければと思えば思うほど、彼女の震えが大きくなっていく。

その間に、ブロッサムはマリをどんどん苦しめていた。

ドリーム「マリを放しなさい！」

ドリーム達はいてもたってもいられず、遂にブロッサムに立ち向う。
ブロッサムB「ふん、やっとやる気になったか。」

そう言うと、ブロッサムはマリンを勢いよく放り投げた。

マリン「うわあっ！」

ドリーム「マリン！」

ブロッサムB「隙あり！」

次の瞬間、ブロッサムは素早い動きでドリーム達に襲い掛かった。

一方、マリンが投げ飛ばされるのを見たウイングは、素早く跳躍して無事彼女を受け止めていた。

マリン「あ……ありがとう……ウイング。」

すると、ウイングがマリンに話し掛けてきた。

ウイング「ねえ、ブロッサムを助けない？」

マリン「当たり前じゃん！つばみはあたしの一番大事な人なんだから……！」

ウイング「……わかったわ。それじゃあ今から私の言う作戦に協力してくれる？コフレも一緒に。」

コフレ「僕もですか？」

ウイング「ええ、あのね……。」

ウイングはマリンの耳元で作戦の内容を説明する。

マリン「……！そんな！それじゃあブロッサムも危ないじゃん！」

ウイング「だからこそ、貴方の協力が必要なんじゃない。ブロッサムが助かるかどうかは貴方に懸かっているのよ。」

マリン「……絶対成功する？」

ウイング「私を信じて。」

マリン「あんまり信じたくないけど……今回だけだよ。」

ウイング「ありがとう、じゃあいくわよ。」

そう言ってウイングはブロッサムの方を向く。

見ると、ドリーム達は全員ブロッサムに押されていた。

ムーンライト「なんて強い……！」

ミント「このままじゃ、負ける……。」

ブロッサムB「さて、そろそろとどめを刺すか。」

ウイング「そこまでよ。」

そこへウイングが立ちはだかり、剣と銃を合体させて構えた。

ブロッサムB「何をする気だ？」

サンシャイン「ま・まさか・・・!!」

ドリーム「ウイング！駄目！」

しかし、ウイングは全く構わずプレスに番号を入力した。

『8・8・9』

ウイング「プリキュア！ウイングバスター！」

銃から、ブロッサムめがけてまっすぐ光線が放たれた。

さすがのブロッサムもこれには驚愕した。

ブロッサムB「ちっ！さすがにまずいな・・・一旦体を変えるか。」

すると、ブロッサムの口からビョーイが姿を現した。

ドリーム「出てきた！」

レモネード「でもこのままじゃブロッサムが！」

そして、光線がブロッサムに命中するかと思われたその時、ウイン

グがマリんに呼び掛けた。

ウイング「今よ！マリン！」

すると次の瞬間、レッドの種で俊敏になったマリンが物凄いスピー

ドでブロッサムの元へ駆け付け、彼女を抱き抱えんとすかさずその

場を離れた。

ビョーイ「何！？くあああああっ！！！」

そして、ブロッサムの背景で逃げようとしていたビョーイに光線が

直撃する。

ビョーイ「馬鹿な！こんなはずではあああああああっ！！！」

ガス状の体では耐えきることが出来ず、ビョーイはそのまま爆発し

た。

ウイング「よし・・・」

その横で、マリンは目を覚まさないブロッサムに一生懸命呼び掛け

ていた。

マリン「ブロッサム！ねえ！ブロッサム！」

シプレヤドリーム達も心配そうに彼女を見つめる。

マリ「起きてよ！ブロッサムってば！」

ブロッサム「・・・う・・・」

すると、ブロッサムはゆっくりと目を覚ました。

ブロッサム「マリ・・・」

マリ「ブロッサム！」

喜びのあまり、マリはブロッサムに抱きついた。

ブロッサム「！？ちよっ・・・マリ！苦しいです！」

マリ「よかった・・・ブロッサムが元に戻って・・・」

ブロッサム「戻ったって・・・あ・・・そういえば私、皆さんに酷い

ことをしてしまっただけ・・・乗り移られてたとは言え、本当にす

みませんでした！」

マリ「そんなの気にしてないって！」

ムーンライト「ええ、貴方は何も悪くないわ。」

サンシャイン「またいつものブロッサムに戻ってくれから、もう大

丈夫。」

ブロッサム「マリ・・・サンシャイン・・・ムーンライト・・・

・・・」

マリ「あつ、そうだ・・・ウイング。」

マリは、その場を立ち去ろうとしていたウイングを慌てて呼び止

めた。

ウイング「・・・何？」

マリ「あの・・・その・・・ありがとう・・・ブロッサムを助け

てくれて・・・」

ウイング「・・・勘違いしないで。」

マリ「え？」

ウイング「今回はたまたまうまくいったからよかったけど、いつも

こんな方法が成功するとは絶対限らないわ。」

ドリーム「でも、結果的にブロッサムは助けられたんし・・・」

ウイング「だから貴方達は甘いのよ。」

そしてウイングは、強い口調で言った。

第16話「七佳の信念」(後書き)

こんな状況でクリスマス話なんて無理か・・・

第17話「拒絶」(前書き)

本日で、小説を書き始めてから一年が経ちました。

私ファウストKは、これからも忙しい中執筆を頑張っていきますので、また一年間よろしくお願いします。

第17話「拒絶」

いつものように街で暴れるゾーン達に、ウイングが一人で戦いを挑む。

ウイング「あんた達もいい加減しつこいのよ！」

剣と銃を駆使して、一人、また一人とゾーン達を撃破していくウイング。

ウイング「この世の悪は、私が全て倒す！」

その姿を、ギンと共に気配を察知して駆け付けたリイナは複雑な表情で見っていた。

リイナ「七佳さん・・・貴方はどうしてそこまでしてプリキュアの力を求めるんですか？こんなに強力で未知の力をどうして・・・」
ギン「どうした、リイナ。」

リイナ「・・・ねえ、ギン・・・本当にこれでいいのかな・・・？」
ギン「何？」

七佳「私、思うの・・・もし帝国を倒しても、私達プリキュアの力があれば結局同じことなんじゃないかって・・・」

ギン「つまり、プリキュアの力が世界を滅ぼすと言いたいのか？」
リイナ「・・・うん。」

ギン「・・・はつきり言わせてもらうが、そんなことは絶対に無い。少なくともキュアユニバースの力は、この宇宙の全てを平和へと導く誇らしいものだ。何も心配することは無い。」

リイナ「・・・ならいいけど・・・」

不安を残しつつ、リイナはシルバーリングを構える。

リイナ「トランス！キュアユニバース！」

徐々に指輪に光が集まり、完全に集まったところでリイナは指輪を額にかざす。

全身が光に包まれたリイナは光の中でプリキュアの姿へと変わり、右手で光を振り払い、変身を終えた。

ユニバース「・・・銀河に光る希望の星・・・キュアユニバース！」
名乗りを上げるユニバースだが、心なしかその声は沈んでいる様に
思える。

ユニバース「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ギン「・・・どうした？」

ユニバース「・・・なんでもない・・・」

そう言っただけに戦いに向かおうとするが、またしても体が震えているの
に気が付く。

ユニバース「え・・・？」

ギン「ユニバース？お前、震えているのか？」

ユニバース「また・・・どうして？」

やはり、戦わなければと思うほど震えが大きくなっていく。
すると、そんな彼女にジェネラルゾーンが気付いた。

Gゾーン「なんだ？あいつは？」

ユニバース「くっ・・・」

Gゾーン「まあいい、攻撃してこないのならこちらからいくぞ！」

ユニバース「・・・！」

ウイング「プリキュア！バスタードロップ！」

そこへ間髪ウイングが必殺技を放ち、Gゾーンを吹っ飛ばした。

ユニバース「ウイング・・・」

ウイング「何をしてるの！？貴方もプリキュアなら、戦いなさいよ
！」

ユニバース「でも・・・」

ウイング「・・・もういいわ。貴方はそこで見てなさい。」

そしてウイングは再びゾーン達に立ち向かう。

その様子を、ユニバースはただ見ていることしか出来なかった。

ウイングが一人でゾーン達を全滅させたその日の夜、リイナはまた
しても何も出来なかったことに悩んでいた。

リイナ「また・・・何も出来なかった・・・どうして・・・」

ギン「・・・リイナ、お前・・・本当にプリキュアとして戦う気はあるのか？」

リイナ「それは・・・あるよ・・・」

ギン「・・・」

ギンはそれ以上は何も言わなかったが、彼女に対してある考えを抱いていた。

そして、次の日がやって来た。

この日が、リイナにとって運命の一日となると、誰が予想出来ただろうか・・・

ギン「リイナ、帝国の奴らが現れたが・・・行くのか？」

リイナ「何？その言い方・・・行くに決まってるでしょ。」

ギン「そうか・・・なら急ぐぞ。」

リイナ「・・・」

リイナとギンが現場に到着すると、プリキュア5とセラフ、そしてウイングが、既に戦闘を繰り広げていた。

ドリーム「あつ！リイナさん！」

リイナ「・・・みんな・・・」

セラフ「少し数が多いわ！貴方も急いで加勢して！」

リイナ「・・・」

アクア「リイナ？」

ウイング「・・・？」

ギン「どうした？なぜ変身しない？」

リイナ「やっぱり・・・戦わなきゃ駄目なんだね・・・」

ギン「何？」

リイナ「ううん、何でもない・・・いくわよ。」

そう言っつて、いつもの様に指輪を構えた。

リイナ「トランス！キュアユニバース！」

掛け声と共に、指輪に光が集まっていく・・・

.....

はずなのだが、どうしたのか、全く光が集まって来ない。

リイナ「え・・・？」

予想外の出来事に、リイナをはじめ全員が驚いた。

ギン「リイナ、どうした？」

リイナ「わからない・・・トランス！キュアユニバース！」

リイナは再び変身を試みて掛け声をあげる。

しかし、やはり何も起こらない。

リイナ「どうして・・・？」

ミント「リイナさん、まさか変身出来ないの？」

リイナ「そんなこと・・・」

すると、戸惑うリイナにゾーンの一人が襲い掛かってきたが、すかさず駆け付けたウイングが剣で彼を切り裂いて撃破した。

リイナ「七佳さん・・・？」

ウイング「下がってなさい。昨日にしても、この前つぼみが操られた時にしても、最近の貴方は足手まといなのよ。」

レモネード「ウイング！そんな言い方しなくても・・・！」

しかし、リイナ自身は彼女の言葉の意味をよく理解していた。

リイナ「・・・そう・・・だよね・・・」

セラフ「とにかく、こうなったら私達だけで戦うわよ！」

ルージュ「それしかないみたいね・・・」

ローズ「いくわよ！」

ローズの一声と同時に、セラフ達は再びゾーン達に立ち向かっていった。

リイナ「・・・」

そして・・・ゾーン達を全て倒したドリーム達はリイナに質問しようとするが、

セラフ「リイナはきつと戦いすぎて疲れてるのよ。しばらく休んでればきつとまた戦えるわ。」

リイナを気遣ったセラフの一言で、その日は解散となった。

しかし、ギンと七佳は今回の件に関してはある想いでいっぱいだった。

帰宅したリイナは、自室の椅子に座ってため息をつくとき、そのまま黙った。

リイナ「……………」

ギン「……………リイナ。」

沈黙を破り、ギンが口を開いた。

リイナ「……………何？」

ギン「なぜ変身出来なかったか、自分でわかるか？」

リイナ「それは……………」

ギン「…お前は、心のどこかで本気でプリキュアの力を避けてたんじゃないのか？」

リイナ「……………」

ギン「どうなんだ？」

リイナ「……………ごめんなさい。私、やっぱり怖い……………この力がいつか暴走して、みんなを巻き込んで大変なことを起こしてしまうんじゃないかって……………やっぱり、この力は……………」

ギン「……………」
ギンはしばらく黙っていたが、リイナの暗い表情を見て何かを決意した。

ギン「……………リイナ、シルバーリングを渡してくれるか？」

リイナ「え？いいけど？」

リイナはシルバーリングを指から外すと、ギンに渡した。

すると次の瞬間、ギンは奪い取る様に指輪を受け取って右足にはめ、窓際へと飛んだ。

リイナ「え？」

ギンは一旦止まると、驚くリイナに振り向いて言った。

ギン「リイナ、お前の気持ちはよくわかった。だが安心しろ、もう悩むことはない。」

リイナ「ギン・・・？何言ってる・・・」

ギン「お前の眠れる力を見込んで、半ば強引にプリキュアの力を託したが、どうやら間違ってたようだな・・・すまなかった。これからは、普通の女の子として平和な日常を過ごしてくれ・・・元気でな。」

そう言い終えた途端、ギンはリイナの返事も待たずに突然窓を飛び出して何処へと飛び去ってしまった。

リイナ「!!!!」

その行動に驚愕したリイナは急いで家を飛び出し、上空を必死に見渡すも、ギンの姿はどこにも無かった。

リイナ「ギン・・・そんな・・・」

リイナは、ショックでその場に膝をついた。

第18話「平凡な日常」

ギンが姿を消してから、もうすぐ一週間が経つ。

あの後、リイナは唯やかれん達と協力して必死に搜索したが、遂にギンを見つけることは出来なかった。

ナッツハウスでは、唯達がギンの行方について考えていた。

唯「まさかギンが姿を消すなんてね・・・」

のぞみ「どうしちゃったんだろう?」

かれん「リイナと何かあったのかしら?」

唯「そうね・・・あの子最近様子がおかしかったし、もしかしたら私達の知らないところで何か問題が起こってたのかもね。」

こまち「やっぱり、リイナさんがプリキュアの力を拒んでるのが原因なのかしら?」

かれん「そうね・・・」

うらら「ギン、一体どこに行っちゃったんでしょうか・・・」

くるみ「どこって・・・やっぱり、自分の故郷に帰ったんじゃないの?」

りん「まあ、そう考えるのが普通よね。」

のぞみ「ところで、ギンって一体どこから来たの?」

りん「あ・・・そういえば確かに・・・」

かれん「確か、リイナも聞かされてないはずよ。」

うらら「そうなんですか?」

かれん「ええ・・・」

こまち「ココさん達も知らないの?」

ココ「知らないココ。」

ナッツ「パルミエ王国はいろんな国と交流してきたけど、ギンの様な種類は見たことがないナツ。」

くるみ「ココ様達も知らないなんて・・・」

唯「きつと、何か言えない理由があるのかもね。それより、リイナ

はあれ以来どうしてるの？」

かれん「ああ、それは……………」

リイナ「……………」

この数日間、リイナは元気が出せなかった。

理由は明白。

今まで共に戦ってきたパートナーが、突然自分の前から姿を消したからだ。

そしてそれと同時に、彼が変身アイテムも一緒に持って行ってしまった為、彼女はプリキュアへの変身能力も失ってしまったのだ。

リイナは黙って右手を見つめるが、そこには当然指輪は無い。

もう今の彼女は、キュアユニバースに変身する皇リイナではなく、普通の少女、皇リイナだった。

リイナ「はあ……………」

リイナは、複雑な想いのまま学校に到着した。

教室に入ると、親友の日和がいつもの様に笑顔で話し掛けてきた。

日和「リイナちゃん、おはよう。」

リイナ「おはよう、日和さん……………」

リイナも笑顔で返すが、日和はすぐに彼女の様子がおかしいのに気付く。

日和「…………リイナちゃん、最近何か嫌なことでもあった？」

リイナ「……………」

彼女の言ったことは凶星だった。

しかし、余計な心配をかけたくないという想いから、リイナは嘘をついてしまった。

リイナ「…………別に、何も無いよ。」

日和「でも、ここ一週間くらいのリイナちゃん、凄く暗いよ？私の前でもあまり笑わなくなっただし……………」

リイナ「ちよつと風邪気味で気分がのらないだけだよ。」

日和「大丈夫なの？」

リイナ「心配しないで。私は大丈夫だから。」
そう言つて、リイナは優しく微笑む。

日和「それならいいけど……でもよかった。やっといつもみたい
に笑ってくれたね。」

リイナ「……いつもみたいに……?」

日和「うん、この中学に入って間もない頃のリイナちゃんは、今
みたいに凄く自然に笑ってくれたよ。」

リイナ「あつ……そうか……そうだよね。」

日和「うん!」

そこへ教師がやつて来て、二人は席についた。

リイナ「……そう……私はもうプリキュアじゃない、二年前ま
でと同じ普通の女の子……これからは、プリキュアに変身してル
ーイン帝国と戦うことも無い、命の危険に直面することも無い、プ
リキュアの力を恐れることも無い、平凡な日常を送ることが出来る
……きつと、これが私にとって一番よかったのかもしれない……
……」

そして、いつも通り始まる彼女の日常。

授業が始まり、数学教師が熱心に新しく登場した公式を解説する。

体育の時間、クラスメイトに見守られる中、短距離走で自己ベスト
を更新。

昼休み、日和と一緒に趣味の音楽の話をしながら楽しく昼食。

五時間目、隣で眠っていた男子が注意されたのを見て、微笑を浮か
べた。

授業が終了し、日和と共に帰路につく。

彼女と別れて自宅に到着し、中に入ると、「今日もまた遅くなるの
で夕飯は貴方に任せます」という母からの書き置きを確認し、自室
へ向かう。

部屋に入り、真っ先に空の鳥籠が目に入ったが、すぐに視線を移し
て机に向かい、椅子に座った。

明日の授業の準備をしようかと考えたが、明日は休みだったことを思い出し、どうしようかと考えた。

日和とどこかに遊びにでも行くこうかと思いつながら、リイナは無意識の内に再び鳥籠に視線を向けた。

リイナ「……………」

何も無い鳥籠を、ただじつと見つめるリイナ。

すると、目から何かが流れ出た。

それが涙だと気付くまで、少し時間がかかった。

リイナ「……………なんでだろう……………私なんで泣いてるんだろう……………」

おかしいな……………今のこの状況に満足してるはずなのに……………」

リイナは涙を拭くと、考えるのをやめてベッドに入ってそのまま眠りについた。

そして、また新たな一日がやって来た。

リイナにとって、決して忘れることの出来ない一日が……………」

第19話「リイナ降板？」

ルーン帝国では・・・

シヨウキ「ええい！いつになったら魔王が戻ってくるんだ！」

度重なる部下の失敗にシヨウキはイライラしていた。するとそこへ、ジェネラルゾーンがやって来てシヨウキに何かを話した。

シヨウキ「何？本当か？」

Gゾーン「はい。おそらく魔王もそこにあるかと。」

シヨウキ「そうか、わかった。」

グレム「どうしたの？嬉しそうな顔して。」

ザンゴ「よほどいい報告だったようですね。」

シヨウキ「・・・グレム、ザンゴ、出撃の準備をしろ。」

グレム「ん？」

シヨウキ「奴らの本拠地を襲撃する！」

ザンゴ「なるほど、確かにいい考えですね。」

シヨウキ「既にあいつも向かった。急いで準備しな。」

ザンゴ「彼には言わなくていいんですか？」

シヨウキ「ピユアードか・・・放っておけ。」

グレム「だったらあたしも、久々にあの子を暴れさせてあげるとするか・・・」

シヨウキ「ふっ、プリキュア共・・・今日が貴様らの最後だ！」

この日、ナッツハウスではのぞみ達プリキュア5がある準備をしていた。

こまち「のぞみさん、奏さんが作ってくれたケーキ、ここに置いておくわね。」

のぞみ「あ、はい。」

うらら「飾り付けはこんな感じでいいでしょうか？」

のぞみ「うん、いいと思うよ。」

りん「それにしても・・・『リイナさんを元気づけるパーティー』
なんて開いちゃって、本当に大丈夫？」

のぞみ「大丈夫だよ！きつとリイナさんだって、こんな展開望んで
ないもん！」

りん「でもこういう時は、そつとしいた方がいいと思うけどなあ。
・・・」

くるみ「まあ、いいんじゃない？かれんも迎えに行っちゃったし。
・・・」

りん「うん・・・」

のぞみ「リイナさん、早く来ないかなあ。」

リイナが来るのを楽しみにするのぞみ達。

しかし、その様子を見つめる怪しい影が・・・

???「プリキュア、遂に見つけたぞ・・・楽しんでいられるのも
今の内だ。ゾーン共、行け！」

そして、ゾーン達は次々とナッツハウスに向かって走りだした。

その頃、リイナは・・・

リイナ「一人でここに来るのも久しぶりね・・・」

丘の上に寝転がって、いつもの様にリラックスしていた・・・のだ
が、なぜか今日は全く気持ちが悪く落ち着かない。

リイナ「・・・はあ・・・なんで今日は全然落ち着かないんだろう・・・
・・・」

正直なところ、その理由には彼女自身もつつすら気付いていた。
ただ、考えたくなかったのだろう。

リイナ「・・・仕方ないよね・・・」
かれん「リイナ。」

するとそこへ、かれんがやって来た。

リイナ「かれん・・・」

かれんはリイナの横に腰を下ろす。

かれん「家にいなかったから、やっぱりここにいたのね。」

リイナ「うん……」

かれん「……リイナ、ギンがいなくなつて、正直どう思ってる？」

リイナ「え……？どうって言われても……」

かれん「？」

リイナ「……そうね……でも、不思議と悪い気はしないわ。何も
ない平凡な日常だけど、これがなんだか凄く心地よくて安心出来る
の……きつと私、心のどこかでこんな風になることを望んでたの
かな……」「普通の子に戻りたい」って……」

かれん「そう……でも、リイナは本当にこれでいいと思ってるの
？」

リイナ「え？」

かれん「確かに今の貴方は凄く嬉しそうな顔をしてる……けど、
何かを感じられないの。まるで、何か大切なことを無理に忘れよう
としてみるみたい……」

リイナ「それは……」

かれん「……ギンのことでしょ。」

リイナ「……」

かれん「凶星ね。」

リイナ「……かれん……話を聞いてくれる？」

かれん「ええ、いいわよ。」

そして、リイナはかれんに全てを話した。

かれん「……そうだったの……まさかそこまで悩んでいたなんて
……」

リイナ「ギンは……きつと私のことを見放したんだと思う……
私がこの力から逃げたいと思ったから……その想いが、無意識の
内に体にも伝わって、震えて戦えなくなつて、遂には変身すら出
来なくなつて……これじゃあ見放されて当然だよな。」

かれん「……それで？リイナはこれからどうしたいの？このまま、
普通の女の子として過ごしていくの？」

リイナ「それは……」

かれん「本当は自分でも思ってるんじゃないの？」「もう一度みんなと一緒に戦いたい」って。」

リイナ「・・・でも、もう無理よ。私はもうプリキュアにはなれないし、みんなの力になることも出来ない・・・もう私には、みんなと戦う資格なんて無いのよ・・・」

かれん「・・・」

かれんはしばらく黙っていたが、やがて口を開いてリイナに尋ねた。かれん「ねえ、リイナは、ご両親のことは好き？」

リイナ「え？いきなり何言ってる・・・」

かれん「どうなの？」

リイナ「・・・好き・・・と言うよりも、憧れてると言った方がいいかな・・・お母さんはお医者さん、お父さんは冒険家、それぞれやっていることは全然違うけど・・・二人共、すぐに誰とでも仲良くなれるから、正直羨ましいの。会って間もないのに、名前もその人の性格もあつという間にわかつちゃう・・・そして、数えきれないくらい大勢の人達と友達になれる・・・私もそんな人になりたいから、凄く二人が羨ましい。」

かれん「ご両親のことを心から尊敬してるのね。」

リイナ「でも、それがどうしたの？」

かれん「・・・リイナ、心配しなくても貴方はまた戦えるわ。」

リイナ「どうして？」

かれん「私も、お父様とお母様のことが大好きよ。仕事で滅多に会えないけど、一度も嫌になったことは無いわ。」

リイナ「・・・？」

かれん「つまり、私が言いたいののは、プリキュアである私達と同じで貴方もご両親のことが好きなんだから、私達の力になれないはずがないってこと。」

リイナ「そう・・・なの・・・？」

かれん「まあ、これは私が以前のぞみに言われたことをそのまま言っただけなんだけどね。」

リイナ「かれんが？」

かれん「ええ、以前私も・・・結局、私がやるしかないのね・・・」
「・・・なんて思いだけで変身しようとして失敗。悔しいけど、もう自分はみんなと一緒に戦えないと思っただけで、身を退こうとしたわ。でも、のぞみはそんな私を今みたいに励ましてくれた。そのおかげもあって、私は今の私を手に入れることが出来たの。だからリイナも、諦めちゃ駄目。きつと貴方にも、まだ出来ることがあるはずよ。忘れないで。私や唯、みんなはいつでも貴方のことを応援してるから。」

リイナ「かれん・・・」

かれん「それで、これからみんなで貴方を元気づける為にパーティーを・・・」

その時、かれんのキュアモに着信が入った。

かれん「あら、のぞみからだわ・・・もしもし？・・・え？・・・わかったわ。すぐに向かうから、もう少し頑張っただけ。」

リイナ「どうしたの？」

かれん「ルーイン帝国が、ナッツハウスに攻めてきたって。」

リイナ「ええっ!？」

かれん「私は今すぐナッツハウスに向かうけど・・・貴方はどうする？」

リイナ「・・・私は・・・」

かれん「焦らなくても大丈夫よ。リイナはリイナに出来ることをすればいいんだから。」

リイナ「・・・うん。」

かれん「じゃあ、行くわね。」

そう言っただけで、かれんは立ち上がって走りだしたかと思うと、立ち止まって再び言った。

かれん「リイナ、最後に一つだけ言わせて。」

リイナ「何？」

かれん「貴方の気持ちはよくわかるわ。確かに貴方の言う通り、プ

リキュアの力はとても強力で、時に私達自身を危険に導くかもしれない。だけど、その恐怖から逃げたら駄目。危険を恐れて逃げてしまったら、危険な目に遭ったからこそ得ることの出来るものを得られなくなってしまうわ。人は、自分自身の力で困難に立ち向かうからこそ、正しい道を見失わずに済むの。そのことを覚えておいて。」

リイナ「・・・わかったわ。」

かれん「じゃあ、無理しないでね。」

リイナ「かれんも気を付けてね!」

そして、かれんはナッツハウスへと急いだ。

残されたリイナは・・・

リイナ「私に出来ること・・・よし・・・!」

走りだし、ある場所へと急いだ。

第20話「戦う力」

ナッツハウスの前に広がる湖。

その近くで、プリキュア5は突然のゾーン達の襲撃に必死で応戦していた。

ルージュ「くっ！いきなり襲ってきて、なんなのよ！」

レモネード「なんだか、今日はいつも以上に本気で来てる様な気がします！」

ドリーム「っ・・・みんな！絶対負けちゃ駄目だよ！」

ローズ「そうよ！かれんが来るまで踏ん張るのよ！」

????「そうはいくか。」

ミント「誰!？」

彼女達の前に、吸血ヒルに似た姿をした怪人が現れた。

????「俺の名は、ウズク星人ヒルガーウ！プリキュア、今日が貴様らの最後だ！」

ローズ「出たわね！帝国！」

ミント「どうしてここに？」

ヒルガーウ「ふん、簡単なことだ。以前ビョーイがキュアブロッサムに乗り移った時、お前達を攻撃する瞬間に小さな発信機を付けさせてもらったんだよ。」

レモネード「そんな・・・いつの間に・・・」

????「そして今日、遂にこの場所を突き止めた我々は、総攻撃を行うことにしたというわけだ。」

ドリーム「貴方は・・・！」

ショウキ「久しぶりだな、キュアドリーム。」

木の陰から姿を現したのは、ショウキだった。

ルージュ「ドリーム、あいつのこと知ってるの？」

ドリーム「うん・・・」

ショウキ「改めて自己紹介しよう。俺はダイラ星人ショウキ！ルー

イン帝国前皇帝幹部、破壊軍団が一人だ！」

ローズ「幹部が出てくるなんて、どうやらだいぶ焦ってるみたいね。」

シヨウキ「ふん、強がりを言ってるのも今の内だ。ヒルガーウ、やれ！」

ヒルガーウ「ふっ、覚悟しな、プリキュア。」

そう言うとヒルガーウは巨大な棍棒を取り出し、ゾーンやジェネラルゾーンと共にプリキュア5に襲い掛かった。

ドリーム「勝つのは私達の方よ！みんな！」

ルージュ、レモネード、ミント、ローズ「Yes!!!」

それに対し、プリキュア5も全く怯むことなく立ち向かっていった。

その頃、リイナは……

リイナ「……………」

唯「……………それで、私のところに来たわけね。」

リイナ「……………はい。」

リイナは、唯の家を訪ねていた。

唯「そうね……………話を聞いた限りでは、確かにかれんの言う通りね。」

リイナ「でも私、正直まだわからないんです。私に出来ること……………」

……………それで、唯さんの意見を聞きたいと思って……………」

唯「そう……………」

リイナ「私、これからどうすればいいんでしょうか……………」

唯「……………」

リイナ「唯さん……………」

唯「……………リイナ、どうしてプリキュアは、どんな困難の中でも恐ろしい敵に、勇敢に何度も何度も立ち向かっていけると思う？」

リイナ「え……………それは……………」

唯「……………簡単なことよ。それは、絶対に負けない理由があるから。私達には、自分が絶対に守りたい、守らなければいけないもの

がある。守りたいものがあるから、私達は苦しくても何度だって立ち上げられる。それは、貴方も同じことでしょ？」

リイナ「……………」

唯「私達は、みんな繋がってる。それは、プリキュアかどうかなんて関係ない。プリキュアに変身出来なくても、この世界を守りたいという想いはみんな同じ。リイナ、確かに今の貴方はプリキュアじゃない、普通の女の子。だけど、それで貴方はもう戦えない存在になったの？ 仮に貴方がそう思っているとしても、本当にこれでいいの？ 大切なものを守れなくなってもいいの？」

リイナ「違う！」

唯「……………」

リイナ「違う……私、このままじゃ嫌！プリキュアの力なんて関係ない……私だって、この世界や、この世界に住むみんなを守る為に戦いたい！」

唯「……それなら、これから貴方がやるべきこともわかってるわよね？」

リイナは黙ってうなずいた。

唯「じゃあ、行きなさい。みんなが貴方を待ってるわよ。」

そして、リイナは天宮邸を後にし、戦いの地へと急ぐ。

その途中、リイナは仲間達のことを思い出していた。

出会って以来、いつも自分を導いてくれた唯。

変身出来なくなり、自信を無くしていた自分を励ましてくれた親友かれん。

そのかれんがプリキュアになるきっかけを作ったのぞみ。

りんやこまち、うららやくるみ、他のプリキュア達も、みんな見ていて凄く楽しかった。

自分をまるで妹の様に心配してくれた翔太。

そして、七佳。

今でこそ険悪な関係になってしまっているが、リイナはいつかき

と彼女ともう一度わかり合えると信じていた。

その為に、リイナは走る。

大切なものを取り戻す為に……

リイナ「戦いはまだ終わってない！私は自分だけ勝手に、戦うことから逃げようとしていた！でも、もうそんなこと絶対に許さない！私はもう一度戦ってみせる！最後まで、絶対諦めないんだから！」

ヒルガーウ「おりゃあ！」

ドリーム「っ……！」

シヨウキ「ふん！」

ローズ「危ないわね！」

ドリーム達はシヨウキとヒルガーウの猛攻に苦戦していた。

ゾーンやジェネラルゾーンは比較的すぐに倒せたが、この二人はそうもいかなかった。

ドリーム、ルージュ、ミントはヒルガーウの怪力を生かした棍棒攻撃に、レモネードとローズはシヨウキの素早い動きにそれぞれ翻弄されて思うように反撃出来ない。

シヨウキ「ふん！」

シヨウキは槍でローズを攻撃するが、ローズは間一髪かわしてすかさず彼の背中にキックをたたき込んだ。

しかし、シヨウキには効いていないらしく、逆に足を掴まれそのまま投げ飛ばされてしまった。

ローズ「あああっ！」

レモネード「ローズ！」

素早くローズをキャッチするレモネードだったが、次の瞬間シヨウキが勢いよく突っ込んできた。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

そこへドリームが突撃し、どうにか相殺した。

シヨウキ「やるな。」

ドリーム「貴方の相手は私よ！」

そう言つてドリームは、再びシヨウキに立ち向かう。

その隣では、ルージュとミントがヒルガーウに押されていた。

ヒルガーウ「くらえ！」

ミント「きゃあああっ！」

棍棒の重い一撃が直撃し、ミントは大きく吹っ飛ばされた。

ルージュ「ミント！」

ミント「うっっ……」

ルージュ「ミントに……何すんのよ！！」

ルージュはファイヤーフールレを取り出し、ヒルガーウに切り掛かった。

しかし、剣の一撃は棍棒で簡単に防がれてしまった。

ルージュ「くっ！」

ヒルガーウ「なんだ？もしかして怒ってるのか？」

ルージュ「当然でしょ！ミントを傷つける奴は、私が絶対許さない！」

ヒルガーウ「ならその怒り、もっとぶつけてみるよ。」

そう言うと、ヒルガーウは棍棒を振り回してルージュを後退させ、

棍棒にエネルギーを蓄めながらゆっくりとミントに迫った。

ミント「……！」

ルージュ「させるかああああっ！！！」

そこへ、鬼の様な形相をしたルージュが飛び掛かってきた。

が、しかし、やはり彼女の攻撃は棍棒で簡単に防がれてしまう。

ヒルガーウ「なんだよ、まさかその程度か？」

ルージュ「うるさいわね！偉そうに言つてられるのも今の内よ！」

ヒルガーウ「ふっ……喋ってる暇があったらもっと攻撃してこいよ。

でなきゃ、お前の大切なキュアミントがもっと傷つくことになるぜ？」

ルージュ「なんですって！そんなこと……絶対させない！！！」

ミント「ルージュ！挑発に乗っちゃ駄目！」

しかし、もはやミントの声は今のルージュには全く届いていない。

そうしてる内に、ルージユは徐々に体力が切れて追い込まれていく。ルージユ「ううっ・・・絶対負けないんだから！」

更に、隣ではドリーム達もシヨウキを相手に苦戦していた。

ミント「ルージユ・・・みんな・・・！！！」

気が付くと、ミントの背後にジエネラルゾーンが立っており、剣先を彼女に向けていた。

ミント「ああ・・・」

Gゾーン「終わりだ・・・」

ミント「っ・・・」

死を覚悟して目をつぶるミント。

その時、

????「キュアフルーレ！サファイアスラッシュ！」

突然何者かがジエネラルゾーンを横に切り裂き、ジエネラルゾーンは爆散した。

ミント「え・・・？」

????「ミント、大丈夫？」

ミント「アクア！」

間一髪ミントを助けたのは、ようやく到着したアクアだった。

アクア「なんだか、状況は最悪みたいね。」

ミント「アクア、お願い！みんなを助けて！」

アクア「勿論よ！」

そう言うとアクアは、まずシヨウキと戦うドリームの元に向かった。ドリーム「うああっ！」

レモネード「ドリーム！」

シヨウキ「ふん、この程度か・・・ん？」

アクア「はああっ！」

アクアは素早く切り掛かるが、シヨウキも槍で攻撃を受け止めて応戦する。

ローズ「アクア！」

シヨウキ「ようやく六人目が来たか。だが無駄だ！」

そう言つてシヨウキは、力強くアクアを押し返して後退させ、さすがに槍を突き刺してきた。

アクア「果たしてそうかしら？」

シヨウキ「何？」

するとアクアは、素早く宙返りをして攻撃をかわし、更に勢いよく剣で切り掛かった。

シヨウキ「ぬっ！」

槍で防ぐも、アクアの力に押されて槍を落としてしまった。

アクア「今よ！ドリーム！」

ドリーム「わかった！プリキュア！シューティングスター！」

そこへ、光を纏ったドリームが突撃し、シヨウキは吹っ飛ばされた。シヨウキ「うおおっ・・・！」

アクア「よし、次はあいつね！」

そのままアクアは、ヒルガウに苦戦しているルージュの元へ駆け付ける。

アクア「ルージュ！」

ルージュ「アクア・・・」

アクア「後は私がやるわ。貴方は少し休んでなさい。」

ルージュ「嫌・・・」

アクア「え？」

ルージュ「お願いです・・・こいつだけは、私にやらせてください！」

ルージュは泣きながら懇願するが、アクアは許さなかった。

アクア「駄目よ。そんな怪我で戦うなんて許さないわ。」

ルージュ「でも！」

アクア「ルージュ、一人で戦おうとしないで。私達はいつでも一緒なんだから。仲間存在を忘れて一人で戦うなんて、絶対許さないわ。」

ルージュ「・・・アクア・・・」

ルージュは、涙を必死で堪えながらアクアに自身のフルーレを渡し

た。

アクア「大丈夫、貴方の想いを無駄にはしないから。」

ドリーム「アクア!」

振り向くと、ドリーム、レモネード、ミントも自身のフルーレを投げ渡してきた。

アクア「ありがとう。ミント、ルージュをお願い。」

ミント「わかったわ。」

ミントはルージュを抱き抱えると、ドリーム達と共に後退した。

そして、五本の剣を持ったアクアはゆっくりとヒルガーウに近づくと、

ヒルガーウ「次はお前か・・・ま、誰が来ても同じだがな。」

そう言つて棍棒を振り回し、アクアに襲い掛かるが、アクアは華麗な動きで攻撃をかわした。

ヒルガーウは何度も攻撃するが、その度にアクアに簡単かわされてしまう。

ヒルガーウ「くっ、だったらこれでもくらえ!」

そう言うと、ヒルガーウは棍棒にエネルギーを蓄めはじめた。

アクア「!」

ヒルガーウ「おらあ!!」

次の瞬間、今までで一番重い一撃がたたき込まれた。

が、アクアは難なくかわすのに成功し、棍棒はそのまま地面にめり込んだ。

ヒルガーウ「しまった!くそっ!」

なんとか抜こうとするが、かなり深くまでめり込んだらしくなかなか抜けない。

そこへすかさずアクアが飛び掛かる。

アクア「くらいなさい!キュアフルーレ・ファイブアタック!」

ようやく棍棒を抜いた瞬間、ヒルガーウは五本の剣で切り付けられ、大きく後退した。

ヒルガーウ「ちいっ!やるな・・・!」

シヨウキ「どうやら少し侮りすぎたらしいな。」

アクア「さあ、とどめよ！」

そして、アクアはとどめを刺そうと走りだしかけた。するとその時、どこかから声が響いた。

「???」面白いことになってるじゃないの。あたしも混ぜてもらおうよ。」

シヨウキ「その声はグレムか！今まで何をしていた！」

グレム「別に。あたしの可愛いペットちゃんを連れてくるのに時間がかかっただけよ。」

アクア「誰なの!？」

ローズ「姿を見せなさいよ！」

グレム「ふふ、いいわよ。」

すると、突然地面が揺れ、湖の水面が大きく震え出したかと思うと、そこから何かが姿を現した。

レモネード「何ですか!？あれ!！」

湖から現れたのは、見たことの無い巨大な怪物だった。

蛇の様に長く巨大な白い体。

頭は龍に似ているが、六つもある目が不気味に赤く光っている。

そして、体の至るところから触手が生えており、うじゃうじゃと気持ち悪く動いていた。

ミント「なんて大きいの・・・」

六人が驚いていると、怪物の頭の上からグレムが姿を現した。

グレム「はじめまして、プリキュアのお嬢ちゃん達。あたしはヨーク星人グレム。皇帝軍幹部の一人よ。よろしく。」

ドリーム「幹部がもう一人来るなんて！」

シヨウキ「遅かったな！そいつを連れてきたからか？」

グレム「そうよ。さあ、ここからは私の可愛いゼファーちゃんが貴方達の相手よ。」

アクア「みんな、まだ戦える？」

そう言っただけでアクアはドリーム達に剣を返した。

ルージユ「っ・・・当然でしょ!！」

ローズ「ええ、私達の実力をかせてやりましょう！」
のぞみ「じゃあ、いくよ！」

プリキュア5「Yes!!!」
そう言うと同時に六人は一斉に走りだし、四方向からゼファーに切り掛かった。

グレム「甘いわね。」

ゼファー「グオオオオオツツッ!!!」

しかし、ゼファーは全身に生えた触手を勢いよく伸ばして六人を攻撃した。

ドリーム「くっ！」

すかさずドリーム達も剣で反撃するが、触手が多すぎて思うように攻撃出来ない。

ローズ「みんな！とにかくこいつの頭を狙うのよ！」

ミント「わかったわ！プリキュア！エメラルドソーサー！」

ルージュ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

ローズ「ミルキイローズ・メタルブリザード！」

レモネード「プリキュア！プリズムチェーン！」

ローズ達はゼファーの頭部めがけて一斉に必殺技を放った。

が、ゼファーは少し怯んだ程度ですぐに復活し、触手を伸ばしてプリキュア5を攻撃した。

ドリームとアクアは回避に成功したが、残りの四人は触手に勢いよく打たれ、吹っ飛ばされてしまった。

ルージュ「うあああっ！」

ドリーム「ルージュ！みんな！」

レモネード「うう……」

ミント「っ……強い……こんなに大きい敵とどうやって戦えば……」

ローズ「諦めちゃ駄目よ！私達は絶対負けないんだから！」

ドリーム「そうだよ、みんな！私達なら絶対勝てる！」

ドリームは腕を交差して必殺技を放つ。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

光を纏ってゼファーに突然するドリームだったが、次の瞬間ゼファーの触手に捕らえられてしまった。

ドリーム「うああっ！」

アクア「ドリーム！」

グレム「まずは一人・・・」

アクア「ドリームを放しなさい！プリキュア！ブルークロス・スラッシュ！」

アクアは十字型の光の刃を放ってゼファーを攻撃した。

ゼファーは怯んでドリームを放してしまうが、変わりにアクアに狙いを定める。

アクア「しまった・・・！」

気付いた時には既に遅く、アクアはゼファーの触手に捕らえられてしまった。

アクア「ああっ！」

ドリーム「アクア！」

ドリームは急いでアクアを助けようとするが、背後から襲ってきた触手に再び捕まってしまった。

ドリーム「うっっ！」

グレム「ゼファーちゃん、そのまま殺やっちゃいなさい。」

ゼファー「グオオオオッ！」

グレムの命令に従ってゼファーは徐々に締め付ける力を強くしていく。

アクア「ああっ・・・！」

ドリーム「うう・・・アクア・・・」

ローズ「やめなさい！！！」

ゼファー「ガアアアッ！」

ローズ達は救出しようと立ち向かうが、ゼファーの触手に弾き飛ばされてしまう。

ルージュ「くっ！」

レモネード「ドリーム！アクア！」

ドリーム「うう・・・」

グレム「さあ、くたばりなさい！」

シヨウキ「ふっ、終わつたな・・・ん？」

シヨウキがふと横を見ると、誰かがこちらに走ってくるのが見えた。
「???」はああああっ！

ローズ「リイナ!？」

そう、そこに現れたのは、リイナだった。

アクア「リイナ・・・?」

リイナ「二人を放しなさい！」

グレム「おやおや、またうるさいのが来たみたいね。ゼファーちゃん、ついでに殺っちゃいなさい。」

ゼファー「ゲアアア！」

ゼファーはグレムの命令で触手を伸ばしてリイナを攻撃するが、リイナは素早く唯から預かった武器、スタントンファーを取り出して応戦する。

高圧電流の流れるトンファーで触手を切り裂いていき、背後から襲い掛かる触手も自慢のキックで次々に蹴散らしていく。

しかし・・・

リイナ「くっ！キリがない・・・これじゃかれん達に近付けない！」
見ると、ドリームとアクアは更に締め付けられていた。

このままでは命を落としかねない。

グレム「さあ、とどめよ。」

するとその時、どこからか銃声が響いたかと思うと、二人を締め付けていた触手が突然碎け、二人は解放された。

ヒルガーウ「何だ?」

銃声のした方を向くと、ウイングが飛翔した状態で銃を構えていた。ウイングはそのまま、拘束から解放されて落下していくドリームに向かって急降下し、彼女をキャッチすると同時にゆっくりと着地し

た。

アクアも、リイナによってキャッチされ、二人は一命を取り留めた。
ドリーム「あ……ありがとう、ウイング。」

ウイング「……。」

リイナ「かれん、大丈夫？」

アクア「ええ……なんとか……来てくれたのね。」

リイナ「ありがとう、かれん。私、わかったよ。自分が今何をすべきなのか。プリキュアに変身出来なくなっただって、私は戦える。みんなを守る為に、これからも戦い続けるわ。」

アクア「よかった……。」

アクアは満足そうに笑みを浮かべた。

そこへ、ウイングやドリーム達もやって来る。

ウイング「どうやら、少しはマシになったみたいね。」

リイナ「……はい。」

ウイング「……！」

すると、突然ウイングが後ろを振り向いた。

その視線の先には、ゼファアの頭上から降りたグレムが立っていた。

グレム「ふふ……人数が増えて面白くなってきたじゃない。」

ウイング「……グレム……。」

グレムを睨み付けるウイングの目は、いつになく殺意に満ちていた。

第20話「戦う力」(後書き)

戦う意志を取り戻したリイナ。
しかし次回、新たな悲劇が……

第21話「ウイングVSグレム、過去の因縁」

ウイング「・・・グレム・・・」

ウイングは彼女の名前をぼそつと口にした。

レモネード「ウイング、あの女のこと知ってるんですか？」

しかし、ウイングはレモネードの質問を無視して一人で続ける。

ウイング「・・・やっと会えた・・・ はあああああつ！！」

すると次の瞬間、ウイングは突然グレムめがけて飛び掛かった。

ドリーム「ウイング！？」

驚く一同をよそに、ウイングはすかさず剣でグレムに切り掛かる。

ウイング「ふん！」

が、グレムはあっさり受け止めると、左足でウイングの腹に蹴りを放って後退させた。

ウイング「ぐっ・・・！」

一瞬怯むウイングだったが、すぐに体勢を整え、再びグレムに攻撃を仕掛ける。

ウイング「あの時の痛み、思い知れええっ！！」

ドリーム「あの時・・・？」

ウイング「でやあつ！」

しかし、またしてもグレムに受け止められてしまう。

すると、グレムが笑みを浮かべて言った。

グレム「ああ、思い出したわ。あんた、あの時殺し損ねたガキね。」

ウイング「っ！」

ウイングは一旦後退し、グレムと対峙する。

ドリーム「ね・・・ねえ、ウイング・・・どうということなの？」

ローズ「やっぱり、あいつのこと知ってるのね？」

ウイング「・・・ええ、そうよ。三年ぶりね、ヨーク星人グレム・・・

・この三年間、あんたのことを忘れようと思ったことは一度も無かつわ。」

ミント「三年前って、確か・・・」
ルージュ「七佳さんの住んでる街が、帝国に教われた・・・」
まさか！」
ウイング「・・・そのまさかよ。」
ウイングは、再びグレムを睨み付けて言った。
ウイング「こいつは・・・私達から大切な人を奪った張本人なのよ
！！」
一同「！！！！！！」
ウイング「忘れもしない・・・」

蘇る三年前の記憶・・・
家族でいつものように平和に過ごしていた。

・・・はずなのに、その平和は一瞬で奪われた。

突然大きな音がしたかと思うと、不気味な姿をした連中が現れ、彼らは次々と街の人達を殺害していった。

彼らはすぐに自分達の前にも現れた。

逃げようとしたその瞬間、両親と従妹の悲鳴が響く。

「父さん！！母さん！！」

「っ・・・七佳！逃げるぞ！」

急いで駆け寄ろうとしたが、従兄あにに腕を引っ張られ、従兄、そして、自らの恋人と共にその場を離れた。

が、奴らはそんなに甘くなかった。

あっという間に見つかってしまい、逃げる暇も無く追い詰められてしまった。

そして、半人半獣の姿をした一人の女が自分に向けて剣を振り下ろす。

もう駄目だと思ったその時、恋人が自分の前に立ち、剣の一撃を受けた。

「うああっ・・・！！」

悲鳴と共に、ゆっくりとその場に倒れる彼を見て、すぐには何が起

「大丈夫？」

すると、重症を負って動けない自分に、別の少女が呼び掛けてきた。「今すぐ助けるから！頑張つて！」

そう言つて、彼女はまだ怪我の軽かった従兄と共に私を病院へと運んでくれた。

そこからのことはよく覚えてない。

私が最後に見たのは、倒される寸前で逃亡する女の姿だった……

グレム「まさかプリキュアになつてたとはね。元気にしてた？」

ウイング「……気安く話し掛けないでくれる？」

グレム「随分嫌われちゃつてるみたいね……そうだ、あんたの彼は元気がしら？」

ウイング「……！！！」

その瞬間、ウイングの表情が更に険しくなった。

ウイング「なんですつて……」

グレム「あら……？ああ、そうだったわね。もうこの世にはいないだつて。あたしが殺してやつたんですものね。」

ウイング「だまれえええつつつ！！！」

次の瞬間、ウイングはグレムに向けて銃を発砲した。

弾丸はかわされてしまったが、ウイングはグレムを再び睨んで言い放った。

ウイング「父さんや母さんだけでなく、辰巳君まで……あんだだけは絶対許さない！！！」

グレム「だったら何？」

ウイング「決まつてるでしょ！あんだを殺す！」

ドリーム「ウイング、私達も……」

ウイング「来ないで！」

ドリーム達は助太刀に向かおうとするが、ウイングは頑なに拒否した。

ウイング「手出ししないで。こいつだけは……私の手で倒す！」
グレム「じゃあ、かかって来なさい。お望み通り相手してあげるわ。」

ウイング「いくわよ……！」

リイナ「七佳さん……！」

ウイング「はああああっ！」

まずウイングは素早くグレムに向かって走りだし、思い切り殴りかかった。

しかし、グレムはあっさり受け止めると、左足でキックの重い一撃をたたき込んでウイングを後退させる。

ウイング「くっ！」

すると次の瞬間、グレムは右腕を一瞬で龍の頭部に変形させ、その口から火球を連続で放って攻撃した。

ウイング「……！」

ウイングの周囲が炎に包まれる。

ドリーム「ウイング！」

グレム「ふふ……ん？」

勝利を確信したグレムが笑みを浮かべたその時、炎の中から光の翼を纏ったウイングが現れ、上空へと飛翔した。

「8・8・9」

空中で一旦停止したウイングは剣と銃を合体させると、素早くブレスに番号を入力し、グレムに銃口を向けた。

ウイング「プリキュア！ウイングバスター！」

グレムめがけて銃口から勢いよく光線が放たれた。

ルージュ「決まった！」

しかし次の瞬間、グレムは右腕で光線を吸収し、続けてウイングめがけて黒い光線を放った。

ウイング「くっ！」

すかさずかわし、空中を飛翔するウイング。

それに対し、グレムは右腕を伸ばして彼女を追跡する。

ウイング「なっ……!!」

危険を感じたウイングは必死に逃げ回るが、圧倒的なスピードに適わず、彼女の腕に捕らえられてしまった。

ウイング「あああっ!!」

ローズ「そんな……あのウイングが押されてるなんて……」

グレム「どうしたの? あたしを倒すんじゃないの?」

ウイング「っ……!!」

グレム「ふん!!」

そして、グレムは右腕を勢いよく振り下ろし、ウイングを地面に叩きつけた。

ウイング「うあああああっ!!」

その頃、翔太はバイクを走らせてナッツハウスへと急いでいた。背中に新たな武器を背負って。

翔太「七佳……早まるなよ……!!」

ウイング「っ……!!」

痛みを堪えながらなんとか立ち上がるウイングに、グレムが襲い掛かる。

グレム「はあっ!!」

ウイング「負けるもんですか!!」

ウイングも必死で応戦するが、やはりグレムが優勢だ。

グレム「所詮この程度ね。」

ウイング「まだよ! 次で決めてやるわ!!」

そう言っつてウイングは素早く後退し、再び飛翔した。

『4・4・5』

そして、ブレスに番号を入力し、右足にエネルギーを蓄める。

ウイング「プリキュア! バスタードロップ!!」

急降下しながらグレムめがけてキックを放つウイング。

ウイング「今度こそ……!!」

グレム「・・・ゼファーちゃん。」

ゼファー「グオオオオオツ!!!」

その時、突然ゼファーが触手を伸ばし、ウイングを拘束した。

ウイング「ああっ!!!」

ミント「ウイング!」

ウイング「ぐっ・・・何の真似よ!?!」

グレム「あんたとの戦い、もう飽きたわ。全然話にならないんですもの。続きはまた気が向いたらね。ゼファーちゃん、帰るわよ。シヨウキ、後はよろしく。」

ゼファー「ガアアアア!!!」

そう言つて、グレムとゼファーはウイングを連れただま姿を消してしまつた。

ドリーム「ウイング!」

シヨウキ「グレムの奴、面倒なことを・・・」

レモネード「よくもウイングを・・・!」

シヨウキ「さて、ヒルガーウ、やっと続きが出来るぞ。」

ヒルガーウ「そうみたいだな。」

ドリーム「望むところよ!みんな!」

ルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズ「Yes!!!」

プリキュア5は一斉にシヨウキ達を攻撃しようと走り出した。

が、その時、シヨウキ達の前にザンゴが現れた。

シヨウキ「何?」

アクア「貴方は・・・!」

すると、ザンゴはゆっくりと両手を構えた。

アクア「!みんな!耳を塞いで!」

ザンゴ「無駄ですよ。」

しかし次の瞬間、プリキュア5は一斉に頭を押さえて苦しみ出した。ルージュ「うっ・・・!」

リイナ「みんな!どうしたの!?!」

レモネード「な．．．何なんですか！？これ．．．」

ミント「苦しい．．．どうして？」

ローズ「な．．．なんだか、気が遠くなつて．．．きた．．．」

アクア「みんな．．．駄目よ．．．負けちゃ．．．駄．．．目．．．」

ドリーム「う．．．うう．．．」

抵抗も虚しく、六人は意識を失い、倒れてしまった。

それを見て、ザンゴは笑みを浮かべる。

ザンゴ「ふう．．．」

シヨウキ「まったく、余計なことを．．．」

ザンゴ「仕方ありません。イワオさんの指示なんですから。」

シヨウキ「またあいつか．．．」

リイナ「みんなに何をしたの！」

ザンゴ「大丈夫ですよ。少しの間眠ってもらうだけです。」

リイナ「はああああ！」

すかさず立ち向かうリイナだったが、ヒルガーウの棍棒の一振りですかさず飛ばされてしまった。

リイナ「くっ．．．」

シヨウキ「．．．ふん、さっさと帰るぞ。」

ヒルガーウ「ちっ、仕方ねえな。」

そう言つて、三人は倒れているドリーム達を抱え、姿を消した。

リイナ「みんな．．．！」

リイナが途方に暮れているところへ、ようやく翔太が駆け付けたが．

．

翔太「．．．遅かったか．．．」

すぐに状況を理解し、翔太は表情を曇らせた。

リイナ「っ！！！」

悔しさのあまり、地面を思い切り殴るリイナ。

そしてしばらくの間、沈黙が続いた．．．

第21話「ウイングVSゲレム、過去の因縁」(後書き)

次回、仲間を救う為にルーイン帝国へ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7703t/>

プリキュアオールスターズUniverse&Wing～新たなる戦士の伝説～

2012年1月10日00時47分発行